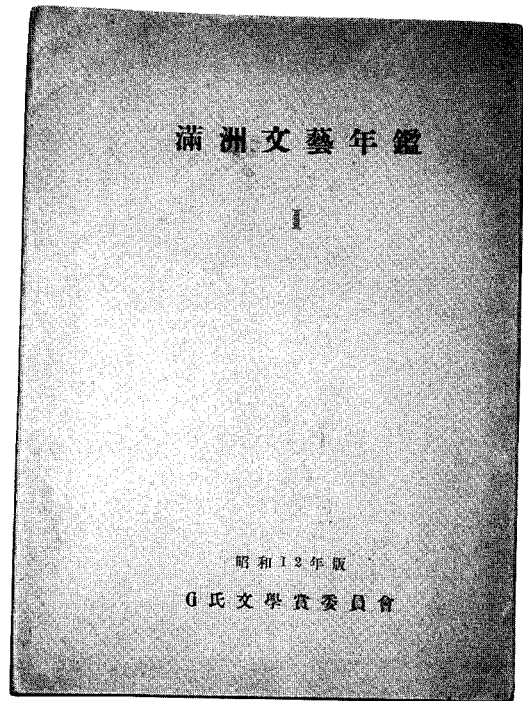


滿洲文藝年鑑

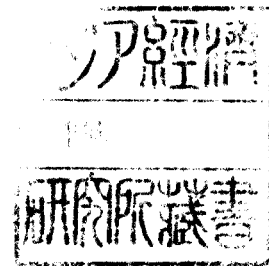
第一輯

昭和12年版

22
8
Ma 15
(1)



原本書影



編纂委員

青	大	落	近	小	城	平	福	八	横
木	内	合	東	杉		田	家	木	
	隆	郁	綺	茂	小		富	橋	澤
			十			滋	士	雄	
實	雄	郎	郎	樹	確	夫	宏	次	宏

滿洲文藝年鑑

第一輯

滿洲文藝年鑑 第壹輯 目次

評論

滿人の作家たちに就て 大内隆雄 . . . 一四

土地と文學 大谷健夫 . . . 一七

植民地文學の一般論として 西村眞一郎 . . . 二〇

在滿邦人の藝術的立場 古川哲次郎 . . . 二三

“麥の花”感・モンタージュ 横澤宏 . . . 二七

“麥死なず”を讀む 吉野治夫 . . . 三二

詩

水 井上麟二 . . . 四二

新京大同廣場にて 落合郁郎 . . . 四四

葬堂へ 小池亮夫 . . . 四六

汽笛 小杉茂樹 . . . 四八

胡桃割り 近東綺十郎 . . . 五〇

花筵 小碓 . . . 五四

ブラゴエチエンスクの空 島崎曙海 . . . 五七

秋 瀧口武士 . . . 六〇

距離 古川賢一郎 . . . 六二

雨の日斷章	古屋重芳	六五
それは私にはわからない	松畑優人	六八
Boiler room 二住△黄蝶	三好弘光	七〇
打たんかな	八木橋雄次郎	七二

小説

孫の不幸	青木實	八二
雪原	秋原勝	二九〇
友情	竹内正一	一九四
死亡室附近	富田壽	一〇三

齒車	福家富士夫	二一〇
雁の唱歌	町原幸二	二一七
紅葉	松原一枝	二二二
亂菊	三宅豐子	二三〇

雜錄

滿洲文藝人名錄	一四二
G氏文學賞規約	一四七
滿洲文藝年鑑規約	一四七
編輯後記	一四八

評

論

滿人の作家たちに就て

大 内 隆 雄

1
こゝでは現在呼び慣らされてゐる「滿人」といふ言葉を用ふることがやはり便宜であらう。それは滿洲國に住む漢人を意味する、日本人的用語例である。

「滿人」の作家たちによつては、従來は「北國文學」「北方文學」などの語が専ら用ひられてゐたやうである。最近になつて「滿洲文學」といふ呼び方が、滿人間でも行はれて來てゐるのを僕は見出す。

2
舊政權時代に於けるこの土地での文學を一瞥しやう。

例の五四運動がこの場合にも最大の刺戟を與へたのであつた。一九二三年頃から盛京時報の「神草雜俎」、東報の副刊、民報の副刊などが新しい作品を載せはじめた。

一九二五年頃、奉天基督教青年會の文學研究會と啓明學會とが組織された。前者は學生が多數を占め、後者は學校教員、新聞記者、各機關の下級職員らより成つてゐた。文學研究會は定期刊行物「奉天學生」を出し、啓明學會は「啓明學報」を出した。この頃の一群の作家たちには金小天、郭心秋、李笛晨、趙維語、趙鮮文、郝心易、趙石溪、周筠溪、周東郊、屈以誠、蘇子元、楊予秀、孫百急、王連友、吳以伯、羅慕華、張重羽などの諸君の名が記録されてゐる。

一九二六年の夏には奉天で春潮社が組織され、周筠溪、周奕愕らの諸君がこれに據つて「漫聲」を發行した。

一九二六年から二八年の間には、盛京時報の「紫陌」民報、晨光報、新亞日報などの副刊が多く清新な作品を

載せた。二七年秋には新亞日報は「綠痕」を、奉天商工日報は「文學副刊」を出した。王一葉、孫學生、楊一、張弓、張笑潛、王語絲、新痴女士らが多く書いた。

一九二八年の夏には王一葉らによつて東北文學研究會が組織された。また、東北大學の數人の學生は定期刊行物「夜航」を出し、張士弓は個人で「長虹」を出し、宋某は「關外」を出した。そのほか、國際協報、奉天日報の副刊が改新され、延吉の民聲報は鋭銳な「荒原」を出した。

3
一九二九年に單行本として出た趙鮮文の「昭陵紅葉」林霽融の「鮮血」、張露薇の「情歌」が注目された。白曉光、李別天、秋濤、朗烟、笏嘯、黃旭などの作家の名がまた記録される。

4
一九三〇年、事變前年である。滿洲の農村は恐慌にあへぎ、各地に土匪は續出、社會的不安は顯著となつてゐた。

當時の作家、丁煥文が農村恐慌を題材とした幾多の小説を書いてゐることを僕は注意する。

この三、四年、滿洲の文藝界は大體に於いて何ら觀る

べきほどのものがなかつたと、一人の滿人批評家は書いてゐる。中にはすでに進歩したと叫び、すでに文學の正軌に入つたといひ、いはゆる鴛鴦派を遠く離れたといひいはゆる胡適式の詩を離れたといひ、拙劣な批評と筆戰を遠く離れたと言つてゐるにもかゝらず、と。

この批評家は相當辛辣であるが、それでも注目すべき作家、作品に張弓の「後妻」、笏嘯の「死灰」、成雪竹の「性火」、蘇菲の「月亮上升」があつたことを述べてゐる。

僕は注目すべき現在、將來への作家として何禮徵、文泉、今明らの諸君を挙げたいと思ふ。

何禮徵君は滿洲帝國國民文庫第一集に「天下太平」を書き、滿洲評論社刊行の中國文叢書に「星期日」を書き協和報にも一作を發表した。その何れにも、滿洲農村のリアルな様相が描寫されてゐたのを僕は見ることが出来た。

文泉君には「賭徒」と題する連作がある。

今明君には「風夜」と題する單行本があり、それには「雨絲風片」「擔負」「羅四太太」「孩子底拍賣」「非非女士底日記」「畫家底煩惱」「這等人」「秋收後」「爲了生活」「三種雷同的人類」「風夜」の諸作が收められてある

このうち「三種雷同的人類」はさきごろ「滿洲行政」に拙譯を紹介した。在大連青木實君によつて大陸的な作風があると評されたものである。

そのほか泰東日報、滿洲報、大同報などの日刊漢字紙に投稿してゐる諸君に將來を注目すべきこの國の若い作家たちの多數の芽がある。滿洲國はさきに大同報をして各種のジャンルにわたる文藝作品を募らせ、その入選作を「滿洲帝國國民文庫」の名を持つ小シリーズとして發行しつゝある。すでに新小説二、新詩一、劇本一、傳記小説二、學生作品一の刊行を見た。

また滿洲國協和會では大衆小説、ラヂオ・ドラマなどを募集した。それから在奉天の協和會關係者中傑、陳健男、金覺生、蘇菲、姜熾非の諸君は昨春秋以來旬刊雜誌「新青年」を發行してこの國の文化運動を推し進めてゐる。同誌に連載されてゐる姜熾非君の長篇「灰色的命運與戰慄的人」は注目すべきものであらう。

以上はこの國の文學の現狀についての、粗雑なスケッチでしかない。僕たちは變革された條件のもとにおいて、この國の文學の芽は確かに伸び育ちつゝあることを確信する。

そして中國の文學との間に置かれた不合理な「隔絶」に反對する。

土地と文學

郷土文學と國民文學

文學は文化の一所産であり、文化は生活の一表現形式である。だから文學と土地の關係は、同時に文化及び生活と土地との關係でもある。

原始人の生活にとつて、土地は字義通り自然のままの「土地」であつた。そして、土地は直に彼等の生活を、草原地帯には牧人族、黒土地帯には農耕族と決定し得るだけの力を持つてゐた。しかし、人間の生活が複雑になり、大都會に人口が集中されて、そこにその國の文化が開花するやうになると自然の土地から直接人間の文化に働きかける力が弱くなる。バルザックの「人間喜劇」に見られるパリも亦一つの土地には違ひないが、そこは扮

大谷健夫

飾と豪華な人間の生活が、自然の本地を隠してゐる土地である。此の時の「土地」はもう原始時代の「土地」とは異つた意味の土地である。

バルザックの描くパリは、決して原始時代の土地のやうに孤立したものではない。世界各國の文化と交流し、世界の支配的な流行を造るところの「土地」である。王黨と新興ブルジョアの抗争があり種々な宗教、哲學、科學その他の思想が煙の如くこめてゐる。だからバルザックの描くパリは、一つの限界ある土地であると共に、全フランスの文化の縮圖でもある。

一國の文化が大都市に集まり、文學者も亦生活の必要上大都市に集まる以上、文學は郷土から離れて國民的になる傾向を持つてゐる。ポルトウの文學は一地方文學で

あるが、パリ文學はフランス文學である。同じ五平方哩の土地でもポルドウとパリではそれだけの差異が生じて来る。そしてパリの文學が世界文學を支配する場合にはもう國民文學の域を脱して、世界文學の中心となるのである。さうなるとパリの「土地」の持つ意味は原始人の自然そのままの「土地」とは、雲泥の差を持つたものに變化する。

國民文學が形成されると、郷土文學はより低い段階に踏み止まるのを原則とする。我々は郷土藝術から、素朴稚拙の連想を取り除く事は困難である。

國民文學と世界文學

國民文學は、決して孤立的な傾向を持たず、常に他の國民文學と交流しながら、世界文學の段階に向つてゐる。その過程は、國民文化から世界文化への過程と同一である。

ギリシヤ文學、基督教文學は、それが一つの土地を離れて、當時の世界（ヨーロッパ）文學を支配してゐた意味で世界文學だつた。基督教文學は土地との關係は殆ど稀薄である。しかし、文藝復興以後國民文化時代になる

殊に滿洲における日本の移植文學は、日本の國民文學の滿洲への進出である。その過程は、今まで私の説いた郷土文學——國民文學——世界文學の道コースを取る譯である。

滿洲の低い文化は、今のところ日本人の文化に殆ど影響しない。言葉も、風俗も全然違ふ。文學の變革には、必ずそれを必然とする文化生活が、その基礎に横はつてなければならぬ。そして、その基礎の變化と共に、その上に立つ文學も亦變化展開するのが自然である。

北川冬彦氏が「鶉」で、滿洲の詩人に滿洲色無きを難じてゐた。氏の「北方」には確かに滿洲らしいものがある。しかし、鴨綠江の筏や支那の野鷄を書くのばかりが滿洲的ではない。我々の作品も、滿洲に住む日本人の生活感情を正直に表白して積りである。我々は滿洲にゐるからといつて、決して日常、馬賊や、野鷄や、赤土や、驢馬ばかり考へてはゐないのである。プロ作家全盛時に批評家がある作家の原稿を見てプロレタリア的でないと言つたら、作家は即座にペンを取つて「かくて彼等は立上つてストライキにうつつた」と書き足したと言ふ挿話がある。私は滿洲の作家が、北川氏の忠告を重大視して

とフランス的、スペイン的、ロシア的等の文學形式を作つたが、一たん分化した文化は、又單一化する傾向をとつた。メリメエの「カルメン」はスペイン的であるが、セルヴァンテスの「ドンキホーテ」は一人の人間の型として、沙翁のハムレットと並稱されることによつて既に世界的である。バイロンも、英吉利の國民文學から見ると、その出現が唐突に見え、叛逆者と目されるが、全ヨーロッパ文學の發展過程から見れば、當然の出現である。ロシアもゴーゴリはまだロシア的だつたが、トルストイの文學は、その思想の支配的であることによつて正しく世界文學である。諸威では、ビオルンソンには北歐的な地方色が濃厚であるが、イブセンに至つては、そのテーマが婦人問題、遺傳等を扱つてゐるので、其處に描かれてゐるのは諸威の小市民の生活であるが、その問題の普遍性はイブセンを、世界的作家にしてゐるのである。イブセンの劇が世界的なのはそれが諸威的だつたからではなく、世界共通の興味ある問題に觸れてゐたからである。

植民地文學について

私は最後に、植民地文學の問題にぶつかる。植民地、

その作品の中に無理に赤土や馬賊をくつつけたり、支那への生活感情の理解なしに、無暗に支那人の固有名詞をはめこむ事を恐れるのである。

大内隆雄君は、滿洲人作家が支那の北方文學を此の地に樹立する意圖を持つてゐると言つた。私達は日本の北方文學をして、生彩あるものにしたいと考へてゐる。

植民地文學の再検討

—— 植民地文學の一般論として ——

西 村 眞 一 郎

その國家的使命

何が故に我々は滿洲に存在し、生活してゐるか、との命題は、我々が滿洲人にとつては凡ゆる場合に必要であると同時に、それは文學者の場合にも亦必要缺くべからざる意識でなくてはならない。

で、私の植民地文學といひ、滿洲文學といふも、つまりは、この命題に出發する。だから、それは關東州をも含めて滿洲に生活してゐる在滿邦人の文學を指すのであつて、鮮滿漢蒙その他の人種がそれぞれの言語を以てする文學でないことは説明するまでもない。だが、併しなから中には往々にして公式論にとらはれて滿洲といへば直ちに滿洲國と解する人もあることなれば、茲に一應の

前提とする。

とまれ、植民地文學とは、一般的には植民地政策に基調を置くところの文學であつて、植民地は單に本國の過剩人口の捌け口に止まらず、其處に産業、經濟、軍事の施設その他凡ゆる文化を建設し、且つ移植民の土著精神を培養する傍ら、他面には既定土著民衆を指導し、向上せしむる任務乃至使命が課せられて居り、それは一時的な政策にあらずして永久的な、時に侵略占據の意味すら附加されてゐる場合さへあることは今更縷説するまでもないことである。

かゝる國家的使命を有する土地の文學は、當然かゝる國家的使命の線に沿うて、時には積極的な一步前線を進軍するところの文學でなくてはならない。文化史上に於

て文學の演じた役割は往々にして政治的運動乃至は工作よりも前線にあつて世紀の喇叭を吹き鳴らすことがあつたのは、あなたがちプロレタリア文學運動の例に徴すまでもなく、歴史の證明するところである。

實に我々の植民地文學にあつても、滿鐵による經濟線の進展よりも遙かに進んだものでなくてはならないし、其處には文學自體にとつても未開の處女地があつた筈である。だが不幸にして我々は、眞の先輩をば植民地文學の上に持たずして今日に及んでゐる。

強化と指導

その昔、滿洲へ、滿洲へと流れ込んだ人々の生活感情——それは確かに特異なものがあつた筈である。爾來、

日本の滿洲工作三十年の歴史は、内地との交流のもとに獨自な社會生活を築き上げ、そうして現在の我々の生活感情、慣習態度をば決定づけた。それは當今の文學者諸君の鋭敏なる頭にも映じてゐることであらう。これ等も亦植民地文學として當然取り上げねばならぬところのものであるが、紙數に制限づけられた本稿のよく論ずるところではないから他日に譲るとして、我々は再び一般論

に立ち返ることにしよう。

植民地文學は前にも述べた如く植民地強化の文學であり、指導の文學である。このことは植民地に於ける邦人の精神生活の指導乃至は向上を意味するのであつて、先住土著民に對するそれではなく、例へば植民地を出稼ぎ地と解するが如き思想に對する挑戦も亦その一つであり土著精神の植樹は、とりもなほさず植民地の強化に外ならぬからである。私の見解は決してスロガンにあらずして文學の持つ社會性を強調するに過ぎないのである。

で、植民地が植民地強化の文學であるならば、楯に両面があるが如く反植民地思想に立脚する文學が當然存在することになる。元來、反植民地思想の構成要素は、或る一定國の植民政策下に在る土著民の思想體系ではあるが之れに同情乃至は利害を共通するといふ見地から共鳴するものゝ思想も含まれる。この方向の文學も亦、植民地文學と名づけられ、その一部門たり得るであらうが、我

私は茲に多くを語る要を認めない。さて、次に注意を要することは植民地をとりあげることに關聯して所謂滿洲色云々の見解である。が、單に滿洲色を盛入れることを以て植民地文學乃至は滿洲文學と

見做すならば、それはサシミでマントウを嚼るに似たものであつて、そのみを以てしては植民地文學とはいひ得ないことは改めて斷るまでもないことである。

それ故に私は再び云ふ。植民地文學は植民地強化の文學であり、植民地指導の文學であると。そうして植民地文學のためには何よりも先づ植民地社會の研究が必要缺く可からざるものであらう、と。

在滿邦人の藝術的立場

古川哲次郎

滿洲に居住して居る我々日本人は事變後加速度的に膨脹して、現在では約四十萬人に近いと云はれてゐる。この數字は勿論、百二十數萬と算せられる在滿鮮人をオミットしたネット日本人數である。人口四十萬といつたら母國では京都市位の人口に該當するのではあるまいか、面積上に於ての滿洲は（關東州も含めて）日本の數位の廣さに當るが、そこに散在する邦人は母國の一都市の人口位しか居住してゐないわけである。斯様な比喩が許されるならば——四疊半長屋に十人近く雜魚寢して暮す労働者の生活と宏莊な邸宅に極く少數の人間が暮す金持の生活との表面的な對照に似てゐると云へよう。

これら在滿邦人の決定的大部分は滿鐵を初め鐵路總局其他の會社官廳に勤務して生活の途を開いてゐるサラリ

ーマン階級である。そして或る一部分がこれらの人々の消費面に於て生活する商人であることは私が茲で述べる迄もない。従て在滿邦人の文化生活面が考察されるときは、先づ第一にサラリマン階級といふものゝ一般的解剖から出發し、その規定の上に立つて、滿洲の特殊な政治、經濟、文化といつたものゝ影響を考慮して考察されねばならないのではないかと思ふ。私の在滿邦人觀の方論といつたやうなものは右の如きものである。

數年前、中央公論、改造等を中心とするジャーナリズムが「サラリマン論」なるものを八ヶ間敷論議したことがあることを記憶してゐる。それによればサラリマンといふ階級はインテリ層であつて、俸給生活者であるが故に社會に於ける經濟的基礎は薄弱であり附和雷同的

素質を多分に持つてゐる爲、時の輿論勢力によつて決定的なまでに支配され動かされ易いものだといふことであつた。丁度社會の二大階級の間中に位して、いみじくもはかなき浮草のやうなものだといふことである。「青白き手」なる代名詞を貰つたサラリーマン階級は、その社會的意識として常に上の階級（資本家）の層にばかり目と注意を走らせ、現實の生活を一步でも向上させ、その階級に近づくことを最大の、そして最終の目的として居ることであるといふ。斯様な甚だ名譽ならぬ言葉を戴いたといつてもサラリーマンの總てが一律にさうであるといふのでは勿論なく、一般的にといふ意味である。

さて、在滿邦人の大部分が斯様なサラリーマンでありその家族によつて形成されてゐるのであるから在滿邦人の生活形態や意識といふものも基本的には右のやうなものではなくてはならない。そして我々サラリーマンと内地のそれとを比較して考へるとき、滿洲の我々は異つた環境に置かれてゐるといふことが先づ第一に考へられるのである。内地のそれは同じ民族同胞の裡で異つた階級を構成してゐるのであるが、滿洲のそれは異つた民族によつて作られた國家の裡にあつて一つの階層を爲してゐる

のである。これを分類的に考へれば、一つのカテゴリリー内に於て同じ性質（民族といふ）のものがしかも一つの部分（サラリーマンといふ階層）を作つてゐると、一つのカテゴリリー内に於て異つた性質のものが、しかも一つの部分を作つてゐるといふが如きものである。異つた土地（内地と）に於て異つた民族と接しながら本質的にサラリーマンの生活を續けてゐるといふことが、我々が在滿邦人の特殊性であり總てである。これこそ在滿邦人の生活を客觀的に決定する一般的條件でなければならぬ。更に、この條件に政治、經濟的肉を加へなければならぬ。在滿邦人サラリーマンの生活といつても、これに政治的要素（例へば植民地意識）とか經濟的要素（月収に於て内地のそれより幾分恵まれてゐる）等が加へられて始めて具體的な條件となるのであるがこの點に就てはこゝに觸れることを避けて、單に民族接觸といふ點を以て下具體的に考察したいと思ふ。然しながらこの考察上に於て在滿邦人の政治、經濟的立場といふことを無視しては具體的考察が出来ようはづがなく、出来てもそれは抽象論となることは必然であつて、以下その片鱗が現はれることは不得己ない。

在滿邦人の文化的生活に於て、滿洲人に對する民族意識の優越性といふことは最も重要な問題ではないかと考へる。それであるのに在滿邦人作家達には、餘りにも重要視されてゐないかの如く私には見受けられるのである（一部の人達には眞剣に問題として取り上げられ、過去の作品のうちにもそれらの意圖が觀取されてはゐるが）二つの民族を對比するとき優越性を持つ民族とは高度の經濟組織を持ち、從てその上部構造たる文化の高度性を所有してゐる民族を指すことは、大和民族と漢民族とを比較して見ても判ることであつて、漢民族（滿人）の中にあつて生活してゐる我々大和民族がその生活に於て切實に民族的差別感情を持つことは極めて當然のことであつてこの差別感情とは優越性を意味するものである。斯る感情は子供に至るまで所有して居ることは、よく街頭で日滿人の子供同志が言ひ争つてゐることを見ても判る。我々だつて一應は理論的に日滿人の私權的平等を肯定し得ても否定し得ない民族的優越感は何ともしずるとは出来ない。我々はよく滿人と同化する、即ち滿人の生活感情の中に我々の感情を融合させる、そしてこそ、

そこに於て日本人の滿洲文學なる特別なものが生れてくる、といふ理論を聞くが、果してそれは可能性を持つものであらうか。恐らく日滿人の經濟的、文化的の差別が撤廢されない限り如何に個人的に努力しやうとも民族的の差別感はず消えさるものではない。滿人の生活感情と同化しやうとしてもそれはあくまで表面的事象に過ぎず日本人である限り、その優越感はず心の底に於て否定することは出来ないであらう。若し或る日本人が滿人と同様な生活を數年間爲し得て自分の生活感情は完全に滿人のそれと同化し得たと云ふならば、その人は自分自身の心を作てゐると云はなければならぬ。よしんば二世であらうとも、我々は生れ落ると同時に——各民族よりも特に民族意識の強い——日本民族の子孫たる先天的血統を持ち、日本民族たる誇りの環境に育つたものである限り、日本民族たるの感情は後天的に打消さうとしてもそれは無駄な努力に過ぎないであらう。國際結婚の不幸な破綻は民族的な習性と差別感情とが最大の原因である。さらばこの先天的に背負された拭ひさるることの出来ない民族的感情と意識とを我々日本人は如何に意識的に導いて行かねばならぬかこれが滿洲文學に果せられた一つ

の大きな任務である。滿洲文學こそ日滿人の民族的感情を調和さし所謂「日滿親善」の實を擧げるものでなくてはならない。即ち基本的に差別された兩民族の生活感情を差別されたものとしてハイモニーさしてゆくことこそ滿洲文學の輝ける使命である。それには我々の生活感情と民族的感情を洗練させねばならぬし、それと同時に滿人の生活感情と民族的感情とを或る程度まで理解せねばならない。

以上、走り書き的に日滿兩民族の關係と滿洲文學の民族に對する根據を明らかにしたが、これはあく迄横斷的な觀察であつて、現在では特にこれら民族と民族との關係の中にあつて諸階層を織りまぜた從斷的なより深い、それ故により具體的な考察を爲さねばならぬのであるが後日その増補を期すことにした。

「麥の花」感・モンタージュ

1
A・ある日本畫家が、友人の洋畫家をつかまへて斯ういつた。

—洋畫は簡單だからいゝな、觀さへすりやあ描けるんだもの。

ところが、その洋畫家はあべこべに酬答した。

—冗談ぢやないよ、日本畫の方がもつと簡單だ。……だいち日本畫は觀なくつたつて描けるぢやあないか。

こんな小話を最近何かで讀んだ、讀んだ後で、私は今まで詰つてゐた鼻がツーンと通つたやうな示唆を痛いほどに感じた。

B・諸行無常といふ。が、この眼のあたりみる無常形

横 澤 宏

の根柢には更に「骨法形」と稱する基礎形が潜在して、常に無常形の轉變に働きかけてゐる。しかも骨法形は過去、現在、未來に共通する、遠の形だ——と私達は子供の時分から教へ込まれて來た。

日本人が自然を觀る場合、客觀的に觀ることをしないで必ず主觀を交へる。譬へば自然と人事を結びつけて考へる、或は自然を全然主觀的に改造してしまつて、その上で初めて自分のものにする。是が自然に對する日本人の特徴（或は特長）だと、最近私達は臆氣が出さうなほど聽かされてゐるが、子供の頃から教へ込まれて來た諸行無常感と併せ考へて、何かしらそこに繋がりのあるやうな氣がしてならない。

C・さて私は、こゝで第一回G氏文學賞を授賞された小杉茂樹氏の詩集「麥の花」をとりあげてみよう。

小杉氏の態度―氏の詩集「麥の花」を讀んで私達の第一に感じられるのは、自然に對する氏の眞摯な態度だ。集中どの一篇をとり出してみても、そこに焼きつくやうな、瞬きを忘れたやうな自然への凝視がある。しかも私は、この射るやうな凝視の蔭に常に「二つの眼」を意識する。一は小杉氏が自然を凝視してゐる眼、他は自然が小杉氏を凝視してゐる眼だ。(後者には色々の緊切な問題が内包されてゐるが茲では深く觸れない)そして、この相對する二つの眼から放射された二本の凝視線が中間の或一點で結びつく、こゝに初めて氏獨自の自然(ポエジー)が形成されるのだが、同時に私は、そこに永遠なるもの(所謂骨法形)への憧憬と、それを捉へようとすゝる逞しい氏の意欲を感じる。

民族的共感―この二つの「眼」に捉へられる自然は、最早私達の網膜に映するありのまゝの自然ではない。「往日の海邊から」寄せて來る白波があつたり、「骨の中」を流れる雨風があつたり、そして「鷗の羽音」が悲しい表情をみせたりする。所謂主觀に透過された超自然の姿

である。といつて、そこには街張も好奇もない。素朴なポエジーに染出された卒易な表現が、しかも、あやしいまでの切なさを以て私達の胸に「民族的な愛着」を流し込んで來るのである。

2

D・「幻」と俳句

病鶴は羽根をたゞみ、片脚に軀を載せ

瞳に映る空の或る一點に凝視する

冷い喙を慄はし、聽て鶴は幻覺の野に飛翔を企てる

彼女は地と離れる

蹣跚き乍ら 梢に低く 山脈の脊にしたがひ そのま

ま空に消えていつた

いつの日だつたらう 眼巡らせば病鶴は落日の齡の上

に同じ姿で佇つてゐた。―「幻」―

これは詩集「麥の花」に收められた作品の中で、私の最も愛誦する一篇である。(また詩としての價值からいつても、恐らくこれが集中の白眉だらうと思ふ)ところで私はこの詩を讀むたびに不思議にも次の一句を想起する誰の句だつたか、何處で見たものだつたか、すべて忘れてしまつたが、妙に心奥深く判然と記憶されてゐる一

句である。

凍鶴のふたたび閉ぢし喙哉

E・近代詩論の訂正―曩日詩滅亡説に端を發して日本詩壇に激しい論争が展開された當時、わが國における近代詩の形式(即ち新體詩以後)は西歐におけるそれを輸入したものであつて、その内容も自ら西歐のそれに沿うたものである。従つて西歐における詩が今日科學と共に隆昌を極めてゐる如く、新たなる西歐精神にスタートした日本の近代詩も滅亡どころか、當然將來の繁榮が約束されてゐるものだ、との論が頻に唱へられたものだつた。ところが皮肉にも、かうした詩人達の舌の根が乾き、らない内に、突如文壇の一角に「萬葉へ還れ」「日本精神を見直せ」の叫びが沛然として湧き起つて來たのである一體近代詩は今更どこに引込みを見つけ出すべきだらう。近代詩は當然こゝに「詩論」の訂正を行はなければならぬ。

3

F・安西冬衛氏が俳句に對し特に關心を持つてゐたといふ事實は私達に興味ある一つの「問題」を提出する。

現に安西氏が屢々試みた短詩の如きは、瞭かにこの「問題」への答案を意味するものと私はみてゐる。

俳句精神と近代詩の接觸―ただ、この場合安西氏は極めて知的にこれを實踐した。

今手もとに氏の作品がないので具體的にこれを説明する譯にいかないが、後日機會があつたら、この「問題」を深く検討してみたいと思つてゐる。

G・大正十四年、私が丁度京都に居つたところのことだ。

出版されて間もないルナールの「葡萄畑の葡萄作り」

(岸田國士氏譯)にすつかり心酔して了つて連日連夜そ

のやうに大連の安西氏と文通をしてゐたので、早速この素晴らしい新刊書についての感想を氏のもとに申送つたものである。すると安西氏から折返し返書があつて「自

分も直ぐさま買ひ求めて讀んでみたが、「一讀忽ちにして首ツたけになつてしまつた」といふやうなことを言つて寄越したことがあつた。

ルナールと安西冬衛氏―その後私は、ルナールがポール・フォールやポール・クリシュエ等と共にフランスに

おける俳諧詩派の詩人であることを識つて善意的(?)
苦笑を感じたことがある。

まさに俳句精神の逆輸入だ。(尤も、この場合俳句精神が西歐において知的洗禮をうけて來てゐることを見逃してはならぬ。)

II・私が小杉茂樹氏の詩「幻」と「凍鶴の再び閉ぢし
驗かな」の句とを並べて、そこに一脈の聯關を感じるの
は、小杉氏のボエジーに底流する俳句精神への共感に據
るものである。無論、こゝに流れてゐる俳句精神は既に
知的洗禮を受けたそれであることを忘れてはならない。

詩「幻」が持つ東洋的な諸觀は、そのまゝ「凍鶴」の
句の内にも感じられるが、前者は後者には感じられない
批判性で我々の思想を強くひきずつて行く。

この批判性こそ、俳句精神の新しき相貌といふことが
出來よう。

I・ポール・フォールは俳句について次のやうなことを
いつてゐる。

——一滴の露に含まれた無限。

さて、私達の眼前には斯うして消化された多種多様の
自由詩がゴロゴロと横はつてゐる。この多數の中から私
達はたつた一つの詩を選ばねばならない。將來に受け繼
ぐ道は一つ以上あつてはならないのだ。

どの道を探らうか。

私達は今その難問題に當面してゐる。こゝで間違つた
ら大變なことになるのだ。お互に慎重に、あわてゝはな
らない。

現代の詩人の持つ重要な「意味」がこゝにある。

M・安西冬衛氏から小杉茂樹氏へ——滿洲詩苑、方向探
知器の一廻轉。

N・私は曾て小杉茂樹氏とは一度も面晤の機會に恵ま
れてゐないが、その作品に對する舊好は相當久しいもの
である。

幸ひ昨年「麥の花」の一卷を贈られたのをよすがに、
豫て心ひかれる氏の詩格を探るべく思ひたつた。

爾來一年、私は幾度か實行に移らうと企てながらも、
遂に今日までその意を得なかつたのである。ところが、

——清らかな爪にうつる大空の荒れもよひ。

——小さい双眼鏡から窺つた大洋の壯景。

私は、このフランス詩人の俳句觀に大きな共鳴を感ず
る。

4

J・俳句精神——「無常形」のモニタージュによつて「骨
法形」を把握せんとする詩精神。

K・小杉氏の場合——自然に對する二つの凝視線が偶々
平衡を失つた時、氏の詩精神は時に破調を示す。例へば
「麥の花」における「早春」「疎林」の如く……。

L・詩話會(大正十年頃)は新體詩以後の日本詩壇に
海外からの自由詩型を充分に攝取し盡したることによつて
その役目を終つた。また、それだけで詩話會の存在は偉
大であつた。

詩話會以後の日本詩壇は、詩人各自が思ひ思ひの立場
に立つて、海外から攝取した自由詩型の消化に没頭した
勿論、この時期はこの時期として大きな意味を持つてゐ
る。

そこへ突然G氏文學賞が飛出して來たのだ。もう一刻も
猶豫は出來ない。

私は一年がかりでとつたノートの中から「麥の花」に
關する斷片を拾ひ集め、間に合せの襤褸きれを適當につ
ぎはぎしてこの急場を兎に角もきり抜けることゝしたの
である。

これをモニタージュなどは鳥詩がましい。寧ろ落書
以下である。私は、この不潔な文章が小杉氏の詩集「麥
の花」の名譽を却て潰しはしないかと恐れるのだ。

幸ひにして讀者は私より遙かに賢明である。翼はくば
この斷片を解體して再編輯し直し其所に明快な統一と、
正當なる結論とを導き出して欲しい。私は最後に讀者の
頭腦に絶對の信頼をかけて、この落書以下を終らう。

「麥死なず」を讀む

吉野治夫

1

「文藝」八月號は五百枚近いこの創作一篇で世に訴へた「五十嵐は、この問題で三つの場合を考へてゐた……第三は素材を生のみで吐き出し、作者の恨みつらみも一緒くたに織り交せて心ある讀者が頭の中で一篇の小説にまとめ上げられるやうな赤裸々な記録を綴ること——すなはちこの文章がそれだ」と作者は自ら述べてゐる。現實の綱み方にも種々ある。「見よ、私は現實をかくとらへた」とばかり鵜が魚をくはへたやうにスイ／＼と浮んで見せる作中の現實もあれば、現實に食ひ付いて反つて現實に釣られた作家が、鰻のやうにキリ／＼と糸に巻きついてゐる姿もある。「麥死なず」は正しく後者で、定評ある如く一片の嘘もない苦闘の記録をそのまま提出さ

れた讀者は、作者と共に苦しむか、努めて理解するか、放棄するか以外に讀む方法がないやうに見える。少くも小説の中に水彩畫を見出して、悟つたやうな涼しい氣持にならうといふ種の讀者には讀めない。現實をくはへた鵜はまだしも、現實を高見の見物した易々樂々たる作品に比すれば、この作品は堂々(?)四百八十枚の量などの秤にかゝらぬ價值がある。

一部の讀者——私もその一人だが——にとつて、この作品はいやらしい。それほど作中の言葉を借りると「五十嵐の氣持は自棄的に直接的なもの、生なもの、あくどいものへの表現慾」に執拗に迫つていく。だが、決してそれは特殊な世界ではない。平凡な世界の中に、多くの人が故意に追究を避け、または感じ得ないでゐる心理欲學だと面白い罵倒の言葉を持ち出したが、その罵倒者に「書かれてゐることは、すべて事實であらう。文字に現れた限り嘘は一つもなからう」と認めさせるだけでも小説作家としては容易な心構へではないのである。谷崎潤一郎氏が、その粘り強い鰻巻きを官能と美の世界へ向けて登場した當時を何となく聯想する。石坂氏は心理と現實へ巻きついて行つた。

求反省を丹念に、克明に追究告白して、告白に終らず、之を我々がプチブル的教養から受けた弱くして折れ難い倫理を以て、如何に受太刀なりとも絶えざる呻吟と共に批判を止めない。小林秀雄氏は「この作品の特色は主人公の自己嫌悪や幻滅感が心理的告白に終らず、遂に獨特な倫理的奉願となつて讀者に訴へる點にある」と巧いにつてのけてゐる。まだ作品の社會的意味については、今日のインテリゲンチヤの混迷や絶望を題材とした小説の數多い中に、この傾向の最も墮し易い「心理風景小説」に終つてゐない點を指摘してゐる。

風景どころではない眞剣な戦ひの態度だけが、恐らく讀者の心を打つ唯一の力であらう。これに對し同じ東朝「槍騎兵」欄で、林房雄氏がまた顔を出し「これは反動小説である」と雑刀をふるつた。「世間も我が家も共產主義はあらかた終熄したものであらう」といはれては一言なかるべからざる立場は分るが、作家の取つて階級的立場そのものに食つてかゝるのはその限りのノンを表明するに終るのが例で、一應「反動的」と呼ばれるものへの理解の用意は示しても、捻込みに行く前に準備した前口上のやうで、作品批評であるよりは辯解と聞える。洪水哲

表現形式に新鮮、また驚くべき何物もない。言葉などに精力を打込んでゐるべき餘地がないのだ。もし、そこに尖鋭な表現が見出されるとしたら、それは技巧でなく觀察と分析、尖鋭が自らさせる業に他ならない。主人公の生活は作者の體當りの激しさを度はづれに感ずるほど平凡で、起つてゐることは、新時代では、寧ろ日常茶飯に屬するかも知れない。ただ、その良心的インテリとしての敏感な反響と自己を責める苛酷さが一篇の力である。甘えたと思ふ點は殆ど見出せない。芥川龍之介は志賀直哉に對して天衣無縫の感歎を送つたが、この作での作者は直哉以上の素裸を示して蔽ふところがない。これもまた、作家的冷酷と生活的情熱との間に矛盾を示さぬもの一つだらう。

新しい倫理に生きようとしながら、殆ど神經的に舊態依然たる倫理に取圍まれて、肉體と共に苦しみつゝ時代のプロレタリア運動に加へてゐる批判は「彈ね返して敵を追ひ窮める積極性には缺けてゐるが鈍いながら守りの堅さに於て優に乙上の評點に値する」(作中)手並だ。

プロ運動の中に數多くむらがる偽善者達にとつては、相當以上に手痛いメスを掌中にしてゐるといへよう。然し作者は、そのメスを持つて北叟笑むことを戒め反つて自ら掌を傷つけつゝ、己れを偽らざらむとして(牧野の言を斷片的に孤立させて検討するは當を得ざる節もあらん。されど、このあたり五十嵐は鬼の首でもとりしやうに得意なる思索なり)等と自信なげに率直に表白してゐる

この當然自信もない一個の小市民のマルキシスト批判に對して、林氏の如くガミガミと嘯みついたところで一輩の輩は弱けれど倒れず「麥は死なない」のである。

社會的意味からいつて、この良心を棄て得ない現代のインテリの昏迷と惱みは、反動的意義があつて、他の何の意味もないかも知れない。少くも、これからあるべき問題への暗示でなく、あつた問題の自らに容赦なき日誌

に過ぎないが、ここ數年前までブチブル・インテリゲンチヤの恐らく誰でもが持つた虚無的不安の記念碑としては充分残るものである。同じ東朝紙上の山川均氏「知識階級の逃避性」を合せ讀むと面白い。今氏の言葉に借りると。

「インテリゲンチヤの社會的、政治的關心は、かつては社會科學に關する出版物の氾濫を招致したのであるが、今日は碁や將棋や……かういふ關心の變化はもちらん、いろ／＼の事を意味してゐる。インテリゲンチヤが、かつて社會上政治の問題に示した熾烈な關心にしても、それはインテリゲンチヤ自身が問題を造り出したのでなく、外から提起せられた問題に應へたものだつた。プロレタリア勢力の敗退は、少くも、かういふ立場にあるインテリゲンチヤにとつては、問題の消滅であり、關心の對象と動機の解消なのだ……インテリゲンチヤの關心の變化は、まづ第一にプロレタリア勢力が彼らに働きかける迫力を失つたことにあつたといはねばならぬ。しかし、眞實には問題は消滅したのではなくて形をかへたばかりでなく、新たな問題が提起せられてゐるのであるが……。そこで、もう一度

知識層の心的状態、ないしは心構への特徴の推移したあとを辿つてみよう。大正の後半から明治初年の時期には、プロレタリア勢力の擡頭とプロレタリアの立場からより社會的變革の問題となつた。知識層は、これらの理論と實踐とを全面的に肯定せぬまでも、現代社會と現代生活とが、まさにさうした轉形の過程にあることを感じ、そして、どこかにそれを遂行する力の動いてゐることを感じたのであつた。彼らは、このことによつて、ともかくも希望をもち、見通しをもつことができた。そして彼らはこの過程に、積極的に參加してゐるとさへも感じてゐた。……プロレタリア勢力の敗退と無力の暴露とが、彼らから自信と、希望と、見通しを取り去るにつれて、頹廢的享樂と、社會的政治的無關心と、虚無的傾向とを特徴とする時期がきた。

この知識層の問題回避、現實逃避の通路を「精神的」な趣味や修養にみちびいたことは非常時の壓力により「國民思想統一」の勝利といへる。大正の後半——昭和初年の時期に社會的政治的問題に對して知識層の示した強い關心は、プロレタリア運動をその實勢力以上に錯覺的に評價させる誘引の一つとなつたものだつた

そしてプロレタリア運動の側における、かういふ自己陶酔的な勢力の過大評價が、また、次の時期における無殘な敗退の條件を準備するものだつた。それほどに知識層の關心は強かつた。そしてプロレタリア運動の理論上、實踐上の進展と共に、知識層の社會的政治的意識もまた高められた。それだけに知識層が、ひとたびさういふ問題に興味を失ふと、反動的當然に強かつたことは豫期せられることだつた……。」

氏は、こゝで、では問題は如何に形をかへたのか、どんな新たな問題が提起せられたかに就てはフアジズムへの消極的態度より以外には觸れてゐないし、また、かういふ知識層の逃避が果して非常時の壓力による「國民思想統一」の勝利であるかは疑問だが、とにかくかゝる意味のわれらの時代小説の記念碑として「麥死なず」はその消息を文學的に眞面目に傳へ、一小論文の充してくれない要求を充してくれる。アキの新時代への出奔が彼女にとつては案外思つたほどのものでもなかつた運動への熱意を霧と失せ、結局一人の鐵の如く見えた男への戀愛に終つたり、牧野が同志間で「やられた」と思つたり、肉的魅力に必要以上の情熱を傾けたりすることはこの間の

姿を髣髴させるものがある。

3

山東賦夫氏は「誰の智慧も何の思想の力もかりずに、その間に正しく處して行かうとする身構への逞しさ」を擧げ「どんな眞實からも顔をそむけず、その眞實を知つて有頂天になつたり、また頹廢的な表情でそれを突放したりしてゐない」（讀賣）といつてゐるが、頹廢的な表情は充分しても、まだ突放さぬ所に驚くべき粘着力がある。その苦しみに正しく處したか否かよりも、この作者の精進のために乾盃する山東氏は恐らく近代作家の作家的精進乃至は自己批判の不足をこの一篇を藉りて突刺したのであらう。

形は如何に變つても、文學は現實の再現に他ならないこの時、いはゆるブルジョア文學は現實を如何に解釋したかを述べるに早く甚だしいのは、現實に指一本突込んで見ることもなく、匂と風だけを嗅いで、わが觀念を美しく語るに落ちがちだ。怒り頭のいゝインテリといふものは、とかく觀念ばかり先に發達して、油斷する間に忽ち追越してゐる現實には氣づかない。或ひは又觀念が比較的單純に整理されて、あらかたのことを一刀兩斷に臆

面なく裁斷できる自惚れと勇氣を持つものが、頭腦明晰と稱される。然し眞に頭のよいことは、最も複雑に敏活に廻轉して、遂に自ら統制をとり難くなるとも現實と觀念の辨證法的連續關係を忘れ得ない頭だ。これは一見遲運としてゐるが、正確な歩みを持つ思考で、辨證法的と自信し實は觀念的な思想に頼り縋つてゐる一部のプロ作家よりは強力な頭だ。牧野を尊敬しながら、牧野の弱點に氣附いてゐる五十嵐の喘ぎと、五十嵐を輕蔑しつゝ、アキの魅力に傾倒し、理論附けは凡て思想（既成品的）にかりる牧野の強さは、その人間的實力果して如何と考へるとき、作中木村又八君と牧野と五十嵐の三人を人間修養の三タイプとして批判して見た一節など常識的ながら面白くこの邊の問題を指してゐる。又常識以上であることは屢々自分を裏切ることだ。

かゝる力で現實に對するものは、決して觀念から先に出發して現實に向ふやうな最も幼稚な不徳をなすことなく、現實に塗れては觀念に訂正を加へていくもので、レアルな底面との格闘に費す精進は前者と比較にならぬ。而も愚な讀者には前者の方が遙かに優れた「物を教へてくれる」人であることが少くない。主觀的な現實説明や

自分のイデーの美しさを示す作品に満足しない、レアリテに對する欲求の強い者は、常に現實と手一杯に戦ふあまり、それに破れがちで、身を以てその前に惨めな襟袵姿をさらけ出す。その上で聰明な上品なスタイルをして立つてゐる前者は、いはゆる文學者らしい軽い憂鬱な顔を以て女の子や、青いアマチュアの尊敬と憧れに吹かれる「麥死なす」の作者などは多くの讀者を持つことは出來ないかも知れない。何故ならば、作者に教へられたり、美しい風景を共に楽しんだり、共鳴したりする讀者は多くとも、作者も投げ出された現實を凝視して、作者からでないその現實に教へられようとする讀者はまた、その少數の作者の一人に他ならないからだ。

文學の役目には理想を書いて人心を指導する立場もあれば、現實を記録して、その中に教へ（廣義の）を拾ふにまかせる立場もある。何れの場合も特殊の讀者を必要とするにちがひないが、現實を苦しんだまゝに見せられ、これを読み続ける者は前者より少い。

問題を大きくすれば、それはトルストイとドストエフスキの讀者の差ともなる。

「藝術の目はトンボのやうに複眼だ」と「麥死なす」

の作者はいつてゐるが、複眼を待たぬ者にはたゞ、それが難然たる分も解らぬ狂氣じみたものにしか見えない。だが、また全く複眼の藝術家にとつても、結局「自分が昔からイヤといふ程知り抜いてゐることのほかにほんにも無い」といふ寂しさがつきままとふのだ。嘉村磯多、葛西善藏等の作家は、小規模ながらみなこの類に屬した或ひは文學者のみに愛せられる眞實の追求者かも知れない。

4

「麥死なす」はまたアキといふ一つの女の型を描いた。これがかんり評判となつてゐるらしい。アキは一種特殊な女のやうに見えて珍しくない。われ／＼の身廻りにこのタイプ又は卵位は容易に見出せる。

頭がよくて我がまゝで、自分に好意を持つ人間に弱くまた持たすことに巧で、持たさねば氣が済まない。色氣が多く、氣分の浮氣で己れをなぐさめ、感覺的欲望がつつしみを破つては、それを一應理論的に辯明することを忘れない。自尊心が強いのでお世辭には一たまりもなくくづれ、歡喜の頂點に立つとポツとして神がかりのやうな状態になる。描いた夢をいつの間にか事實にして喋つ

て、罪のない嘘をいふ。新時代への關心なども實は自尊
心と、そこからくる精神的虚榮のわざ過ぎない。思想
自體は實は、どうでもよい。あつといふ間にいひたいこ
とはいつてのけ、したいことはしてのける明らかな勇敢さ
で、その邊にころがる逡巡派の眼を丸くさせ、しかも、
すぐ氣が變つて若い男への媚態から、至れり盡せりの子
どもの介抱に轉じたり、世帯臭い妻になる。だが勿論
「愛することより「愛される」ことの要求に走り、た
ちまち子供を忘れたりする性格は矯らない。男好きとい
つてもつまらぬ男は嫌ひで、いはゆる「しつかりした」
といふ重寶な男を選ぶことがうまく、又自らその點が得
意で、夫が嫉妬を感じざるを得ないやうな男ばかりを刺
戟して歩く。

要するに無類のお人好しで性的魅力が豊富で、正直で
狡猾で、才女で、弱いくせにのさばる輕佻浮薄な女——
五十嵐の眼は細かく鋭く神經質に動くから、アキは異常
な淫婦のやうにさへ浮上つてくるが、實は、どこにでも
ある、殊に女性解放の傾向へ伸びてきた現代では生れ易
い一つの女の型だ。實際に形となつて現れたアキの浮氣
は、牧野との關係以外にはない。

を見出して廻轉してゐる姿だ。愛情においてテキメンに
肉體と精神の互に切り離せぬ現實を見せつけられ、アキ
は一應の舊時代的な貞操觀念で肉體だけはしまらうとし
後悔もしてゐるが、心は夢路をとび廻り、五十嵐は肉體
よりも、むしろアキの飛び廻る心を追ふに疲れ、いつそ
肉體關係を口實として探したいやうな新しい矛盾につか
まれてゐる。この邊の問題は作者は特に觸れて見ず、自
分以外の夫の場合も考へて見てはゐない。

讀者は牧野とアキの關係を、もつと深く心理的に描か
れることを欲望するが、記録的なこの小説では求め難く
また無い方が眞實であるにちがひない。

また形にしない浮氣がアキの利口さで辯解の據り所
もあり、同時に五十嵐を最も焦々させるものだ。こゝに
肉體關係のみを重大視してゐた過去の貞操觀念への一抗
議が横はつてゐる。尤も、もし五十嵐のやうな良心的で
弱い夫——自負心を動力としてゐるアキの一舉一動、一
言一句に、いつまでも戀人のやうな氣持と觀察を忘れ得
ない夫でなく、アキの嬌態に超然としてゐる夫であつた
としたら案外アキも、かうではないかも知れない程度の
ものだ。

それにしても精神的無節操が肉體的無關係で辯明され
るものであるか、どうかは最近再びやかましくいはれる
やうになつた根本問題であるにちがひない。肉體關係を
問題にしないことも、精神的交渉を問題にしないことも
詮じつめれば愛情への無關心で、結局節操否定だらう。
それは極端な唯物的生理主義か、自我的唯心主義に落ち
る。動物に歸れない人間が一夫一婦といふ本能的のやう
で本能的でない便宜をとつた時から始まつてゐる問題で
遂にカスの残らぬやうに解決することは困難かも知れな
いが、童貞や處女を尊重し過ぎた反動として、精神の誠
實のみを尊重しようとした新時代が、再びそこに苦しみ

詩

水

井 上 麟 二

水草のなかにひとときわたかく犬蓼の花がしだれてゐる

しつとりとかすみのなかにかがやいてゐる水に手をひたすと水は處女わらわめの肌の純潔であつた

この川水は興安山脈のこがねの砂に漉されてながれ人の世のさかえにもけがれにも染んでゐない

涯しなくつゞく野の水をおもひ寛るやかな心に生きたいとねがふ

う を

A
うが鱗を休めて じつと水を吸つてゐる

うをのたましひは 水晶である
うをの目は 翠玉である
みんな冷めたく 透徹つてゐる。

B
水底の礁へ

雌魚が丹念に卵を生みつけて行くと 雄魚があとから 水に溶けた雌性をたづねて
礁の卵へ戀の至情を盡して 歩く。
これは 澄みきつた 水の戀だ。

C
意慾盈ち足りて うをは眠る のびのびと 水壓の上層に靜止する。

D
喪なはれた私のたましいは いつしか 魚になつてゐる。

新京大同廣場にて

落 合 郁 郎

私の身につけたものは衣服と名刺だけで、

名刺の鮮明な四つの活字は、何の爲やら、自

身も知らぬのに、人に通じるわけもなく、内

かくしの中で温かさうな夢心地。

ここは政治の都の大廣場、あちらこちらの役

所の門に、自動車吸ひ込まれ吐き出され、

ビル建築の足場には、苦力が、蛸の足さなが

らに群れ集ひ、彼等四十錢の一日の空は、あ

く迄青く大平原に續いてゐる。

わけのわからぬ興奮が、心をびしくと鞭

打つが、何をどうするあてさえつかず、日は

そのまゝにたそがれ始め、夕凍み寒々と心のす

みずみに流れ渡つた。

葬堂へ

小池亮夫

脊筋を、ちりちりと這ひ下り、肌衣を濡らす汗玉の觸感。その、やがて胸奥に浸み入る嗚咽。抑へれば抑へる程、縛れば縛る程、この私に逆らふもの、罪科のやうに頭を擽げるもの。眩暈の發作が走る。悲しい豫感を包み秘め葬堂へと私は、私は歩を進めてゆく。一順百順、生財存道の雜貨店。軒で、めつちがが、金蝨と眞桑瓜を食んでゐる。薄光る上衣を膝に挟み、トランクを枕に午睡してゐるのが見える鮮人宿。疲勞した腹巻、足のない七輪、首を吊るされた大蒜、日焦けた肋、蝨をとつてゐる後姿。

漉ひ上げられた腐泥が、ぶつぶつと呟いてゐる。厳しく光る面に、柄のない支那剃刀。仔驢が、目隠しされ、白の運命をひいてゐる。その隣が繩屋——又、故障か、おやぢ、せめて薬を噛ませ、機械をくるくるくると手で押し廻してゐる。しばだたき、しばだたき。「ナンゾー、ナンゾー」、素裸に薬を抱いた子が泣きぢやくつて現はれる。濕土に臭氣の群がつた、官禮茶食四遠馳名の飯店、皮膚病を剃つてゐる男女理髮館。臟腑を出した枕時計。娼婦が、弱い嗽で飢餓を勞はつてゐる。玉蜀黍の芯を噛み飽き、碎き飽いた老豚は土沙浴を始める。

この時、亞鉛板に金切聲が叫び、孕み婦が煉炭をさげた儘飛び出して来る。續いて「小偷兒、小偷兒」の怒號。黄

塵が露路を縫つて渦巻く。然し、ざわめきは一時、搔拂ひのモヒ臭い血が、地べたをのた打てば、のた打つのを見れば得心し、一瞬ではあれどこの街は、現實を忘れることが出来る。

生命の錨を探ね、行盡きると、己が手足を拷問にかけるは、この街の慣ひだ。如何なれば祈る心。この足跡、影、話聲、呻吟、殘忍な運命と酷烈な犠牲との争鬪が發する鈍音。奇怪な像物と虚影との、藻草の騒ぎ纏れるがやうなこの現實。絞首臺への死刑囚のするやう、馬鹿げた大聲で、祈る心を私は嘲笑ふ。

肩をおとし、腰を屈げ、涎の干らびついた唇を垂れ、骨抜かれた手で、空気を僅かに搔き寄せ、されどなほ何物かを呑負はされ、何物かを引攪り、空る前方を私は眺めてゐる。不吉を纏ひ、私は葬堂へ。

才子を見据ゑてゐる家鴨の傍をぬけ、頭蓋と脚とを蹂躪された葱を跨いで葬堂への鐵の扉を押す。先づ額に、瘡蓋のやうに刻まれてある、玻璃の十字架。梓、榆、楊柳、ポプラ……が、相喰むがやう茂り立ち、鬱然と墓域を蔽ふてゐる。原始の姿し、絡み合つてゐる雜草。その暗緑に點々とイんでゐる、墓標は怪獸の牙齒のやう。きいきいと齒軋る鳥。蒼白い梓の花、野菊の進紫、清淨なるものは凡て悲しく、迫るは唯戰の鳴動。

葬堂の屋根、鐘樓の廂、屍室の扉、墓標……鐵といふ鐵、赤がねといふ赤がねは錆び朽ち、壞れ果てようとしてゐる。會て幾千、億の魂を、その足下に跪かせ、今は覆れた教へのやうに。嗟呼、明るみの恐怖。遮る術もないこの光この輝きをも信じ得ず、どろどろと焼け爛れてゆくあるが物、皆、地を腐らせる妖氣となつて蒸れ漂ふ。見よ、葬堂を、尖頂の十字架を。蹣跚き、戰慄き、血破れ、會て香ぐはしかつたその、黄金の髪は脱け落ち唯、遙かな空を笑つてゐる。ゆらゆらと、祈り手をゆらめかし。せめて高く、高く。

汽笛

小杉茂樹

旅の山は平安に眠つてゐる。

呼び醒すやうに 汽笛は踏切越えて黝い町を乗り捨てる。

その一聲は 裏町小路の障子に残り。

一聲は屋根をかすめ、晴れた嶺傳ひに消えていった。

棘の葉

底知れぬ洞のなかに氣味悪い壁や柱

うす暗い土間を透かして

脊戸の一隅が夕日に明い

あゝ 棘の葉は己を刺し

かなしく蒼く柵が萌え

明さのゆゑに 蔭くらく

蔭ゆゑに 棘の葉は暈培した

胡桃割り

近 東 綺 十 郎

胡桃を割つて 胡桃を啖べる

あなたに會えぬ夜の 悲しさを紛らかす拙ない演技

胡桃缺に 胡桃をあて

果肉は 白い笑ひとなる

胡桃を割つて 胡桃を啖べる

同呑酒の どろりと青い甘さへ

ひりひりとしみ入るもの

胡桃の笑ひのニヒルさが

私の胸に 白く咲く

胡桃の肉の一ひらを

くちに啣んで想ひ出す

あなたの白い齒を 白い笑ひを

笑ひにかける黒い睫毛を

手 紙

日かげのように たよりが来る

日かげのように 風が呼吸する

あなたの遠い眼ざしのように

雲が 疲れて 流れて行く

窓をしめて ふつと 私は盲目のようだ

聾のようになり 美しさから閉されたのか

翳つて来る あなたの感情を 胸にため

私は 笛のような吐息をつく

春歌

帽子は 帽子掛に

陽ざしは 飴のように濃んでゐる

どこからか

疳高い 蛇皮線歌がながれ

四月近い 午後を

木の芽が

錐のように するどくなつてゐる

地 圖

地圖は 笛のような呼吸をそよがせて

木のように仆れかゝつた

掌の中に 水蟲が 大脳の表皮を削りながら 笑ひ出した

肥えた乳房は

豊かな感情である

やさしさと 喜びが

水煙を立てゝゐる

疲勞は霧のように重い

情思は流れて 遠い唄だ

いつか 夕空になる氣流をかんじて

しづかに眼をつぶつてゐる

花 筵

城 小 碓

旅舎の主は私の爲めに新しい花筵を敷いてくれた、そして私の背負ひ袋をおろすのを手傳つてくれながら、私の旅行の目的が何であるかを知つたであらう。突然ですがあなたは蝶の採集ですね。するともしやあなたは蝶の翅音を聞いた事がありますか。蝶の翅音。さうです、あなたの様に蝶の採集をされてゐられる方は蝶の翅音を聞いた事があるだらうと思ひましてお聞きするのですが。然し私は今迄に氣が附かなかつたものか不幸にして蝶の翅音を聞いた事はないのです。そりやあ採集網の中とか、箱の中とかで物にふれた時の蝶の翅音は聞いた事はありますが。想像して見てもあの柔かな翅でどうして大氣を搏つ蝶の翅音が出されよう。いいえ未だ——と答へるより外にありませんでした。主は明らかに失望の意を其の老顔にあらはした。さうでしたか。あなたの様な人が——まして普通の人々がどうして蝶の翅音なんかめつたに聞かれませう、私が人々に其の話をして笑はれるのは當然です。でも私は其の翅音を聞いたのですよ。其の譯は始めからお話しなければわかりませんが、私が未だ若かつた時、まあ五十年位にはなりません、私の父は此の街でも相當な糶棧を営んでゐました。獨り子だつた私は父母の恩寵になれて放蕩に身を崩したのでした

五六年と云ふものは誰の言葉も私の耳にははいらなかつたのです。私が私の今迄の行動がよくなかつたと氣付いた時私の身には破産しかかつた父のない家と或る種の婦人から感染したいまはしい業病とでした。其の時には母は私に諦めをつけて里方の家に身を寄せてゐたのです。街の人々は最早や私に見向いてもくれませんでした。いいえ私は心なき人の悪罵を享けてゐたのです。私はせめても母への申譯の爲め自殺しようと思ひました。然し同じ自殺をするにしても今の私には私の死體を人々の前に曝すのは忍び得ない事であつたのです。主は窓から見える彼方の山を指差して、あの山の南側は中腹から絶壁になつてゐるのであります。私は其處から飛込んでやらうと思ひました。無論崖下は誰もめつたに行く所ではないのです。決心すると早速その翌日私は人々に悟られない様に登山姿で目的の場所に登つたのです。絶壁の上になつて見ると想像してゐた以上に崖は凄くありました。私は暫く見とれてゐましたが自分の目的に氣附くと二三間後にさがつて携帶品をおろし、母への簡単な書置を残しました。さうして再び断崖の上に立つたのです。私には未だ眞の自殺の決心がついてゐなかつたでせうか、いざとなつて見ると云ひ知れぬ恐怖におそはれたのです。私はこれではいけないと、私の心に管打ちながら二度、三度、四度目には全く力を失つてしまひました。私はもとの位置にかへつて少し元氣を付ける爲め携帶してきてあつた葡萄酒を呑みました。呑みながら色々と飛込の方法を考へたのです、それから私は断崖から半町ばかり後方にさがつて、手拭で目かくしをして一ツきに絶壁に走り込んだのです。私の兩足が地に浮いたと思ふと私は其のまゝ氣を失つてしまひました。それから私は今の話の蝶の翅音を聞いたのです。それが何ともいひ様のない樂の音に聞えました。それに馥郁とした花の香、かすかに瞳を見開いて見れば——私は芥子畑の中に横はつてゐました。其の時の私には起き上る力は無論有りませんでした。唯、

私の近くに咲き亂れてゐる芥子とそれから飛び交ふ蝶の姿ばかりが夢の様に見えてゐるばかりでありました。

此處に一寸お話ししなければならぬ事は、どうして私が芥子畑に殘れてゐたか？と云ふ事ですが、どうせあなたも此の附近で蝶の採集をされますなればあの山にも行かれますのでせうから、其處の地勢を見ればわかりますが、あすこの絶壁の上は小さい一つの峯になつてゐるのです、右の方が其の崖で他の方は少し下つて稍々廣い盆地になつてゐて其處に山寺が一つあります。芥子畑は其の山寺の維持費に昔から寺僧が特別に官から許しをうけて寺の周圍に栽培してゐるものです。私がどうして其の畑に飛込んだのか、後で考へて見ると御覽の通り私の左足が其の時代から少し悪かつたものですから、自然に右側の絶壁から反對の方に寄つたものです。主は寂しく微笑みながら、それからどうして私がかうした客棧を營んでゐると云ふよりも、あなたには夢の様な蝶の翅音が今でも私の耳に明白と残つてゐるとお話しして置く方がいいだらうと思ひます。窓の山は夕焼で燃えてゐる。主は不自由な足を引摺りながら私の部屋から出て行く。再び夕焼た山、主の後姿、さうして新しい花筵の花模様。あゝ私も明日はあの山の山寺の芥子畑に身を横たへて、蝶の翅音を聞くのだ、蝶の翅音を聞くのだらう。

ブラゴエチエンスクノ空

島 崎 曙 海

撒き散らされたものは砂土ではない

あの煙硝は土煙りではない

河の中の渦巻は雨水ではない

空 馳けるものは重爆撃機だ。

あのだみ聲は逢曳きの密語ではなく越境兵の私語か。

密林の雪には獐の變りに露西亞兵の足跡が亂れてゐる

熟麥の穂下には黒土はなく

農民の鍬は木銃にかへられてゐる

帽子は鐵カブトに、眼は雙眼鏡に

麥粉屋は軍需製品工場に

食糧は鐵片に、家は戰車に、杖は機關銃に、
野菜畑の上には霞まで、白い軍用道路が走つてゐる
瞳には銃が打たれ

黒龍江には反ソ聯の死人の魂が浮游してゐる

地下からにじみ出てくるものは人間の油か。荒地の溝に流れ落ちてゐるものがある
雪に埋められた越境者の肉塊が銃火をうけて溶解されたのではあるまいか。

雑草は黒ずんで

血塊のやうな山丹花あかひめゆりが野に満ちてゐる

土足のままの膝下

江城の泥水をくぐつて浮び出て來た國民らの顔、

泥逆の縁に沿つて眇の男が鶏を羽がひじめに握つてゐる

捕はれた鳥達は首締められることのみを待つてゐる

小孩兒の眼には赤と黒の光りと搔拂ひの手癖がある

肥沃の住家から追はれて行く人達。

河の上には泥柳や野榆、白樺の幹が天を暗くしてゐる
幹の先は一樣に東を向いてゐる

日本を凝視してゐる。

にぶい陽光に梢の眞新しい葉簇が一つ一つ金佛の様に坐つてゐる

翳のない日である

幹の上層には戰雲が棚引いてゐる

ゲ・ペ・ウの哄笑の様な黒雲が闇の様に動かない

折々黒雲が裂けて電光いんげんが輝ふ

ブラゴエチエンスクの空には雷が鳴つてゐるらしい。

秋

瀧
口
武
士

風よ

私に吹き荒べ

空みつ鬼よ

出よ

秋

長い間

風は思をめぐらしてゐたが

今宵

雨が臉を濡れおちてきた

距離

古川賢一郎

あなたの、ほのかに匂ふ顔さへ
わたしの視界では、おぼろになつた。
人生の深い霧のなかに混迷し
わたしは、しめつぽい服を着て
たゞ霧の中に、冷めたく立竦むでゐる。
あなたは、たくましい男の心情に
時代精神の旗を求めやうとするが
わたしのこゝろは、いつも
生死のまぼろしでいつばいなのだ。

あゝ、明るい信愛で寄り添ふた
あなたとわたしの間に
遠い人生の距離がある。
男と女の、哀しい宿命の距離がある。

女友達

妻となり、母となり、いつの間にか
霧の彼方の、幽かなるひととなつた。
時たまの音信には、身をつゝむ
家庭の淡き愁ひなどものして――

あなたの艶やかな肌は曇つてゐやう。
すゝきの穂のやうな
あのゆびさきも荒れほそつてゐやう。
わたしも妻を娶り、子を育て
朝な／＼鬚をそりつゝ、骨ばつた頬に

忙しない生活のシャボン、を塗つてゐる。

死別は黒い怨情だよ。

破戀は紅いすっぱい茶葉の實だね。

戀でもない、禮儀でもない

朗らかにぶつつけ合つたお五ひの

幼い昔の友情は、すでに

中天のはかない虹となつてしまつた。

あゝ あなたと

いつ又めぐり會へることだらう。

雨の日断章

古
屋
重
芳

粉ごなに打ちひしがれたおもひ

外ではしきりに細雨がふつてゐる 毛虫もすがたを隠したらう
肩から背にかけてたへすけ寒いものが流れてゆく

何時でも こうなのだ 私は！

暗い檻のなかゝら まだ抜けきれないで嘆いてゐる

雨は若葉のしげりばかりを濡らすのではない

また 私の乾いた咽喉をも潤す

しみじみとわが越しかたの見ゆるかな

——白い埃が洗はれて 若葉は益ます緑をふかめていつた。

夢の街

夢の街。夢の街。

——影もなくおとなふものは何だらう

崩れてゆく家 壊れてゆく家——

白い埃の座にあつて

しづかに冥想する街よ

けふのやうに、また明日もあるのだらうか

明日のやうに

次の日が巡つてくるのだらうか

憂鬱な風景

——僅かばかりのよろこびや

僅かばかりの哀しみや——

鈍い額に

河は遠い太古のおもひをながす

夢の街。夢の街。

あゝ、海がある。山がある。

無限につゞく空の下に建てられた家々

そのなかでの度ましい人々の生活

さゝやかな愛やのぞみ

さゝやかな悔やにくしみ

それは私にはわからない

松 畑 優 人

とほく 風が悲しい笛を鳴らしてゐます

枯木立も哭いてゐるやうです

夜のもの達をかくも悲しませるのは 何でせう

海が吼えるやうに聲かけてゐるのは 誰にでせう

外套の私語も頼りにしないで 行つて了ふのです

耳朶に觸れるので 意味を思ひめぐらしてゐると もう行つてしまふのです

残したものが寒く身に沁み 外套の襟をかき締めました

冬の夜の影を踏むとき 空にあつて向する 星の意味も わからないのです

恥しいのです

こんなに 夜のもの達が残して絶えず聲してゐるのは何のせいなのでせう

振返つても振り返らせ 私の背中にあつて囁き

私の心を牽いて離さないものは 何でせう

鵲

子供等は 相も變らず徒で

硬直した脚で立たせて見せる

お前は骸だ もう此處にはゐないのだ

小春日和の教室の日射に胸を温める

Boiler room ニ住ム黃蝶

三好弘光

水が循環スルト僕は澄ンダ空へ向ツテ雲ヲ飛バセルスルト僕ハ其ノ雲ニ乗ツテ飛行スル夢ヲ見ル僕ハ汗ヲフキナガラナヲモ雲ヲ放ツト小馬等ハ育ツノデアル。

6000Volt ノ電流ガ生レル前ニ僕ガ生キテキルノガオカシイ。アレガ笑フト磁氣ハソノ磁界ヲ走ルヤウニ僕ノ胸ニハ紫ノ薊ガ咲ク。

僕ノ眼ニハ赤イ舌ノカゲガ焼ケ残ツテキル。

水分ヲ追ヒ出サヌト、E.M.G.ガ破烈スルトイフコトハ僕ノ知ツテキル後家サンノ淫蕩ナ顔ニナルノダ。

ソレハヒソカニトリモツ。

僕ハ保険屋ト一杯飲ムノデアル。

Handleヲ廻シテ親方ノ金庫ヲ開ク。

居眠リスルト破レルノデ金庫ノ壓力ヲ僕ハ視テキマス

世界中ノ金庫ヲ同ジ Pressure ニスルトヨイ。

僕ハ機械ヲ視ナガラネムイノデス。

打たんなかな

—私の朝のために—

八木橋雄次郎

凡ゆるものが前進の姿勢であつた。植物も、動物も、機械も、思想も、裁判官も、乞食も、それから道路も。

それ等はみな明るい方へ向はうとしてゐた。私だけはさうでなかつた爲に、あちこちに衝き當り、その度毎に皆に怒鳴りつけられた。最も親愛なものにまで。

私は皆に虐げられてゐるのだと考へてきた。更に悲しい事には私さへ私自身を虐げ蔑むことであつた。

霧の底の湖のやうに、私の精神には一つの冷たい眼が刺ぎとられずにあつた。私の意識が青い煙を上げるとき、それはいつも憎悪に輝いた。周囲を顧みる勇氣もなく、たゞ私は其の眼を恐れてばかりゐた。だから私はお天気やさんであり、虚無であり、孤獨であつた。

波止場の石疊にこぼれ落ちた一粒の麥は、それを踏み潰す大きな足を待つてゐるだけであつた。

仲間からはぐれた私は、いつの間にか冬の荒野を歩いてゐた。そこには足跡も、木影も、方角もなく、影のやうに黒鳩の群り飛ぶ私の現實であつた。

耳朶に吠えつく風に向つて私は叫んだ。

——爆撃機よ、彼の厚き屏を毀て！

——吹雪よ、來りて彼の爆撃機を墜せ！

——聖書よ、汝の文字を悉く消し去れ！

——地球よ、宇宙を眞白き雪球と轉れ！

行けども、行けども救ひの道はなく、生活は亂れて雲となり、激しい風は常に眞向から吹きつけた。

行手は暗く、壁のない廊下であつた。誰も通らぬ長い廊下であつた。

やがて私は歩くことにも興味を失つた。力なき青年の目を雪は空しく輝いてゐた、私は胡坐をかいて、今まで歩いてきた距離や時間の測定を始めた。

繰りかへす毎にその計算は違つてゐた。遂に私は違ふのが正しいのだと確信するのであつた。しかし、それさへ彼

の冷き眼の光を恐れ戦かなければならなかつた。

黒鳩は羽音荒々しく私の虚空をかけた。

一體、私の肉眼は今まで何を見つめてきたものであらうか。大きな眼球は、馬のやうに無氣力に生れついてゐたのであらうか。

私は頭陀袋から酒を取り出し、がぶがぶやりながら歩いた。私は酔ひながら馬の眼に違ひないと何度も自分に言ひ聞かせた、そして、何もかも忘れて了へと附け加へながら、空になつた空壕を次々に放り捨てるのであつた。

私は誰も戀しくなくなつてゐた。酒にさへ魅力を失つてゐた。雪はまぶしく照りかへり、私は此の上なく孤獨を愛するものゝやうに茫然とつゝ立つてゐた。

眞白に廣がつた敗退に於てのみ私は前進の姿であつた。私は私自身を虐げることをしなくなつてゐた。私は目あてもなく、黒鳩の群影の中を、人を押しのけるやうな姿勢で荒々しく歩き出してゐた。

足跡はみにくい文字になつて私の後につゞいた。やがて、吹雪はそれをも消し去るであらうに。

星は崩れんとする私の空を支えてゐる金の鍔であつた。又、睨み、或は憐れみ、或は蔑み、或は眩いものを見るときのやうに睨いて私を圍む人々の眼でもあつた。

敗退の野は雪明りに白々と曠がつてゐた。節度のない世界を、私はよた／＼と歩きつゞけた。醜い恥多き足跡を振り向かうともせず。戀も祈りも今はなく。そして私の行くべき先は眼の前に近づき或は見えない方に遠退いた。

おい！とだしぬけに私は呼びとめられた。そんなことで私は驚くものではない。又見向くものでもない。俯向きながら私は返事もせず歩いてゐた。おい！又呼んだ。父の聲に似てゐる。兄弟の聲に似てゐる。私は歩いてゐる。おい！友の聲に似てゐる。先輩の聲に似てゐる。私は歩いてゐる、おい！黙つて歩いてゐる。おい！歩いてゐる。おい！聲は耳許に囁き或は叫び、影のやうに私の前を後を右を左を庶切つた。

不承無精私は彼を振りかへらぬ譯にいかになかつた。異様な風體、容貌、態度、何處かで見たやうな、全く未知なやうな、親しいやうな、憎らしいやうな、私自身であるやうな、赤の他人のやうな、有形のやうな、無形のやうな、過去のやうな、未來のやうな、眞實のやうな、虚妄のやうな、神のやうな、獸のやうな奴！！

お前は誰だ。
俺は鬼だ。

鬼？私は理由もなく震へ上つた。鬼！鬼！私の思索はばたばたと彼の周圍を鼓翼いた。心の羽音に連れて鬼は大きくひろがり、或は小さく飛び廻りながら私に問ひかへした。

俺を知つてゐるか。

私は首を横に振る代りに問ひかへした

俺を知つてゐるか。

彼はげらげら笑ひ出した。俺は今まで君自身の内部に住んでゐたではないか。

彼は眞顔になりながら言ふ。別に隠れようとした覚えはない。然し、君は俺を顧みず、或は忘れてゐた。不覺にも君は唯一つ俺を取残してゐたのだ。

君！

彼は鐵のやうな指で八方を指しながら、群衆のざはめきのやうな聲で私に問ひ始めた。

君は聞いたか。

氷島の軌りを、デモ行進の歌を、國境に唸る砲聲を、新國建設のハンマーの響を、ダム決潰の叫びを。

君は知つてゐるか。

エチオピアの敗慘を、ヒットラーの右手を、スクーリンの病を、ルーズベルトの再選を、シンプソン夫人の魅力を
蔣介石の芝居を。

君は讀んだか。

ボードレールの血を、ヴェルレーヌの神を、トルストイの道を、ドストイエフスキーの眞を、バルザックの智を、
マルクスの金を、フローベルの純を。

君は見たか

嗅いだか

感じたか

味つたか

行つたか

觸れたか

信じたか、か、か、か。

私はそれ等に答へる代りにぼつきり言つた。
私は不幸な男だ。

鬼は黙つて頷いた。

俺と共に行かう。勿論、君は隨いて來なければいけない。

凡ゆる者が動いてゐるね。世界は瞬時も止らうとしない。

しかし、動かないものがある筈だ。唯一つある筈だ。何物が動いても、何物が動かさうとしてもそれは無駄なことだ。それはもつと大きな力なのだ。俺はそれを探さうと思ふのだ。そのために、俺は君の生ある限り、君の凡ゆる感能の中で弔辭を書かうと思ふのだ。それが又唯一つの方法であるからだ

弔辭だよ

勿論、君への弔辭だよ

ふと氣がつくと鬼の姿はなく、私は仰向に打ち倒れてゐた。風は冷たく私の生命を撫で擦つてゐた。

何といふ静けさであらう。

私は起き直つて四邊を見廻した。鬼よ！お前は何處に行つた。聲も姿も今はなく、唯胸の奥がむづ痒く熱ぽかつた。動かさるもの、動かさるもの、頬に凍りついた雪をなめながら私は鬼を求めてゐた。

不安の空を支えてゐる金の銚を一つ一つ抜きとつてゐると、私の朝は次第に明けてきた。萬物が凡ゆる其の形を現し始めた。私の記憶と責任の中に父、母、兄弟、妻、友人がよみがへつてきた。水は光を張り、雲は大陸の果に湧き超特急列車は曉の野を貫き、バスは山波の岐を走り、寒風を衝いて爆撃機は飛び、畑の枯楊の梢をゆすぶつて鵲は羽ばたいた。

すべてが現實の中に動き、働き始めた。朝の鐘は股々と鳴り渡り。敗退の野は次第に消えて行つた。

私は最早人を斥けまい。

深く呼吸する。鬼は何處かで私の火を焚く。

今、私は起ち上る。

聞け！近づいて來るあの大きな車輪の音を！

飛んで車上の客となるか。

伏して轍の下になるか。

書け！汝の弔辭を！

打て！動かさざる最後のものを！

今、私は起ち上る。

両手をさしのべて凡ゆる苦痛を求める。

朝が来た。私の朝が来た。

見よ！陽がのぼる。

未來の果に

あんなにあたりを血に染めながら。

小 説

孫の不幸

青木實

ふと眼がさめると首筋の邊りにじつとりと汗が感じられて、下腹が痛む。痛みは刺すやうにはなく、なにか反省を促すといったやうな、しくしくとした痛み方であった。孫は腹を抱へてうつ伏せになった。するといくらか楽になった。外はまだ真暗で風が鳴つてゐる。夜の短くなつた此頃こんな時刻に眼をさましたことがなかつたうつ伏せになつたまゝ夢現の中にまたいつか不覺におち入つた。腹の痛みも肉體の疲勞には克てなかつたのであらう。

ふたたび眼を覺ましたときは、炕の上に横になつた彼の上に、明り取りから日が流れてゐた。その明るさの中で埃が踊るやうに舞つてゐた。やつぱり下腹が痛い。夜更けに目を覺ましたことを夢のやうに思ひ出し、本當だ

つたのかと、その頃からの痛みをふと恐ろしいものに感じた。便所に行つたら直るかもしれない。ひどい下痢をした。痛みはとまらない。

「阿母ア、腹がいたくてなんない」

眼に涙をにじませて、しきりに煙にむせながら、甕の下を焚きつけてゐた老婆は

「どうしたといふんだい。別に悪いものを食べさせた譯でもないのに。それではお前に粥を作つてやらうよ」

隣家の主人は、櫛棧(問屋)の馬車挽きだつた。子供のない年寄り夫婦で、主人が二、三日前から病氣して寝たきりだつた。孫は、昨夜頼まれて城内に薬を買ひにいつてやつた。からだの節々がだるく、眼から涙が頻りに出なんだから、だを動かしたくなく寝たきりでゐたいとい

ふ病状であつた。××大藥房でさう云つて藥をもらつた。藥は木の小枝をぶち切りにしたやうな煎じ藥であつた。

歸りに友だちのところへよつた。嫁さんをもらつて聞かない友だちの家の中は明るく孫も氣が軽くなつて長居した。瓜に味噌をつけて出された。孫の好物で、それをいつも家で食べるときより、いくらか餘計に食べた。腹痛はそのせいかなと思ひ乍ら寢床の上にもう一度倒れた。

彼は大連に本社のある土木請負××組の、この街にある出張所の小使であつた。生れたのは遼陽から三十支里ばかりの田舎で、初め遼陽で日本人の家のボーイをしてゐたが、二十三のとき世話する人があつてここに移つたまもなく結婚し、今六つになる娘があるが、からだを悪くしてゐるので一年ほど前から妻子をその實家である遼陽の、彼の故郷の隣村にかへしてゐる。つひ最近きた消息では、娘は衰弱してゆくばかりで、この頃は山羊の乳も餘り欲しがらないとのことだつた。老婆は

「おう、おう」

と切ない聲を出し、孫娘の不幸を哀しんだ。孫は、元

氣を失つた。あんなに好物だつた山羊の乳ものまないなんで、一體どうしたといふんだらうと、眼をつぶつて寝てゐる娘の小さい姿を思ひ浮べてみた。

やがて湯氣をふきたてて粥が出来た。孫は我慢してやうやく一飯喰つた。時計は七時ごろだつた。七時半までに事務所に行かなければならない。いつもの習慣通り出掛ける支度をした。老婆は、ひどく痛むやうなら休んだらどうかと言つたが「うん」と點頭いただけで家を出た。

習慣といふものは怖ろしいもので、からだの調子が少しぐらゐ悪くとも、朝起きて飯をすませると、いつか仕事に出かける支度をしてしまひ、すると病氣も癒つてきたやうな氣がしてくるのだつた。

東の空には遮るもののない陽が上つて、風のないさわやかな朝だつた。附屬地の事務所へ着くと、孫は板を張つた床の掃除を始めた。部屋の半分位を掃除してゐる中に額に汗が滲み出た。それを手で拭つてから再び掃除にかゝつてゐると、急に下腹がヒリヒリと痛みはじめた。等を投げ出して便所に行つた。水のやうなものが止めどもなく下り、譯もなくからだがぐつたりした。

彼が炊事部屋へ行つて、昨日の汚れた茶碗や土瓶を洗ひ、灰血の灰を落して洗つてゐる内に、社員たちが出てきた。この事務所には、出張所主任の外三人の社員がをり、臨時に一人大連から派遣されてきた男がゐた。今度この街に新しく出来る五階建ての百貨店を請負つて建築中なのだつた。

「おい、なにサボツテゐるんだ。まだ机の上も掃除してないぢやないか」

一番若い社員が、怒鳴つた。

孫は痛む腹をかゝへて哀しかつた。彼は急いでバケツに水を入れてきた。

タバコをふかし乍ら、窓のところ立つて孫が机の上を拭き掃除してゐるのをみてゐた社員が

「おいどうしたんだい、泣き面なんかして？」

彼はなにか情けない感じで黙つてゐたが、繰返し訊かれた。

「お腹がいたむんです。」

「腹が痛いって、腐つたものばかり食ふからさ」

聲を出して笑つた。笑はれてゐると一層腹が痛んでくる氣がした。

正午までに幾度となく便所に行つた。いつになく自轉車に乗つてゆく遠い使ひがないのでいくらか助かつた。郵便局へ行つたり、社員の晝食のパンを買ひにいつたり後は事務所の中の雑務だけだつた。

午後、百貨店の建築場へ青寫眞一枚をもつてゆく使ひが出た。自轉車に乗ると、晝飯を食はないので、乾ききつた白く反射する道を走らすと眼が眩んだ。デリデリ照りつける陽の暑さ、孫は口の中が乾いてしまつて唾もたまらなかつた。

建築場は城内の賑やかな満人街のメン・ストリートにあつた。そこからは、事務所より彼の家の方が近かつた。腹の痛みはとまらぬし、暑さは物を食つてゐないから、だに一層激しく應へるし、もう慾も得もなかつた。使ひを果すと、直ぐ近くの前に彼も来たことのある兩替屋へ入つて電話を借りた。

「もしもし田河さんお願ひします」

田河といふのは主任だつた。

「あの、私孫ですが、今川事すましました。腹が痛いのですみませんが、今日は家へかへらしていただきますが」

「腹がいたいって、ひどく痛いのか」

腹が痛いといふのでは、例へそれが嘘であつたとしても、いや休んぢやいけないとはいへないぢやないかといつた意味からの、多少の不満を含んだ主任の口調だつた。

「それぢや仕方がない。大事にしてな」

主任は電話を切ると、丁度そこに居合せた社員の一人に、孫は腹痛で今日は歸つて来ないさうだと言ひ、それから孫は日本語が達者すぎるくらゐ巧くて調法だが、その日本語に時々騙されることがあつていかんと、孫の假病を看破したやうに言つた。

その頃孫は、額から鼻翼に、汗を一ぱい浮べ、自轉車にのる元氣もなく、それを引きづり乍ら歩いてゐた。家にかへると倒れるやうに横になつた。

翌る朝、老婆に揺り起された。眼を聞くと直ぐ前に、皺に刻まれた顔が眼に涙をにじませて、彼の覺めるのを待つてゐた。

「隣りのおやじさんがね、たうとう死んだんだよ、たつた今し方」

孫はとび上つた。びつしより寝汗をかいてゐたので、立ち上ると冷んやりしたものを脊筋に感じた。

「起きて大丈夫なのかね、お前は」

「もう痛みはしないよ。阿母アそれで、いつ死んだのかね」

「今朝だよ。夜の明けかゝる頃だよ」

五十八だといふが、赤ら顔でよく太つた働きものおやじさんだつたが、と孫は着物を着ながらそんなことを思つてゐた。彼自身の病氣は、昨日の晝食から何も食はず、グツスリ一晩眠つたせい、今朝は少しの苦痛もなかつた。殊によつたら隣りのおやじさんが死んだと言つて、起されたのでその驚きの瞬間に彼の病氣は遁げてしまつたのかもしれない。

孫はお隣りへ行つた。

主人の死體はもう土間に移されて、顔には布がかけられてあつた。枕元には線香が幾本となく煙りを上げてゐた。

「たうとう死んぢやいましたよ。妾を残して。……でもうちの人は後生がよかつたよとみえて、死ぬときには笑つて死にましたよ。お前ともよく喧嘩をしたなアといつて、それだけでした」

蠟燭の灯の届かない隅の方で泣きくづれてゐた細君が

孫が入つてゆくと、涙を押さへながら、いつまでも繰り返して述べた。

食卓を圍んで親戚の人達が二、三人葬式のことを相談してゐた。孫は細君に慰めの言葉をかけて、いい小父さんを惜しいことしたと繰り返して言ひ乍ら、線香を供へてお辭儀をした。

家へ歸ると粥が出来てゐた。孫はそれを吸りながら、香典をいくらあげたらいいのかと、老婆に相談した。

「さあ、お隣りとは長いお交際だし、お父さんの死んだときも随分厄介になつてゐるしね、それからあの梨花が病氣して……」

老婆は、話したら、自分の夫の死から、孫娘の病氣になつたことまで喋り始めた。

「阿母ア、それぢや、どうしても一回は出さなくてはねえ」

「そりやどうしてもその位はね」
この家の餘裕は今のところ一回札が三枚、それだけしかなかつた。今少し多くの貯金があつたのだが、孫の娘の梨花が病氣をし、彼の妻と一緒に郷里に一時療養に歸すことになつたとき、汽車賃や、持たしてやる金に遣は

れてしまつた。

食事が済むと、孫は一回札を紙に包んで家を出た。隣家には、近所の人が入れ換りお悔み^いきてゐた。彼はもう一度線香をあげ、それから紙に包んだものも供へた。老人の死體の上には、嘗て老人が着てゐるのを見たこともないやうな眞新しい紺の着物がかぶせてあつた。

葬式は今日午後五時からとのことであつた。

事務所へ出掛けたが、今日はもうからだは大丈夫であつた。すつかり掃除をすましてから、朝のお茶の用意を炊事場で始めた。戸棚を開けたら、彼が一昨日の晝飯に食つた焼餅が一つ残つてゐた。粥だけでは腹に力がなく彼はもう食べてもいいだらうと少し心配しながら、一口齧つてゐると、主任が、ドアをひらいて入つてきた。

「おツ、もういいのか」

もう齧つたのかといふよりは、もうそんなものを食べてもいいのかといつた意味で、その裏には、やつぱり昨日のは假病^{けびやう}だつたのだらうと、顔が云つてゐた。

「はい」

「お茶をもつてきてくれ」

主任は、事務室の方へ引き返した。孫は、主任の言つ

た意味が解り、もどかしい氣がしてならなかつたが、昨日腹痛で早退けたものが今朝は焼餅などをどうしてかぢれるのか、一體どう一口で説明してよいのか、日本の言葉が澤山頭の中で渦をまくばかりでその整理のしようがつかなかつた。

三時のお茶どきに、主任は孫に餅菓子を五十錢買つてくるやうに命じた。主任の御馳走を圍んで、机から離れた皆んなは輪を作つて放談を始めた。

孫がお茶の用意をして持つてゆくと、主任は彼にも食べるやうに言つた。

その内、一人の社員が、孫に支那の結婚式の行列の鐘や、鳴り物と、葬式のそれと同じやうにきこえて區別がつかないが、一體どんな風に違ふのかしらと質問した。孫が説明すると、男は解つたやうな解らぬやうな返事をしたが、それではやつぱり違ふことは違ふんだなと言つた。

「えエ、そりやまるで違ひますとも」

孫は、さう言つてから、ふと今朝隣家の主人の死んだことを皆んなの前に話した。

「ふん、どこでも死んだときは同じだな」

「やつぱり香典みたいなの持つてゆくのかな？」

孫が一回もつていつたと言ふと、孫の給料が一箇月いくらであるかを知つてゐる主任は、香典の金額の案外多いのに少し驚いた様子であつた。

孫は、ふと葬式が今日の五時からであることを思ひ出し、時計が三時少し過ぎを指してゐるのを見ながら主任に、少し手傳ひもしたいから、すみませんが今日はこれで歸して下さいと願つた。

主任は「うん」と煮えきらぬ返事をした。また一つ孫からやられた感じがしたのである。恐らく他の社員だつたら、軽く氣易く承諾を與へたに違ひないのだが、今まで葬式の話などをしてゐて、直ぐこんな風に孫に切り込まれると、どうにも我慢のならない氣がしてくるのであつた。それかといつて、いかんといへるだけのものが主任には相憎とない。それだけに尙孫にやられた感じがいつまでも後口わるく主任の頭にこびりついて離れない。

その間に孫は、さつさと事務所を出ていつた。

翌日の午後、晝飯が済んでから、孫は電報をもつて郵便局へ行つた。かへりに自轉車を走らせてくると、満鐵の社服を着た男が彼を呼びとめた。

「孫ぢやないか？」

「え、孫ですが……」

「私を覚えてゐないかな。君の細君の従兄になる馬鳳鳴といふんだが、ホラ遼陽の驛に勤めてゐる……」

「あ、知つてます、思ひ出した」

馬は、彼の細君が遼陽の驛までよこした使ひの者の傳言を、孫に知らせるため丁度の休みを利用して彼をこの街にまで尋ねてくれたのだが、家へいつたところ、相憎孫の老母は隣家へ行つてゐて留守のため、うろ覚えの彼の勤め先を探しに附屬地まで戻つてきたところだつた。

用件といふのは、聞かない中から直ぐ孫にピンときたやうに、娘の容態の險惡に就てだつた。今ではもう死ぬのを待つてゐるやうなものだ。若し仕事の方の都合がついたら、一度せひ生前に會ひに来てくれといふ細君からの傳言であつた。

「有りがたう。遠いところをわざ／＼」

「いいや、そんなこと。先日私が村へ歸つたときは、大分元氣だつたがなあ。この調子なら、しばらく養生したらよくなると思つてゐたのに、ほんとに惜しいことで……」
「どうしても一度生きてゐる内に歸りたいが……今夜は汚

ないところですが私んどこへ泊つて下さるでせうな」

「いいや、勤務の方があるのでね。次ぎの列車で歸らないと具合が悪いので」

「さうですか、遠いところをどうも済みませんでしたな出来るだけ早く私も行きますから。ついでがあつたらどうぞよろしく」

孫は、馬の好意が嬉しくてならなかつた。自分の子供のために僅かな休みを利用してこんな遠くまで来てくれたのが、孫は飯店で心ばかりの馳走をし、驛まで馬を送つた。二時間ほどそのために時間がかゝつた。しかし馬の好意のためにはそれ位問題でない感じだつた。

さて、旅費―汽車賃をなんとかしなければならぬ。しかしいやでも應でも主任に事情を話して、給料を先き拂ひしてもらふよりいい思案は一つも浮ばない。

事務所にかへると、孫は主任の前にいつておそくなつたことを謝つた。子供の病氣のことも話した。友人が知らせに来てくれたことも。

青寫眞を擲げて、何か計算してゐた主任は黙つて點頭いた。少し歸りがおそすぎたが、その間大して孫がゐないために困ることもなかつたし、孫の事情にも何一つ非

の打ちどころはなかつた。

しかし、孫が続いて、村に歸つて娘に會つてくる数日の暇と、月給の前借りを、ひたすら懇願したときに

「いかん！」

といつた。それは、主任自身でも思はず自分の聲の大きいのに驚いたくらいであつた。どういふ理由でいけなといふのではなく、第一に主任の感情が動いての「いかん！」であつた。

それだけに、こちらからどう順序よく理由を説いたところで、きき分けてはくれさうもない感情的に出た文句だつた。それは一昨日からの孫から感じさせられたものが集約されて爆發したやうなものだつた。

孫も勿論おどろいた。主任を甘くみるとか、馬鹿にするとかは、全然出来ない彼なのだつた。恐らく主任はいい顔してきてくれるとは思はなかつた。しかし懇願したら、きつと最後には仕方なく許してくれるであらう。その程度の豫測はあつた。

孫ははじめに炊事場に引き下つた。

黄昏、孫が悄然と歩いてゐる。彼の頭の中には、幼い彼の娘が呼吸も絶え絶えに喘いでゐる。その傍らには、

やつれた彼の妻が、ちつと彼のやつてくるのを一刻も早かれと祈りつゝ、死期に近づきつゝある愛兒を見守つてゐる。……それがとりかへしのつかぬ悔恨のやうに焼きついて離れない、孫は男泣きに泣きながら、何の目算もなく老母がたつた一人残つてゐる家の方へかへつていつた。

雪原

秋原勝二

雪が際限なく続く平原のなかを、一つの列車が、おそろしい勢で走つてゐた。が、行けども行けども、雪原は盡きようとしなかつた。

地平線に近く、雪を被つた丘のやうな起伏が、たまに見える。

また、針のやうな立木が、ひとむれあると思ふと、そこには數軒の農家が埋もれてゐたりした。

ところどころ、荷馬車のあとが、遠く見えなくなるほど續いてゐて、無聊な旅人の好奇心を意味もなくそつたりした。

何處かで、この雪原のなかに、鳥を見たやうに思ふ。

鶺鴒か、それともたゞの鳥か、線路に沿ふ電線の上にとまる、寒さうな一二羽。空に舞ひ、雪の上を下りる、若

い二三羽だつた。

乗客は殆ど、南の方の海港からこの列車に投じた人達ばかりだつた。

窓から見える風景が、あまりに大きすぎつかみどころがなかつたため、僅か二十分程で、この雪原は旅人達から見倦かれてしまつてゐた。

日露の戦ひの遺蹟は、この雪原の方々に横たはつてはゐたが、大方の人は、もう遠い追憶の底に忘れ果てゐた。何しろ、もう三十年、三十年の年月が過ぎてゐた。

いけないのは、何よりいけないのはこの雪である。何と退屈なことか、みんな、さういひた氣な顔である。

前から三輛目、三等車の中程に一人の男が眠つてゐた。年は三十四五、黒い背廣を着た、心優し氣な、感じのさ

びしい人物だつた。ほんの先程までは眼を開き、時には窓の外を眺め、何か考へごとに耽つてゐたやうだつたが何時の間にか、眠つてしまつたのだ。

彼の顔は、どこか物悲しさうに見えた。うつらうつらとした夢の中で、彼は心の片隅に、悲しいことを押しかくしてゐるやうだつた。一見して、誰でも、彼があまり裕福な方でない、といふより、むしろ、貧しい人間であるといふことを、確信し得るであらう。

オーバーと帽子とを鉤にかけて、それに顔を埋めるやうにして眠つてゐた。そして暫くの間、そのまゝ、眼を覺まさなかつた。

彼は、今朝の出立が、あまりに忙はしかつたので、列車が出て暫くは落ちつけぬ風だつた。出發の時、送りに來た友人が「しつかりしてね、それが一番大事だよ、まだ氣を落すのは早いんだし」

などと、心配氣にいつてくれたことが、心の中で幾度か反復された。

ほんとにさうだらうか、若し、ほんとにさうだつたら彼は、自分の想像が、よい方に向きかけると、すべての

人がひとしくのぞむやうに切にそれを希つた。

この豫感には、彼の不安を大きくした。若しそのやうなことがあつたら、あまりにあり得ることだから、あまりによくあり過ぎることだから、或ひは、免れ得ぬことかも知れぬ、と男は思つた。

嘗て、或る友人が、危篤の電報を受けて發つた直後、萬事休した次電を受けて、自分達は、せめて友人の、故郷までは續き得る期待を、打ち壊すこともあるまいとて列車への轉打を見合はせたことが、思ひあはされた。

或ひは、そんなことかも知れぬ。男は呟いた。友人達の計ひが、僅かにそれを糊塗してゐるに過ぎぬかも知れぬ。

若し、さうであつたとしたら………

男は、立ち上り、デッキへと出た。自分の頭はどうかしてゐる。怪しからぬ想定ばかりをつくり上げる、と思つた。

だいいち、昨夜あまり寝てゐない。乗務から戻つたのが二〇時で、電報を受けたのは二二時過ぎてゐた。夜明け近く寝についても、頭は冴え冴えとして寝つかれぬ。

日頃、心の用意は、思つてゐたとはいへ事實となれば

趣きはまた別だつた。死んではならぬ。死んではならぬと幾度か呟いた。

妻と一緒に歸した子供達が不憫だつた。今頃はさぞ、切ない思ひに包まれてゐることだらう。これは子供の心か、それとも自分の心なのか。

強い女を娶れと、それは自分達の結婚に對する人々の忠言だつた。身體の強い女なら、それに越したことはないだらう。けれど、我々の愛情を、さうした言葉が處斷することは許さぬ。

成程、妻は丈夫な方ではなかつた。成程いまは、深い病に罹れやうとしてゐる。この耳には人々のさゝやきが手にとるやうに聞える。けれど、それがなんだ。を、と、とをんなの間に、根柢的に功利を置かうとするものは誰だ。

貧しかつたが、樂しかつた自分達の生活を、男はきれぎれに思ひ出した。この世には、如何なる場所にも、ままならぬ、忌まはしい事柄ばかりが多いものだ。けれど我々の家庭は、どのやうに満足なものであつたらう。わたしは、どのやうにも、妻達を裕福らしく暮させる

すらと、額、小鼻のわきなどへ、汗のにじんでゐるのをおぼえた。

他の乗客達は、ぼんやりとしてゐた。

けれど、列車は、もう雪原のなかの大きな町、口へと幕進し続け、もうほどなく行き着かうといふのである。

男は、そこで車を替へて、朝鮮行の列車に乗りこまなくてはならない。

乗客の中には、もうそろそろ下車の準備をするものもゐた。けれど、それまでには驛が、まだ二つも残されてゐるのである。

列車が一つの驛を出てまもなく、後部の扉を排して、旅客専務があらはれた。

「モリヤゼンイチさんはおいでになりませんか？……電報でございます」

男は、はじめられたやうに席を立つた。彼は自分の耳を疑ひながら、専務の方に眼を向けた。事實が、このやうに平凡にあらはれるものだらうか。

専務はそれを見て、急ぎ足に近寄つた。

「モリヤさんですか？電報でございます」専務は去つたモリヤ。モリヤ。守谷善一は自分である……………

ことは出来なかつた。女だから時には女同志の、堪へられぬ侮辱を受けて來たこともあつたらう。けれど彼女はそれを一度も、わたしに當てつけるやうなことはしなかつた。わたしは、その哀しみが判るが故に、人間の姿が限りなく呪はしくさへなる。夫の無力を責めぬ妻は、確かに一つの美德の持ち主である。わたしは妻を愛してゐるが故に、かうしたことは妻への大きな不徳であつた。

多くの人は知るであらう。この世では、わたし達、個個の力がどのやうに慘めであるかを、如何に過去の道徳とかその他の制約が、我々を傷ましく呻吟せしめてゐるかを。

わたしは男であるから、か弱いものをかうした哀しみにおとしめる吾が無力を、恥とする。

疲れてゐたので、そのうち、彼は何時の間にか軽い眠におちたのだつた。

いさゝか長い時間である。列車はいくつもの小驛を駆けすぎて行つた。

何か底知れぬものに襲はれ、男は眼を覺ました。

列車のなかには、暖房が、すこし効きすぎた。彼はうつ

男は、電報を披き、讀んだ。そして、靜かに、かくしにたゞみこんだ。

全乗客が、自分達には想像し得ぬ不幸な影をこの男に見たのは、このときだつた。

人なかであつたので、人々の好奇の眼が自分にそゝがれてゐるのが、想像出來たので、男は、さりげなく、そのまゝ、席に腰を下ろしてゐた。視線の向けやうがないため、窓の外を、雪原の底にでも、眼を向けざるを得なかつた。

みてみると、彼の眼はもう、尋常な視覺を失つてゐる彼の眼に寫るものは、雪原の底に、よろめく姿ばかりである。

はや、列車は、雪原の町へ著かうとしてゐた。地平には、はつきりと、大きく、町の姿が、うかび上つてゐる。

ひとりの場所がほしかつた、氣儘にふるまへる僅かな場所であつた。

デツキはどうであらう。冷たい空氣にあたつて、靜かに下りるとしようか。

男は、眼をふせて立ち上つた。

友情

竹内正一

朝眼が覺めると、窓の外で牛ののんびりした鳴き聲が聞えた。寢臺の裾まで柔かい陽の光が流れ込んで、薄く垢の附いた掛布団が半分程すり落ちて居た。壁にかけた二三着の洋服と、半ば皮のはげたスーツ・ケースが一つの室の隅に轉つてゐる他に、何もない粗末な室を見廻して彼は、愈々落ちぶれたもんだと、我ながら可怪しくなつてくるのだつた。又牛の鳴き聲が窓の下でした。

彼は起きて、黒く汚れた、それでも申譯だけに掛けてある窓帷の間から外を見ると、昨夕來たときは暗くて氣がつかかなかつたが、この家の出口の前庭に、柵があつて、其の中に牛が二三匹放してあつた。何だか、全で西部劇の牧場だと思ふと、ひとりでに笑ひが込みあげてくるのだつた。

ハルビンの街でも鐵道線路一つ越した、この地帯は、この都會のうちでは、最も下級な白系露人の部落になつてゐて、どの家も、どの家も、勞働者や馬車曳きや、その家の娘達は、キャバレーやレストランの踊子や、商店の賣子達だつた。従つて家賃は安く、室代も安いので、たうとう市中に住み切れなくなつた彼等も、夜逃げ同様に、昨夕スーツケース一つと、ボロな寢臺を一つ近所の支那人の雜貨屋で借りた荷車に積んで、友達の木村と、前後に車を引つばつて、この部落に逃げ込んで來たのだつた。がらがらと石製の固い道を、車を引きすり乍ら、貸間札を眺めて、安い室を探し歩いた末、たうとうこの一月八回の室を探し出して荷物を下してほつとした氣持で、もう十時過ぎだつたのでその儘寝ちまつた。

「この室少し汚いね。」

「そんなこと言つたつて駄目だよ。これで我慢しなくちや。前に、あんた、支那料理があるし、便利だよ、時々とつて食へるよ、僕話しとく、ね、どう思ふ。貸すよ。」

寢につく前にそんなことを言ひながら、相變らず木村の眼の早いのに呆れながら、それも悪くないと思つてる中に何時か熟睡してゐた。

門のところ、荷物を昨夕積んで來た荷車が、露に濡れて置き捨てられてあつた。今日もこれを引つばつて借りて來た家へ返しに行くことを思ふと、ちよつとがつかかりした。それでこれも今眼の覺めたらしい木村に、「おい正夫さん、又、あの車ガラガラ引つばつて行くのかい。今日は軽いから君獨りで引つばつて行けるだろ。」一つベッドに臥てゐた木村は腹這ひに煙草を吸ひながら、今更に室の中の汚い調度を、しみじみ眺めて居たのが、

「冗談ぢやないよ。晝目中、あんなもの引つばつて歩けるもんか。君、こゝは、ダンサーの巢だぜ。見つかつたら體裁が悪いよ、そんなこと出来るもんか。ほつとけば今に要つたら取りにくるよ。それより、あんた金ある？」

朝食へるかね。」

「もう二十銭しかないよ。昨夕あんなに使ふんぢやなかつたな。」

「仕方ないよ、又どうにかなるよ。」

夏の朝の青い空と太陽が、窓の外に白く光つてゐた。若葉をつけた楡の樹が微風に輝きながら窓側に立つた彼等の顔に映つてゐた。木村はそんなことに全で無頓着に洋服を着ると、室を出て行つた。もう十時過ぎだつた。

暫くすると、木村は薄ぎたない紙に包んだパンと、何か油の沁み出た家鴨か何かの肉をぶら下げて歸つて來た。

「これを、やる。前の支那料理やへ行つて、向ふへ引越して來ただけど、これからお前の處贖負にしてやるから、借してくれつて言つたら、えゝ、どうぞつて言つたぜ、今度、金入つたときに纏めて拂つてやつたらいゝよね、どう思ふ。」

斯ふ云ふときになると木村の割に達者な支那語が役に立つのだつた。村山も、これで當分飯の心配がないことに一安心した。あるだけの金は、必らず一晩で使つて了はなければ承知できない木村と、一緒に生活して行くこ

とに、絶えず不安を感じながら、彼はこの年下の仲間に

離れられないのだつた。客の預り物でも何でも、手近にあるものを質に入れても、夜になれば一晩でもキャバレー通ひの止められない。夕暮どきともなれば丁度阿片患者が、阿片の切れたときと同じやうな症状を起してくる木村に、何時とはなく自分も感染して、これではいけないと書は思ふことがあつても、もと／＼嫌ひではないことではあり、何時か夜になると、同じやうに、木村と肩を組んで、薄暗い街角を徘徊した。その爲めに、お五ひに、仕事の方で相手に迷惑をかけ合ひながら、時には危く警察沙汰になりかけたりしながら、そんなことがあるごとに一層離れられない因縁を感じるのだつた。然うして、木村が遠縁に當る毛皮屋のR商會を退出されて、彼のところへ轉げ込んで来た爲めに、それまでどうやら生活費位ひな仕事になつてゐた、洋服の方も、お客や店に不義理が出来て、何時の間にか、止めたとも止めないともつかないやうな形になつて了つたのだつた。そこへ又、OとかSとかの遊び仲間が日となく夜となく入りびたつて、益々放逸な生活が続いた。その揚句室代が二三箇月滯つて、下宿の差配の露西亞人から拜むやうに頼まれて、そ

の宿を出たのだつた。

それから一、二箇月経つた。暑い夏の日が、夜の八時頃まで照つてゐた。彼等二人は、毎日腹を空らしながら、それでもさつぱりした服装をして、知人の家や、ロシア女の家を遊び廻つて、飯を食つてゐた。夏は寒くないだけに凌ぎよかつた。

夜は遅くまで掛の利くキャバレーで、時間を潰した。今の家にも入つてから一錢も室代を入れることが出来なかつた。前の支那料理屋の借金も何時か十四五圓溜つて、もう借が利き相にもなかつた。家賃の催促がうるさいので、成たけ家にも歸れないので、朝の三時頃まで、キャバレーで、麥酒一本を相手に、面白くもない顔をして踊つてゐた。そして、四時頃になると、明るく朝日が照り始める頃、キャバレーを出て、松花江の川向ふの砂原へ五錢の舟賃を拂つて渡つて行つた。そして五錢の肉パンを二つづゝ食つて、洋服の下に着てゐる水着一枚になつて、河へ泳ぐたり、砂原に寝轉んだりして、一日送るのだつた。晝頃になると、顔見知りのロシアのダンサー達が泳ぎに来た。そして又日が暮れるのだつた。

愈々松花江を渡る舟賃も、肉パンを買ふ銅貨もなくなつた。

「おい何か好い仕事はないかな。」

「駄目だよ夏は、冬になれば毛皮が賣れるんだがなあ」

二人はぼんやりと、砂原に寝轉んで、青空を眺めながら、それぞれに當のない金儲けの口を考へて見た。白い雲がうすく散つてゐる空には、時々齊々哈爾通ひの旅客機が低く爆音を眠く残しながらとんで行つた。河からはロシア人の若い男や女の乗つたヨットが、けた／＼ましい笑聲を乗せてすいすいと太陽島の島影に消えた。モーターボートのエンジンが快い響きを立てながら、幾つもの幾つも走つてゐた。

「正夫さん、今日の飯どうするんだよ。」

空腹がこたへて來ると、何もかも倦くなつて來た。

「仕方ない寝臺賣らう、三圓ぐらいになるよ。」

「賣るつたつて、あんなもの持出せば、直ぐ捕まっちゃうぜ、家賃拂つてないのに……」

「大丈夫さ。僕賣るよ。」

これで、とう／＼相談が纏つて夕暮時の家人の忙しさ

うな時刻を見計つて、満人の屑屋を引つぱつて下宿へこつそり連れ込んで寝臺を賣ることが出来た。幸ひ家には耳の悪い婆さん獨りだったので、隙を見計つて夫々に自分のスーツケースを抱えて裏口からどろぼうのやうに飛び出して、一息に線路越しに逃げ出した。そして更めて顔を見合して思はず笑ひだした。二人とも汗をびつしよりにかいて、喉をかわかしてゐた。

そして久し振りで、ウオツカとロシア料理ですつかり好い氣持になれた。

「今頃下宿の主人なんか、あわてゝるだらうなあ。」

「それよりあの寝臺賣つた支那人の奴、持出したかしらん。捕まつて家賃の抵當だから渡すことできないなんて言はれてるかも知れないぜ。」

「仕方ないよ。そのうちに拂つてやるよ、前の支那料理にだつて十四五圓借金になつてるよ。」

村山は、然し今夜から早速泊るところを探さなければならぬと思ふと、なんだか心細い氣がした。肉パンを食つて砂原へ寝轉んでゐるのも二日三日は好いが、そう毎日ではやり切れなかつた。さう思ふと無性に人の家の屋根の下が戀しくなつて來た。どうしても、木氣に何か

仕事を探さなくてはいけない、と思ひ出した。

木村は案外さうなつても平氣なやうに生れ着いてゐた彼には愈々となれば満人の仕事場の隅に寝て、高榮飯をうまさうに食ふだけの度胸と、経験があるだけに、ゆつくり落着いてゐられた。そして冬になれば、冬になればと思つて冬の近づいて来るのを待つて居た。

秋近くなつて村山は○百貨店に新設された婦人洋裁部に招かれて、そこへ勤めることになつた。もう屋根の心配も晩飯の苦勞も要らなくなつた。インチテーブと鉄とハトロン紙と派手な薄い婦人服の生地の堆積の中に埋つて得意な顔をしてゐた。

「これが今年の秋、ルシアン・ルロンで發表致しましたローブ・ドウ・デインで御座りますが、こゝら當りで御座りますと、日本の御婦人方が御召になりまして、よくヒット致しますことゝ存じます。」

ポオグやコスチュウム・パリなどの挿繪を軽く押へながら、婦人達の相手になつてゐる村山は、すっかり板についてゐた。

が、木村は相變らず裏衝の不潔な、うす暗い満人の仕

うに店に出動して居なかつた。木村にとつては村山の室も、自分の室もなかつた。これは一つ落着いた生活を空想し、實行して見やうといふ氣持を持たした村山には、すくなくならず迷惑だつた。彼はどこへ行つても、
「木村つたら、僕のとこへ又やつて来て寝泊りしてるもんだから、女の子がさつぱり來なくなつちやつたんです。どうしたもんでせうか。困つた奴ですよ。」

などと觸れ歩いた。

然し、村山の室へ木村は寝ることが、當り前の様な顔をして居つて了ふと、又村山の方でも無理にこれを追ひ出さうとはしなかつた。そして又夜になると二人は手をつないで街を歩いた。この不思議な友情はお互ひに相手を利用し合ふ必要のある時に極度に發輝され、助け合つた。そして二人離れてゐる時は互ひに相手の缺點を憎み合ひ、けなし合ふのたつた。

「女にもてゝ困るやうなこと、村山君しよつちう言つてるけど、何だいKのマルーシヤだつて、あんなに夢中になつてるやうなこと言つてたけど、あの女が上海へ行く時だつて、別れにも來ずに、黙つて行つちやつたじやないですか。ね、いくら村山君が夢中になつてたつて、女

事場の裁物板の上に、夜は、南京蟲のやうに丸くなつて臥てゐた。

秋風が松花江の水を次第に淺くし、對岸の叢は遠目にも黄色く色づいて行つた。肅條とした秋の風景が、人々の心を傷ませる頃になつた。露天市場で二圓で買つた木村の、大得意だつたアメリカ仕立の格子縞の上衣が、色が濁めて黄色くなり、派手なエビ茶のネクタイだけが嫌に目立つた。

村山はアパートの一室を借りて、住めるやうになつた。彼はその室を、それは三階も屋根部屋だつたが、それを様々に裝飾して納つてゐた。友達が來るとM・J・Bのコーヒートを沸し、クレイベンの赤い罐をおもむろに取出した。そして、彼の室へ夜更けて遊びに來る女の話をして聞かせた。

村山が室を持つたことを知ると、木村は、何時か又やつて來て泊つて行くやうになつた。そして朝になると上衣の内かくしから西洋剃刀と、齒ブラシをとり出して、顔を剃り、洗面臺の上にある煉齒磨のチューブを塗りつけて齒を磨き、顔を洗つてのこと自分の室からでも出かけて行くやうに平然と出て行つた。その頃村山はと

の氣持それで解るよ、ねえ、あんたどう思ふ。」

村山がどこへ言つても黙つて居られずに、吹聴して歩いてゐた、あるロシアのキャバレーの踊子がこの土地を賣つて、上海へ去つたときのことなどを、木村は冷笑しながら話すのだつた。

さうしてキタイスカヤの大通りに、冬の風が冷く吹き始め、商店の窓に毛皮が雜然と無神經に並べ立てられ、そして飾窓のガラスの凍結を防ぐために扇風器が首を振り出すやうになり、ロシア語の賣出廣告が店々の軒に、でかでかと張り出される頃になつた。村山は又何時の間にか、その勤先のアパートを辭めて了つて居た。そして木村と二人で寒さうに外套の襟を立て、街を歩く姿が見受けられた。

そんなある日、二人して歩いてゐた時、キタイスカヤの人通りの中で、ばつたり、例の借のある支那料理屋の番頭でしよつちう彼等のところへ借金取に來たのと同會はしさうになつた。

「おい正夫さん、あの番頭が來るぜ、逃げやう、支那料理の金まだ拂つてないんだよ。」

「本當、うるさいね、つかまると。」

二人は慌て、人混みに紛れて、車道を反対側へ越さうとしたが、間に合はないで、まんまと見つかつて了つた二人は知らない顔をして、さつさと向側へ渡つたあとをその番頭はどンドン追ひかけて來た。そしてたうとう横丁へ曲つたところで捕つて了つた。

「木村さん私を見ても逃げなくて好いですよ。」

と、笑ひながら二人の方へ近づいて來た。木村も仕方なく、頭を掻きながら、

「やお暫く、一度遊びに行かうと思つてたんだが、何しろこちらの方へ引越して來たんで、遠くなつて行けなかつたよ。あの借は今月の末拂はふと思つてるんだ。もうちよつと待つて呉れ給へ。」

さう言ふと、その満人はにやにや笑ひながら、二人の顔を等分に眺めて、

「いやそのことなら心配ないです。私もうあの店には居ません。私今度この先きの方に商賣始めましたから遊びに來て下さい。」

と言ふと、そのまゝ行つて了つた。

「冗談じゃないぜ、驚かせるなよ。」

二人は妙な顔を見合せて、呆氣にとられた。

さう斯うしてゐるうちに、十二月も末近くなつて、今度木村がある露人の毛皮屋へ就職することになつた。

彼の待つて居た冬が來ると、彼の希望通り、ちよつとした種々の儲け口が、彼のところへ轉つて來た。金廻りがよくなると、なるで、持つて居るだけの金を一晚で使つて了はなければ氣の濟まない彼だつた。

ぐでぐでに酔つばらつた彼等は、朝の四時、五時まで飲み歩いて、疲れると、支那風呂を叩き起して、その脱衣場で長々と寝そべつて、夜を明すのだつた。

「支那風呂に寝るの一番安いですよ、目が覺めると朝風呂に入つて、これで二十五錢ですからね。」

それでも決つた宿を持たうともしない、木村は香氣さうに言つた。

都會は一つの大きな池の中に溜つた溜り水でしかなかつた。流れ込む水、流れでる水、地の中から涌きだす水、それらの濺み、たゆたふ中に、水草が浮き、微生物が生活した。一日が暮れ、一日が明けける儘に、村山と木

村は、その大きな池の中で、浮游物のやうに、さうした生活を生きてゐた。金に困ると木村は、店の品物さへ

一時の流用の資にした。併し、兩人とも大きな悪事の出來るやうな人柄ではないだけに、迷惑をこふむることがあつても、人々は苦い顔をするだけで済して了ふのだつた。それが段々彼等には、世間のものが甘く見えてくるのだつた。彼等は彼等自身の理屈が立ちさへすればどんなことをやつても大抵通るものと云ふ安心を持つやうになつた。ところがそれがいけなかつた。木村がある客から頼まれた毛皮の修繕ものを、例のやうに一時融通して、約束の期限までに納められなかつたのが、お客の方に分つて、その客が二人一緒に警察に訴へたのだつた。警察からどこでどうして調べたのか、彼等二人の泊つてゐた家を探しだして、出頭命令が届いた。

土曜日の午後このくくと二人は出かけて行つた。長い間待たされ退著時間間際になつてやつと調べが始つたが結局その日のうちに形がつかず、たうとう月曜日まで留置されることになつた。

「大體君等の言ふことは解つたが、もう少し調べることに有るから、今日はもう遅いから入つて居給ひ。」

流石にどうも留置きは厭だつた。二日間薄暗いところへ放り込まれちややり切れなかつた。

「何とか今日中に宥してもらひたいんですが、いけませんでせうか。急ぎの用事がありますので。」

「駄目だよ、この件はこれでまあ濟んだやうなものだがお前達のことは、その他にも取調べる必要がある。」

映畫で見たやうな鐵格子の留置場は、裏通に向つた半ば地下室のうす暗い室に、四五人の男が黒くかたまつて居た。二人は夫々別の室に入れられた。村山は急に心細くなつて來た。何だかこゝへ入つては又、出られるか、どうか解らないやうな不安が起つてくるのだつた。そして一方何か、自分が思ひもかけないやうな大罪を犯して、今つかまつて居るのだといふやうな氣が、何となくして來て、急にアメリカのギヤングにでもなつたやうな悲壯な氣持までして來るのだつた。

凝つと板の間に座つて居ると、外は段々うす暗くなつて、たそがれて來た。廊下の暗い電燈の燈がぼつかりと室を照し出した。隅の方では誰か低聲でぼそ／＼話して居るのを聞くと、急に心細さが増して來た。木村は今頃どの邊の室で、何をしてくるか知らと考へたりした。遠く

の方でカーブを切る電車の音が、きしむやうに地に轟いては、消えて行つた。街の燈が無性に戀しくなつてくるのだつた。食欲が激しく、今此處ではどうしても食へない食物を目の前に浮べさせた。何かしらぼろ／＼涙が出さうな氣持だつた。誰かちよつとでもつくればわつと泣きごえを上げたいやうな、ゐても立つてもゐられないやうに興奮してくるのだつた。何の爲めにこんなところに窮屈な思ひをして入つてゐなければならぬのか、これから二晩こゝに凝つと泊め置かれなければならぬのだ時間立つのがこんなにもろいものとは思はなかつた。

それでも月曜日の朝やつと開放された。晝前まで散々お説教を食つて、

「それでは歸つて宜しい。」

と、釋された。二人は黙つて頭を下げた。扉を開けて外へ出ると、思はず二人は、わあつと抱きついて聲を揚げたいやうな氣持だつた。今日も明るい日が照つてゐた自動車走つてゐた。人間が歩いてゐた。何時にも見たことのない世界を見るやうだつた。

「おい景氣よく自動車で行かうぜ。」

「よからう。」

ピーツと木村は口笛を鳴らした。二人の乗つた自動車は一散に埠頭區の雑踏の方へ車道を走つた。

死亡室附近

私の妹の喜美は、何かにつけてご幣を擔ぎたがる癖がある。私はそれを別段悪いことに思つてゐない、寧ろ彼女の今日までの境遇からして當然のことゝさへ思つてゐる。しかし、それが直接私達の生活にひびいて來ると、辟易しないわけにいかない。

彼女は今姉の家に手傳ひに行つてゐて、時々私の家に歸つて來る慣はしになつてゐるが、或る朝、まだ私の寢てゐるうちに歸つて來た彼女は、いきなり

「兄さん、こゝの家見て貰つたら大へん家相がよくないのよ。」

と、驚ろかした。

「どう云ふわけで一體お前はこゝの家を、つけろのよ。」

富田 壽

私は、床の中で一寸おこつた顔をして見せた。すると「け、ち、なんかつけるんではないわ、ほんとに悪いから悪いと云つたまよ——」

彼女は、折角の親切心を、おこるなどとは不都合だと思つたに違ひない、眞剣な顔で云ひ返した。

彼女の云ふところによると、はつきりした理由は自分にもまだ分つてゐないが、ともかく間取と方位が大へんよくないと云ふのだつた。

「匹田先生のおつしやることなんだから、きいておいて決して悪くないと思ふの——」

私がいつもの癖で、少し彼女のご幣擔ぎをからかひすぎたゝめ、しまひに喜美はかう云つておし黙つてしまつた。

四田先生は喜美が加入してゐる修養園の指導者で、有益な講演をする傍ら、觀相や姓名判断を説いてゐるらしかった。無料で觀て貰へるのが團員の特典だと云ふことだつた。

喜美はこの特典を利用して、自分の名前の「喜美」も非常によくないと云ふので、どう云ふ根據によるものか「甲味」と改稱してゐた。それだけならまだいい、私の家族の名前を一々批判して、誰の名は字劃が二つ多すぎるとか、誰のは一つ足りないとか説明した。中でも長女の出紀子の名は、下の「子」が非常によくないから取つた方がいい、としきりに主張した。

喜美がかう云ふ風にご幣を擔ぐ様になつたのには、元元無理からぬ理由があつた。私達の兄弟の中で末兄だつた彼女は、他の兄弟達が早くから兩親の許を離れてゐたため、女學校を出ても長い間嫁に行かなかつた。結婚したのは二十四歳で、私達の郷里の習慣から云ふと大へんおかれてゐた。と、その結婚が、可哀さうなことに二年ほどして到頭破れてしまつたのだ。それ以來七、八年彼女は兄弟や親戚達の間を轉々とし、家政婦、女中、看護婦などの役目を一人で引受けて來た。再婚の話も幾度か

あつたが、一度不幸な結婚に破れた女には、仲々適當な話がまとまらなかつた。その中元來が丈夫でない彼女は長い病氣をしたりして、次第に精神的にも強さを失つてしまつた。私達肉親のものはそれをどれだけ心配したか知れなかつたが、全くどうにもならなかつた。年と共に弱さに沈んでゆく彼女を、たゞハラハラして見てゐるだけで、どうしたら強くしてやる事が出来るか—と、私はそればかり考へてゐた。

喜美が修養園へ入つたことは、そんな意味で決して笑へなかつた。

「修養園つて有難いもんだね。」
私達は、蔭でそんなことを云ひ合ふほど、喜美の性格が目増しに強くなつてゆくのを、祕かによろこび、且つ不思議な氣持で眺めてゐた。……

さて、家相のことで、私は喜美の報告をとり合はなかつたが、妻のよしは眞劍に氣にしてゐるらしかつた。

ある日、私は掃除をしてゐると、奥の六疊と四疊半の間の敷居の隅に、針金の切れ端が結びつけてあるのを發見した。

「君、これは何だい？」

私はよしを呼んで訊ねた。

「それ……………」

彼女はさう云つたきり答へようとしな、その素振が怪しかつたので、

「何だ、説明しろよ、おかしいじゃないか。」

私は重ねて問ひかけた。

「……………」

よしは、たゞ笑つてゐるだけで返事をしない。云へないならいゝ——さう云ふ氣になつて、

「邪魔だから取つてしまはう……」

私は、その針金を取外さうとした。と、

「駄目、駄目、いけませんよ、それを取つては。」

よしは、私の手を拂ひのけようと頑強に抵抗した。

あとで、彼女が白状したところによると、四疊半と六疊の二間が、堅に並んでゐるのがこの家で一番家相上面白くないと云ふので、喜美の提言により、針金で繋ぎ合はしたのだと云ふのであつた。

私は馬鹿らしくて、しかる氣にもなれず、そのまゝにしてしまつたが、その針金が眼につく度に何となくいゝ

氣持がしなくなつた。

昔から、家相と云ふものを問題にすることに、何か根據があるには違ひない、さう思つて、全然否定するわけではなかつたが、社宅住ひなどしてゐるものに、そんなことが云つてゐられるものか——私は常にそんな氣でゐた。

だから、今の家へ移つて來たのも、南向きで日常がいゝと云ふ條件以外に少しも考へなかつた。

「家相なんか問題にするのは、自分で家を建てる能力のある人の云ふことだよ、早くそんな身分になつて見たいもんだね。」

私は、冗談まじりに妻に云つた。

しかし、間もなく私は、妻の氣持が、この家相に關はつて、容易にほぐれない一つの不安を抱いてゐるらしいことに氣づいた。

「ね、お願ひだからどこか外の社宅へ變る手続きませうよ。」

よしはしきりにさう云ひ出した。

私は、はじめ彼女の不安がどこにあるのかさつぱり見當がつかなかつた。暫くしてそれが分ると、

「君の心配は家相ではない、僕の氣持なんだらう？」
私はかう云つて彼女の顔を覗つた。

よしは、この家にゐた前住者が、二代まで夫婦分れをしたと云ふことを何處かからきゝ込み、そのため、ひとり神経をいためてゐるらしかつた。

「……………」

私は、妻の氣持が分ると、恐ろしい氣がした。曾つて私に他の女性との交際があつたとき、一度も私を疑つたことはなく、どこまでも信じ切つてゐた妻が、この様な氣持の變化を抱く様になつたことに、底知れぬ不安を感じ出した。

私は、今、決して妻を捨てる様な氣持を持つてゐないしかし、妻も私も年齢的に云つて、お互の愛慾心を今最もブランクに曝してゐる時期である。假想的な杞憂が、いつどんな轉機から、恐ろしい事實となつて現れないものとも限らない。

妻は、そのことを私より先に感づいてゐる。——さう思ふと、私は一つの決心をした。

抵抗主義——こんな呼び方は少しおかしいが、ともかく、眼に見えない運命的な力が、私達の生活を勝手に破

壤しようとするならば、意識的にその力と戦つてやらう……私はそれが私達の生きて行く道だと神妙に考へた。

×

私が、以上の様な悲壯な決心をしてゐる頃、ある日珍らしく友人の吉村が訪ねて來た。

彼は郊外に住んでゐて、私などより遙かに裕福だつた何事でも一應批判せずにはゐられぬ性分だつた。

「君んとこの家もいゝが焼場の眞ん前ぢや感心せんね。」
いきなり吉村は云ひ出した。

「焼き場ぢやないよ——」

私が反駁すると、

「あゝさうか、死亡室だね、その方が尙ほ悪いや、傳染病患者の死體を運ぶんだらう。」

吉村は一流の毒舌を弄した。

私はそれ以上取合はなかつたが、「死亡室」と云ふ言葉が、何故かピンと頭に來た。側できいてゐた妻が、又何か悪い氣持を抱かなければいゝが——さう思つたのである。

私達の社宅は二十數軒の集合社宅で、丁度病院の裏側

に當つてゐた。道路を來んで私の家の眞向ひが屍體室になつてゐる。

私は、引越して來た日に、家の前にベンキのはげた看板の様なものを見つけ、何だらうと近よつて見ると、「葬式ト死體運搬ノ御用ハ是非弊社へ、新造ノ靈柩車ニテ鄭重サービス致シマス。人ヲ介せず直接御申込ミ下サイ——××社」かう云ふ文字が書いてあつた。

私は、そこが病院の屍體室であることをはじめ知つた。屍體室に收容されるのは、傳染病患者と、市内に引取人のない患者の死亡した時に限つてゐる。

こんな建物の前に居住することは、あまり縁起でもない。一應さう思つたけれども、わざ／＼引越しを止めるほどの氣持にはなれなかつた。

たゞ、私が常に不服に思つてゐるのは、人々が屍體室のことを、「死亡室」と呼んでゐることであつた。「屍體室」と「死亡室」、どちらでもいゝことの様で、氣になつて仕方がなかつた。不用意と云ふよりも認識不足も甚だしい「死亡」と云ふ動詞の使ひ方が何故か神経をイライラさせるのであつた。

しかし私は、近所の細君達が、支那人の店で物を注文

するとき、「我的房子病院死了房子前邊兒」などと云つてゐるのを聞くと、却つて微笑ましい氣持になるのであつた。

×

私達の集合社宅は、鍵の手になつて、三角形な街の一角を占領してゐた。然し、同名の大きい町が別に二町以上も離れた東の方にあつた。それ故、町名を云つただけでは、はつきりと社宅の所在を人に教へることが出来なかつた。

洋車などに乗つて歸宅するとき、私もまたいつの間にか「死了房子前邊兒」と云ふ様になつた。

その死了房子に屍體が運ばれると、門の大きい扉が開かれて、少し奥まつた玄關には「忌」と書いた紙が菱形に張られてゐた。「××家告別式場」と門柱に張出してあることもあり、大抵大きい花環が門までの坂になつた通路の脇に並んでゐた。

お通夜のある晩は、門燈に赤い燈が入つてゐて、室の窓からは、明々と電燈の光が眺められた。

近所のある家の細君は、食堂車に乗つてゐる夫が年中不在勝ちなので、「死亡室にお通夜のある晩は心強い氣

がします。」と云つてゐた。夕方葬盤や將葬盤を持ち込むものがあるかと思ふと、その夜はきまつて、○玉などと書いた提燈をつけたうどん屋の自轉車が入つていつた。又、夜通し、自動車が出たり入つたりすることもあつた。

出棺の時刻になると、葬儀屋××社が靈柩車を持つて來た。靈柩車に棺が納められると、何某の柩と書いた旗が立てられて、大抵は行列の出發前に、其處で記念の寫眞が撮影された。「顔の廣い」家の葬式ほど葬列の長さも長く、花環の数も多いのが通例の様であつた。見送りの人数や花環があまり多すぎると、死亡室の前では撮影が出来ないので、私の家の前に行列が竝んだ。私は、そんなとき、なるべく寫眞を取つて貰ふ人の嚴肅な氣持を損ねることのない様に、家の窓をしめ、妻には物干の洗濯物など取り込む様に云ひつけた。

×
いつの間にか一年以上の月日がたつて、出入のはげしい社宅街では、私も古顔の一人になつてゐた。

二十數軒の社宅の共同機關としては、共同浴場がたつた一つある切りだつた。自然話題の中心はこの風呂場の

ことから始まつた。ある時、お互に風呂で顔を合すだけでは物足りないから、一つ會を作つてこの街の親交を圖らうではないか——さう云ふ議が誰からともなく持上つた。

從來浴場の世話をしてゐた人の家で寄り合ひが開かれその人が初代の會長に推されて、會長指名により四五人の役員が任命された。すると、私まで古顔だと云ふのでその中に入れられてしまつた。

「私にはとてもそんな資格はありませんよ。」

いくら辭退しても人々がきゝ入れなかつた。次で、入浴料金徴收規約の改正、一戸當り金十錢の親睦會費の取立、會員及家族に不幸のあつた時は金三圓宛の弔慰金を贈る件等々を可決し、最後に「本會ハ親交會ト稱ス」と會名が決定した。

歸宅してこの結末を話すと、
「まあ、あなたが役員？」

さう云つた切り、妻のよしは思はず吹き出してしまつた。……

しかし、彼女は、どうやらもう家相のことは氣にしなければなつてゐるらしくつた。

×
春が近づいて、死亡室の前の道路では、毎日子供達がキヤツチ・ボールをして遊んでゐる。

私も勤務から歸ると、ワイシャツ一つになつて長男の慶一を相手にストライクの稽古をするのが、この頃の日課になつた。その中、私は子供達を集めて、チームを作る計畫である。

齒 車

福 家 富 士 夫

太陽は今、落ちようとしてゐる。眞紅だ。此處は地球の涯でもあらうか、茫漠とした平地の彼方は、きつと斷涯の様に一線で劃されてゐるに違ひない。

土地は黒土だ、それに、此れでも生きてゐるのか二尺に餘るヅツ黒い雜草が果てしない。

私達がチチハルを南下して三日、私達の長い北滿旅行でも始めて見た凄慘な風景であつた。

岩にすさまじく喰ひ付く海の光景も恐怖的ではあらうが、物音は何一つ聞へない、鳥の鳴聲さへ聞へない、微風もないそして眼の前に大きな火の齒車が音もなく廻轉する此の風景はより一層人の心を衝かずにはおかないものだ。

此處は地獄か、物狂はしい嘲笑の響きが、音なくして

各自の試験成績が、もうぼつ／＼口端に上つてゐる。

黒土、鐵、硬水、此處に育つ人間は垢黒く成長するだらう。そして此の様な見渡す限り何も無い、云はば壁のない世界に住む者は小さな感傷を篩ひ落してもつと根底的な感傷に命を賭して育つだらう。

此度の診療の旅で私達は色々變つた患者を扱つたが其れ以上に何と無数の異常な性格に觸れた事であらうか。

人間の顔が皆異なる様に、又運命が別々である様に土地も一個所として同じ様相を示してはゐない。そして土地の持つ力が其處に移り住んで來る人間の性格を泥人形の様にするに違ひない。

そうだ、醫者としての私は餘りに人間のみを相手にし過ぎた。其の廣漠とした土地の特殊性をみなくて、どうして人間を打診出來ようか。

昨日私達は漱江に沿つて南下した。河沿ひの或る護岸工事場で私達は請はれた。行つて見ると三人の者が刺創と銃創に倒れてゐた。

「大動脈双刺傷、右肺中葉貫通銃創、後頭部及び頸部打撲傷、一部皮膚剝離、割創あり。上膊骨骨折及び擦過銃

耳を打つ、不意に騒音が周圍から起つて、私のものうい

幻想を破つた。見ると夜營の準備だ、杖を打ちこむ音、

テントを擴げる騒聲、それらは何と小さな慘めな音であ

らうか。私も馬から降りた。内股がヒリ／＼する。もう

此の柔き皮膚も幾枚と破れて、硬ばつた事か。ヨヂーム

の臭氣を思ひ出すさへ、私の肌は鳥肌となつて顫へる。

齒車は人の命を盗む様に、こつそり一廻轉したのか、

空に突き上げる光りは空を暗赤色に、ほてらせて、爛れ

た皮膚を思ひ出さす。

「此の土地の鐵含有量は相當高率らしく思はれます」

「水は相當高い硬度を持つてゐます。二十度を越へてま

すからね。それに硫酸マグネシウムとカルシウムが可な

り多量です。」

創、腰部縛創あり。鼠蹊部切創二センチに及ぶ、男根切除さる」

外科醫のD君が呟く様に云ふ視診はお經の様に暗かつた。二人は既に絶命し、他の一名は臨終だつた。間もなくすると、顔に浮らな皺をたゝえた日本人が一人來た。

「へへへ、此奴ら今朝、匪賊にやられたんですがね、可哀想に、あんまり出しやばつた事を仕出かしやあがつたもんだからへへへ。」

と何かを暗示する様に上眼を剝いて引下がつて行つた。

其の夜、私達のキャンブに其の男が訪ねて來た。恰で

盗みにでも來る様に人眼を恐れてこそ／＼と私のテント

に入つて來ると、

「はあ、先生様、實あお願ひがあつてやつて來たんです

が、わつしのお袋が多度津の海岸町にゐる筈なんですが

がね。で恐れ入りやすが此の金をお袋に渡して頂きたい

んでへえ、へえわしの名は後宮俊次でんでさあ」と云ひ

ながら胸巻きにしてゐた袋を解いて私の前に差し出すの

だつた。私は、自分で送れば好いでせうと云ふと、

「そんな事が出来るくらいなら、何も先生様達の來るのを御待ちしやしませんや。金を貯めてる事でも、ばれよ

うものなら……へへへ」

と晝間洩らしたと同じ様な苦笑ひを見せるのだつた。

それから私の傍に、にじり寄つて来ると、耳元で囁く様に、

「今日の晝なあ、ありや匪賊にやられたんぢやねいんですぜ。ありや仲間に見殺されたんでさあ。わしにあ、ちやんと判りませ、ほら肥つちよロスケの女がゐたでせう、あれの事で、さあ。」

と云ふのだつた。晝間、私達が診てゐる時私達の側を傲然と肩をゆすつて行く中年のロシア女を、私は思ひ出した。恐らくトラホームにでも侵されてゐるのだらう、眼の縁を爛れさせ、だらしなく、胸をはだけて、素足のまま歩いてゐた。

「何にしろ、女と名のつくものは、あの近所にはあれ一人しか居ねいんですから、無理もねい事でき。」

と其の男は云ひ終るとニク／＼と不思議な嘲笑を浮べた。私は思はず體を硬めた。

すると其の俊次と云ふ男は急に悲しそうな顔色を見せながら自分は若い時からの極道者で母にも色々心配をかけた、此の金がせめてもの恩返しだから頼む、それか

ら自分がこんな所にある事は絶対云つて呉れるな、と云つて立上つて歸つて行つた。私は其の男が出て行く時横顔にチラと光つた涙を確かに見た。

此の様にして、すり切れて行く幾多の性格は私達の常識を嘲笑する。私達の理解を野暮くさく思ふ。だが其處には道徳はないものであらうか、否完備した道徳がある徹底した法律がある。そして私達の偽善を力一杯嘲笑する世界である。

空全體に燃へ上つてゐた紅は何時の間にか下の方から段々と紫に喰はれて行つた。何時の間に出て来たのか爽やかな微風が枯木の様な雑草の間をさわ／＼と音を立てて通り抜ける、テントの横で夕食の仕度に焼かれた雑草はパチ／＼と燃へ上り、其の火は悲しい烽火の様であつた。

彼方の地平線と空との境もかなり不明瞭になつて来た星が一つ光つてゐる。

丁度私達が火黒河を僅かに出た或る小さな部落に屯した時も、感傷的に星が一つ印象に残つた。此の光りは何萬年前の光りか、でも矢張り此れは現在の光りである。此の光りを私達の手になねたプロメテウスに人間は慚愧

すべきか、それとも此れを呪ふべきか、でもどの様に人間が焦つて見た所で、到底、彼の肝臓に喰ひ下つた鴉を追拂えるものではない。

此の様なとりとめもない感慨を、あの時も感じた。其の翌日の事であつたらうか、其の部落の近くに敷設中の鐵道工事の現場から得體の知れぬ流行病が発生する爲めに其の研究に趣いた。其の現場に行着いてみると、小さなアンペラの掘立小屋に十人近くの患者が死體遺棄場の様に轉がつてゐた。戦場以上のそんな狀に私達は呆れてしまつた。

診察の結果、どうやら鼻鼻疽らしいと云ふ事に私達の意見は一致した。其の時眼が妙に坐つてゐながら、おどおどとした一人の男が連れられて来た。二十歳を越へたかと思はれる様な若い綺麗な顔をした男であつたが、夢語の様に朝鮮語で何か喋り續けてゐた。

通譯の出来る朝鮮人をつれて来て其の呓言を譯させてみたが、其の男にも何を云つてゐるのか判らないとの事だつた。時々「ガスが溜つて、下腹で、畜生！」と云ふのが判る位だつた。明らかに何か衝動を受けた發作的な精神異常である。此の患者に對して私達は鎮靜劑の注射

でも行ふより以外、何の處置法もなかつた。同行のM君が其の事を通譯の朝鮮人に云つた所が、其の男はすぐ其の旨を係長らしき者に告げに行つた。それから暫くたつて、私達は其の現場を去つたのであるが、ものの一里も進まない内に其の男は誰の命令でか、射殺されてゐる事を後で知つた。

其の事を聞いて、私達は氣の小さそうな其の若者の狂つた姿を再び思出して其れが私達の責任で、もある様に押し付けられる様な妙な感情に打たれた、でも何故あの青年は發狂しただらうか。此れも間もなく自然と私達には理解出来た。あの現場には女が居ない以上、其の性的對象の向く方向も判然とする。

直腸に炎症を起して體中に熱つぽたい感じを持ち、何かもく／＼と湧き上り吐氣を催す様な肉體的な不快感に唸され、其の上此の様な純な青年が始めて接したのであらう、奇怪な世界、骨を削る奴隷の生活は過重な精神的負擔になつた事であらう、其の様な事を想像して来ると其れが自分勝手な推理であらうとも、私自身狂はしくなる様な憤怒に燃へ立たされた。

然し憤つて見た所で其れが何になるか。

あの青年が其のまゝ生きてゐた所で、青年自身にとつて其れが幸ひとなるものと云へるだらうか。例へ一刻でも生命を延ばす事はあの青年にとつては無意味であり苦痛でさへあるかも知れない。それから一日餘りの旅程の後に私達は××に着いた。

其處は、其の地方の匪賊討伐の根據地として多數の兵が常在してゐた。

丁度モロツコのその様に兵の動く後には必ず娘子軍の群が、ダニの様にくつき廻つてゐるのだつた。そして其處にも可なり多數のそんな女が見られた。日本人も居れば朝鮮人もゐた、又土着の支那人の女がすぐそれに代ると云ふ話も聞いた。

何處かの板場であつた様な男が二三人の女を引連れて來れば、今迄仲居でもしてゐた様な女が崩れた丸髻で女將面をしながら帳場に坐る。

でもそれは廂の下に丸い街燈を下げ、格子張り、二階造りの家ではない。それは昨日までは土地の農夫が住んでゐて、そのオンドルには昨夜まで農夫が服も靴も脱がずに寝てゐたに違ひない家である。オンドルの上に幾枚かの呉蓆が敷かれる。するともう客の姿さへ見えて來

る。

女は來る客、來る客に無感與的な、物憂い視線をじろりと投げ與へながら、其の英蓆の上に、あぐらをかき、不味そうに煙草を吸つてゐる、潰れた髪の中に指を突こんで頭をポリポリかく女の姿態の何處から男は刺戟を受けるのであらうか。私が其の様な意味の事を或る男に話したら、

「乙にすましこんでなんぞ居られた日にや、面倒くさくつて窮屈でをられやしませんよ。」と答へてゐた。

でも不思議なもので荒廢し切つた様な此んな女の鬨も暫らく見つけてゐる中には、此の土地に似合はしい一つの人物風景とまでなつて來て頽廢と云つた雰圍氣が何時の間にか跡痕もなく其の臭ひを消してしまふのだつた。確かに此の様な所に少しでも上品ぶつた女でも居ようものなら鼻持ちならぬ、都會生活の臭味を感じて嘲笑を買ふに違ひない。

或る日の事であつた。一人の女が私の診察を求めた。主訴は、すぐ息切れがして苦しいと云ふのであつた。診断は明かに肺結核の二期症候であつた。又、女の商

賣から考へて見ても、此の女の肉體を蝕んでゐる性病は勿論考へなければならぬ。體は非道く衰弱を來たしてゐる。でも光りを失つた、ものうい鈍い眼には、絶へず自嘲の影が映つてゐた。そして、力なく垂れた乳房や赤く荒れ焼けた肌には顔の表情とは正反對に劇しい肉體の苦悶を痛々しく現はしてゐる。

「今の御仕事をやめる事は出来ませんか。」

女は暫くの間、私の顔を無表情的に眺めてゐたが、意味の判らない微笑を洩らしたときり何とも答へなかつた。

其の様な事を云つてしまつて、私は我ながら愚にもつかない事を云つたものだと思つた。矢張り、あけすけ、はつきり云つてしまはなければいけない。

「若しこのまゝですと、後一月も危いですよ。」すると、女は意外にも可なりの動搖を見せて、何か劇しい力が眼にも光つてゐた。

それから靜かに面を伏せて、物云ひたげな様子であつた。其の時私は何か聞き出したい意欲にかられながら、反動的にとでも云はうか、そゝくさと立上り去らうとした。

すると、女は私を呼び止めた。それから私の側につと、

寄りそうようにして來ると、私の手に幾何かの金を握らせようとするのだつた。私は其の時、譯の判らない腹立たしさからかれて、女を突き飛ばす様にして離れ去つてしまつた。でも、女は私を濁つた眼でじつと見詰めてゐるのだつた。

其の女が歸つてしまつてから、私は奇妙な豫感に襲はれて再び元の所に戻つて見ると其處には國幣の十圓紙幣が淋しく落されてゐた。

夜になつた。でも私の心は、ポケットに納められた其の紙幣の事で奇妙な動搖を續けてゐた。

女はどう云ふ氣持で其の金を私に與へようとしたのか又どんな氣になつて、金を捨て、行つたのだらうか、そして私は其の女の許に行つて見たい様な衝動さへ感ずるのだつた。

翌日の朝早くであつた。慌てこんで來た一滿人に導かれて私達は押し潰された様な怪しげな家に無理に引つぱつて行かれた。行つて見ると家の中では何かざわめいてゐる。

上つて見ると心中であつた。然かも女は昨日私が診た女であつた。

男の手に堅く握られた拳銃は男の頭蓋を貫き、女の心臓を見事に射抜いてゐた。兩人とも既にこと切れた後であつた。夜の床に散つた肉片と血は、此の小さな窓一つない薄暗い部屋を死臭で満たしてゐる。

主人の話に依れば、男は鮮人で馴染と云ふ程の男でもないとの事、又女にも死を決行する程の何の變化も見られなかつたと云ふ事であつた。

私は胸苦しくなる感情に押へ付けられ、居堪たまらずに、其部屋を出た。あの、ものを云ふのさへ物憂さうな鈍い眼をした女が心中したと云ふ事は、私の心を狂つた様にかき立てるのだつた。でも私にはあの女の感情は判る様な氣がする。又それに増して一緒に死んでやつた男の心理の前に私は打ちのめされてしまつた。

完全に私の敗北だつた、そして此の十圓紙幣は永久に其れを證明するかも知れない。

私の様な貧弱な神経は到底、此の様な強く太い神経の前には立てないのかも知れない。

太陽は何時の間にか沈んでしまつた。そして齒車も音もなく静謐の闇に止まつてしまつた。ずっと黒い温氣を含んだ様な土地は化物の様に果てしなく私の限界に擴がつ

て、空との境界は何もない、不意に冷つこい風が足元から起つた。そして大きな蚊が一匹耳元をかすめてぶーんと飛び去る。まだ食事の用意も出来上らないのか、惨めな火がチヨロ／＼と燃へ、ぼーつと灰明い輪を造つてゐた。そして何故だか、狂はしくなる様な焦慮に私の心も何時の間にか燃へ上つてゐた。

雁の唱歌

ピリヨンさんの家は、松風山の向ふである。バラ色の屋根の二階家がさうだ。町の人々は何故ともなく「ホテル館」とよんでゐる。夕方になると二階の窓にポツンと電燈がともる。それを眺めて町の人々は「松風山のホテル館に燈がついた、夜になつたね」と言ひ、やがて夜がふけてその燈が消へれば「ホテル館の燈も消へた、もう夜も大分ふけたかね」と言つた。

松風山もホテル館もいつの間にかこの町の名所になつてゐたやうだ。松風山といつても、山ぐにで生れた私が見たら、丘の少し高い位のものだが、山らしい山のない此の町の人々は、強いて、この丘の少し高い位のものに「松風山」といふ涼しさうな名をつけたのである。

教科書を入れた風呂敷包みを、頭の上に載せて、夕暮

時この山を越し、ピリヨンさんの家へ、三日目毎に私は行つた。松風山を越す時にいつも私は故郷の雲に聳へた山々を思ひ出して、この小つぽけな山を大いに輕蔑した第一山の向ふのピリヨンさんの家が、こつちの麓から上の半分見へた程である。時にはピリヨンさんか、娘のシーモンがその二階の窓から「おオ、コンニチワ」といふそぶりをしてゐて、さういふ時私は一氣に駈けて山を越すのだが、ちつとも息切れなどはしなかつた。それ程平坦な小山だが、夕焼雲の赤い夏の夕方時には、思はず立ちどまり、目を見張つて西の空を眺めたこともあつた。「夏の夕方は、ほんとに綺麗ね」シーモンは眞紅の色が大好きだから大きくゆらめきながら平野に沈む夕陽を、手を打つて喜ぶ。

私はこれでもシーモンの日本語の先生である。シーモンの日本語は、喋べるだけなら大へんうまい。寧ろ彼女は故國の言葉の方が出来だらう。

「お前はポーランドに歸れないネ、言葉が第一下手だから」

ピリオンさんは、平常は異國にゐることを忘れたやうに悠々落着いた表情をしてゐるが、矢張り心の中では故國を憶つてゐる。葉巻の青い煙をふきながら、シーモンの肩に手をかけて、シーモンが下手な故國の言葉を喋るのを聞いて暫時さびしい顔をすることもあつた。日本に來てもう十五年になり、當時二歳だつたシーモンが十七になつたがポーランドには一度も歸らないのである。だから彼女は故國の言葉をすも知らない。故國の明眉だといふ風光は更に知らない。松風山の小松、小笹の繁つた傾斜地が、彼女の一斑楽しい風景であつたらう。

三日に一回の日本語教授は、ピリオンさんの發案で既に三年續いてゐる。(本當の先生は私ではない)私の友人野中君が、今のシーモンの流暢な日本語の先生である。野中君は、シーモンが分つても分らなくてもそんなことにはお構ひなく「日本の小説」「日本の詩歌」をいろ

は、まこと味氣ないものであつた。しかし私は努めて平然と、誇張して言へば「肩で風切る學生さん」姿で、町を歩き廻つた。

詩歌の道には暗くても、シーモンが如何に失望しても私は三日毎に、松風山を越してホテル館のドアをノックした。

「おお、先生！」

ピリオンさんはポストの口から一寸のぞいて何時も機嫌よく戸を開けた。シーモンは此の詩歌にうとい先生を玄關の芭蕉の鉢のうしろに立つて懇懇に出迎へた。

野中君の書棚から抜いてきた「瀧口入道」を私は毎回読んで聞かせる。(これが教科書であつた)これなら私は自信があつた。朗々と聲を上げて讀むに足る美しい文章、樗牛の此の小説より他に、異國人に讀んで聞かせる日本の小説はない、と私は確信した。

「やがて來む壽永の秋の哀れ、治承の春の樂は知る由も無く……」

と高い聲を上げて私は讀む。

しかしシーモンには此の文豪の名作は難解すぎたらしい。讀み手の私が次第に感動してゆくにも拘らず、彼女

いろ讀んで聞かせ、又讀ませることにした。しぜん彼女は明治大正の有名な作家、詩人、歌人は大てい知つた。そして美しい日本の言葉を澤山覺へた。

私は暑中休暇で一箇月程この町に滞在した時、野中君に頼まれてこの一箇月間シーモンの臨時の先生になつたのであつたが、私は詩歌の道に全く暗く、彼女をひどく失望させてしまつた。止むを得ぬ、當時私の環境は詩歌どころではなかつたのである。私が行つてゐた學校といふのは、既に十何年も續いてゐたが、幾ら手續きをして、正式認可されない夜學校だつた。帽子には鮮やかな二本の白線を巻いて一見華やかさうではあつたが、私がかういふ名も無い學校の卒業生として、社會の荒浪に投げ込まれる時の不安に、絶へず心寒い思ひで過ごしてゐたのだ。

だから暑中休暇の際、あと半年に迫つた卒業後の身のふり方を、私はこの町にまで探しに來てゐた。朴齒の下駄をカラコロ鳴らしながら、白線のついた帽子をかぶつた私の姿は、傍から見ればのんきな學生であつたらう。紹介狀の這入つたふところを風にふくらませ、この小さな町の銀行、會社、商店を訪ねに出て行く朝方の氣もち

は青い瞳を大きく見開いて窓の外ばかり眺めて過した。

窓さきには木蓮の花がのぞいてゐる。この木蓮の木は一丈餘もあらう。二階の窓のところが一ばん花が多かつた。香り高い此の深紫の木蓮の花は、部屋いつばいにまでその香を放つた。私は咽喉が乾けば深い呼吸をし夥しい花の香りをかいだ。するとシーモンは慌てゝこつちを向き、行儀よく手を揃へ首を傾け、いかにも聞いてゐるふりをした。私は野中君に教へられてゐる。シーモンに分つても分らなくても君はたゞ聲を上げて讀みさへすればいいのだ。自然に言葉を覺へさせるのが一番いいのだ。つめこみ主義は斷然いかん」と語學の上達について教はつた。だからシーモンの小さな丸い欠伸が時々ちら／＼目に入つても、私は少しも氣をくささず、益々快調に朗讀を續けた。

ピリオンさんは窓際でぼんやりと私たちを見ながら葉巻をふいてゐるが、時間がきて「あゝ、面白かつた」とシーモンのほつとした聲を聞いて、私が靜かに本を閉ぢる頃には、いつか軽いいびきをかいて居睡りをして居る。シーモンはかすかに笑ひ聲をあげて、そつとうしろに廻り涼しい風の這入る窓を閉めた。そんな時のシーモンは

娘ではなくて、母親のやうに優しい顔をし、すんなり伸びた白い素足は美しかった。

單調な松風山の風景でも、ピリヨンさんに故國を屢々憶ひ出させるらしい。二階の窓を開け放つて置けば、藤椅子に腰かけてゐても松風山は一望できた。その山道を私が上つてくる姿は、彼の少年の日の仲よしにそっくりだと言つた。

「目を閉ぢさへすれば緑にもえたポーランドの山々がすぐ浮かびます。耳を澄ませばもう森のざわめきまでが聞へてきます。私はこんな不自由だらけのメガネなんかかけてゐなくても、山の姿はハッキリ見へる……」

ピリヨンさんはメガネを外しながら又言ふ。

「暫時は目の中が明るく澄む……目の中の山はいつも晴れてゐるからね」

それから私はアルバムを見せて貰ふ。青年の日のピリヨンさんがどの頁にもゐる。清涼な山岳の寫眞も一頁一頁貼つてあつた。ふと私はシーモンによく似た女を見いがし「だれ？」と指で押へると、「母さんよ、私の知らない人」とシーモンは言つた。アルバムの終りになると、今度はシーモンの寫眞が一ぱい出てくる。野中君が大學

の菱形帽をかぶつたのも一、二枚あり、横に「私の先生いゝ先生」と日本語で書いてあつた。

「先生の寫眞も欲しいわ……さう、今度の日曜日に撮さして」

シーモンは急にキラ／＼目を輝かす。

「先生の帽子、何故白いテープを巻いてるの……それは野中先生の帽子よりも感じがいゝです」と大人びた言葉をつけ加へたりした。

私はかういふ話をしてゐる時の方が楽しかつた。「瀧口入道」を讀んでゐる間は、ピリヨンさんは所在なく居睡りするし、シーモンは窓の方ばかり見てゐるし、私だけが聲はり上げてゐるのはなんと間の抜けた風景だつたらう。冷いつゞグ水を飲みながら、私はシーモンにわざと聞いてみた。

「瀧口入道は名文でせう？」

しかしシーモンは答へる代りに

「暑い、暑い、なんと今晩は暑いのでせう。やはり窓は開けた方がいゝです」

と先刻閉めた窓を開けに行くのだつた。

木蓮の花はむせるほどに又流れこんだ。火蟲がすぐに

電燈の周圍に飛んでくる。私はその涼しい窓下へ行き、ふとオルガンの蓋をとる。

「素適！ 私の先生は音楽がお好きよ」

シーモンはビタリと寄り添ふやうに身近く迄来て叫んだ。さて私は困つた。又してもシーモンを失望させるだらう。私が知つてゐるのは學校の野蠻な應援歌位のものだ。

「先生！ 何か弾いて聞かせて」

シーモンの金色の髪が私の胸のところを頻りに揺れ、私は二重の當惑にもう顔ほてらした。しかしなんとかこの場を胡魔化して、私の無趣味を知られまいとした。

私が弾いたのは小學校の時に習つた「雁」の唄。初めの二、三度はうまい具合にひけなかつたが、それでもシーモンは謹聴した。

固く目を閉ぢて聞いてゐる顔は「瀧口入道」の時間とは全然違つた眞面目さに一杯だつた。

やつと一つ弾き終ると、ピリヨンさんが手をたゝいて賞めた。

「それはなつかしい唄です。私が日本に來た時に一番初め耳にしたのはその唄でした」

ピリヨンさんがこの町に來た頃は、まだ松風山は木の

ない坊主山だつた。その頃は毎日この小山に立つて「事業」の計畫に考へふけつた。麓に行く小學生たちは、一人一帽子をとつてこの日の青い異人に禮をして行つた。

「やさしい日本の子供たち！ 日本の子供たちは、そのガンガンサオニナレ、カギニナレ、オムカヘタノムトユテオクレ、を唄つてくれました、私はさびしかつた毎日を大へん慰められました。おオ、優しかつた日本の子供たちはどうしたでせう……」

その晩は、西洋紙二枚に「雁」の唄を筆で書いた。それからもう一枚に空を一系列の雁が飛んでゐる繪を描いた。横で見えてゐたシーモンが

「足らないものがあるわ」

と言つて私から筆をもぎ取り、丸いものを描き添へた。

「これ日本のお月さまよ！」

それは下手くそなお月様だつたが、私はひどくうれしかつた。ピリヨンさんは大きな聲で

「そんな凸凹のお月さんはない」

と言つて目から涙を出すほど笑つた。

私は「凸凹の月」の繪を丁寧にたゝんでふところに入れた。

紅葉

松原 一枝

彼が一番世の中を得意に思つたのは小學校の頃であつた。その頃は身體も丈夫であつたし丈も高かつた彼は、皆の一番後に立つて縦に並ぶ時には自分獨りに號令を掛けて呉れてゐる様に思はれ、事實卒業式の折「恩賜の祝」を貰ふために「井手康雄」と書記が少し東北辯に躰らせで呼ぶと、一番後から皆が「一體さういふ子はどんな子だらう」といふ風に眼で捜し求める中をガタリと立つて行く光景などは何度思ひ出してもし一番の英雄的な存在であつたと考へられるのであつた。

中學校の時何か運動をしようと試みてバスケットボールを志した事があつた。併し彼のスタイルは遺憾乍ら餘りボールに對して聞き過ぎると云はれ、數學の時間には努めて自己の存在を無視しようと心得てゐる生徒の一人

迄がその體操の時には一層大きく笑ひ「井手式」と云ひ肩にボールを擔ぐ様な恰好で網に向ふのであつた。

次に庭球をしようと思ひ、廣いラインの上を無難作に走つてゐる同級生を見ると、何となくこれこそ自分に適してゐる運動だと思ひ、早速人の歸つた放課後ラケットを握つてみたのであつた。ボールは滅多の事でポイントと音を立て、呉れなかつたけれど、氣持よく球拾ひが出来、白い運動靴でパツパツと廣くないネット迄の距離を鷹揚に走つて高い空を目指してラケットを振ると、ガンとボールは鈍い音は出すけれど、もう四、五日もするとわけなく選手になれる様な氣がして來るのであつた。併し彼が得意に成りさうであつたにも拘らず同級生は、「井手が運動を始めたとやて」と物珍らしげに轟き合ひ

未だ自分に充分上達する見込みがないと諦めをつけぬ先きに彼の庭球のスタイルは固質したものととして、同級生間に眞似られて了ふのであつた。

彼自身は別段にスポーツそのものに對する自信は失はなかつたが、同級生は彼自身のスポーツ神經に對して何等の期待も持つてゐないのであつた。だから彼がスポーツを全然爲さなくなつた事は周囲がさうさせた事情であると思ひ込んでゐるといふ方が適切であるかも知れない。

併し彼は常に優越的であつた。運動會等で役員に成り胸に白い菊の花をつけて、白いパンツでテキパキと物事を處置し、「君濟まないけれど人員過剰で次の二人三脚は遠慮してくれないか。その方が又B團の優勝の上から云つて得策だし」等と會釋もなしに彼を無視し、又歸校の途中で女學生達が「あら、あれが走幅飛びの××さんよ」と私語き合はれてゐる同級生の華やかさも一旦彼が少し頭を曲げて意見を申し立てると、矢張り組で成績の一、二を争ふ地位にゐる彼は最後の押しを効かせる事が出来たのであつた。だから彼は彼等を輕蔑こそすれ羨望しやう等とは夢にも思はない事であつた。

それがどうであらう。彼は四年の若手の秀才許り集めると云はれる△高校を志願し誰も彼もが期待したに拘らず失敗し續いて五年の折にも又失敗を繰り返したのであつた。成績に絶對の自信を置いた彼には、ねても覺めても死ぬ程に悔しく、知人を頼りに調べて貰うと「肺門淋巴腺」だといふ事であつた。彼は始めて自分の身體に愕然とし、又自分自身にはさしての苦痛も見せない位の病で、秀才を落して了ふ社會に少し許り非難したくなるのであつた。

高等學校に入ると皆は強いて蠻勇を振ひ、十一時頃の夜の街を高い下駄の齒の一方を缺き、足を組んで一升瓶をあふるのであつた。その時には郊外の自分の家に歸る途中で友達に組まれた肩の邊りが少しツキ／＼とし、兩手で肩を揉み乍ら／＼と玄關を勇しく開けて入るのであつた。大抵ねずに歸りを待つてゐる母はその音に飛び出し

「おまへの身體は並の人と違ふのだから健康な人と同じ様に振るまふ事はならぬ」

と非度く叱責するのであつた。彼は別段に人に劣つて身體が虚弱であるとは思へないのであつたけれど、唯何

をしても朗らかに大聲を出したあと皆の顔が充分に樂し相に見えるのに反して、自分だけがまだ／＼彼等と同じ程度の樂しさを味つてゐないのだと言ふ事を漠然と感じ何時かは自分も心から嬉しい時を過す事があるだらうかと考へ出すと、同じ様に杯を揚げてゐても飲む酒が白々と冷めたく、淋しい興さめが晴める折をもつのであつた。

大學になつた頃は全然自分でも自分の身體に自信がもてなくなつて來てゐた。講義のあいだ折など、友人達と二、三十分電車で走つて砂の海岸に出ると不意に當つた潮風は冷めたく必らず翌日からは家の者が心配する様に妙な咳拂ひをするのであつた。

彼は長男であり弟とは四つ違ひの二人の兄弟であつた弟は彼に反して小さい時から學校の成績は悪かつたし、又性質も何處か大膽不敵な處があつて、不良性を帯びてゐた爲め此が彼の母の苦勞であつた。併し長男がかうして大學迄入つて呉れてゐるといふ事は自慢の種であつた故、さして弟の事を心配する事もなかつたのである。彼も唯一人の弟が自分の様に勉強しようと努めるでもなく又見貴を羨むでもなく毎日受験で如何なる無神經な子供

のか」

「やあ見貴なあ、弟の俺に負けて悔しいものだけん、えらさうに云ひよると」

彼が非難してゐると思はれる點は一顧の價値もみい出さぬ如くに、不器用な見貴だと哀れむ様な顔つきを満足さうに云ふのであつた。

暑さ厳しい九州の夏が來た。大學は休暇に近かつたけれど、實驗科目だけは此の暇な時を利用してどし／＼缺科の時間の補充迄して行はれる爲めに、卒業期の學生は外の學生の様に遊ぶ譯にも行かず、特に朝の八時から毎日の様に見學に出掛ける事は彼の様に朝氣持よく起きて雨戸をくり、朝の露を含んだ夏の太陽を充分に吸つた經驗をもちたいと焦り乍らも、持ち得た経験のない者に取つて、昨夜の見た様な見えない様な重い夢の記憶で頭が濕つてゐる床の中で、汗の出る歩行の見學を思ふ事は、この腹立しさの爲に學校を止めて了はうかと感覺の神經だけが、烈しく怒るのであつた。さうと以前から、彼はも早ノートを取らなくなつて來てゐた。面倒な計算を教授が黑板に書くと腹が立ち、一體外の者は聞いて分るので

でも時間を作らうと焦る頃ほひでも、寒い海岸で蟹を釣り家の者が歸りの遅いのに心配して海の事であるから萬一を思つて探索願ひを出さうかと云ふ相談半ばに元氣よく歸り、濡れた水著の證據を皆にみられ乍らも

「俺らあ學校で劍道の練習をしとつたんや。嘘と思ふんなら明日學校で聞いてみる」

と自信たつぷりに太々しく云ひ、腹が空いたと茶碗に五六杯もかき込むのを見ると、一體如何なる心理なのであらうかと見當もつき兼ねる様に眞面目になつて考へ込んでみたりした。

弟もそれでもどうやら家の者の運動の甲斐があつて、本人はさしての苦勞もせず土地の高工に入學し、ラグビーの選手だと云ひ毎日、日が暮れないと、朝二、三冊をバンドで縛つたノートを抱へて歸らなかつた。丈も彼よりは一寸五分も高くなつて了つたし、遊び事にかけては彼に劣る事はなかつた。玉は中學校の頃からやつてゐたらしく、高工に入學しやつと中學校の殻を脱いだ翌日には、家の中で學校の製圖の一枚も書かうとする彼を引つ張り出し、五十突いて小さな彼を怒らせたのであつた。

「一體おまへは中學の頃からかういふ處に出入してゐた

あらうかと周囲を見廻すが、二十人位しかゐないクラスの大部分は皆輝かしい學究的な瞳を光らせ、或る者は頭をかしげて鉛筆で計算を寫し理解しようとするのであつた。

彼はそれを見ると一層に氣がたち、靜かに落ちついて考へやうと存むのであつた。一、二分の後彼にもそれが容易なものである事が知れ自分の頭に自信を失はないのであつたけれど、唯何と云つても此の平穩な教室で二時間の長い講義を平調な筒の様な教授の聲に超然とノートを取つてゐて、何の痼癪も起さない友達は羨望以上に不思議に思へるのであつた。

そして時には自分だけ、怒つた風に立ち上りノートをビリ／＼と大きな音で破り矢庭に窓から校庭に飛び下りて皆を驚嘆させてみたいといふ變な思想を、始終かうした時には持つのが癖になつた。もつとも氣の弱い彼には實行出來ずに胸の中に、さうしたなら、などといふ人の意表に對する小さな喜びがある許りであつたけれど、併しそれが彼の胸の中だけに育れてゐる實行不能の事柄であるだけに段々とその空想は誇大化され、もし誰か知つたらあの眞面目な秀才がと一通りでなく驚くであらうと

想像する事は又この空想を助ける事にもなつてゐたのである。

彼は知らなかつたけれど、もうクラスでは彼を變人扱ひにしてゐたし、誰も昔の様に典型的な模範生徒であると思つてゐるものはなかつた。唯秀才ではあるけれど、あの身體でよく人並みに受験をして行ける事であると云ひ、ブランクの多い彼のノートの秘密は、皆に知れてゐる唯同情だけが彼の氣附かない背中からひそかにむけられてゐたのである。

彼は遂に暑さの見學旅行が祟り、阿蘇の山の火山灰で風邪を引いたのである、と妙な事を云ひ宿屋から動けなくなつて了つたのであつた。唯呼吸するのが困難で、他眼でみる程の事は絶対にないのであると彼が強力主張するにも拘らず、皆彼を心から痛々しげに迎へ、停車場迄出て来た彼の母は、彼が立つて歩いて来たのを飛んでもない事だといふ風に思ひ、その儘病院に入れると云ふのであつた。

彼は白いシャツの上で青い呼吸をしてゐた。あの建物のまへを毎日通學して行つた事を瞬間に思ひ浮べ、自分がある時に考へた様に四角な病人の世界で窓を見上げる

健康な人達の同情的な瞳を受けるだらう事は堪らないと思ふのであつた。否まだ、自分はあれ程迄の情けを人から受け様とは何といふ侮辱であらうと考へてゐたのであつた。

夏が臥てゐる間に過ぎ暖い雨の日ざしが斜に蒲團に影を落して、毎日みてゐる空は地平線上に近づくにつれて何故に薄いのであらうかといふ疑問を起させる様にはなつたけれど、靜かに入つた庭の秋の氣配は長い時を思はせ、さうしてその「時」が或はねつくまへ迄考へ様とも思へなかつた病人としての一種の諦めが、彼も氣附かぬ中に落ちついた精神の分析をさせ、ねてゐて見える煙ぶる山肌に冷々としたなつかしさを懐ひ、何か自然が大きく暖く、自分のねてゐる人生が小さく、又その人生に於ける學生の生活等は、罌粟粒に吹き飛ばして價値のないものに思へて來るのであつた。

さう思へる時には身體もさはやかに延びた様な氣がし自分が病氣であるといふ意識に對して何の恐怖感も抱けないのであつた。

「もう癒つて了つたぞ」

彼は朗らかに向ひの山に大きく山彦したい胸の躍動を感じ、あと一週間もたてば皆と同じ様にあの橋を渡り白い病院の建物を見上げて通學し芝生で談笑出來ると信じてゐたのであつた。彼は文學などは最も輕蔑して來、さうしてみたいのではあつたけれど、この折は何故か自分のかうした喜び、さうした病を得て知らなかつた自然に調和し飽和する人生の發見に對する共鳴が、人に云つても分るまい。併し文學の中に書いてあるのではないかといふ氣がして來たのである。彼は起き上ると本箱を探し貪る様に文學といふものに觸れたいと願ふのであつた。併し彼の本箱に何の文學雜誌の一冊もあらう筈もなく、弟はよく彼が叱るにも拘らず中學時代から小説にも讀み耽つてゐた事を思ひ出し、隣の部屋を覗いてみようと思つてみたのである。彼は長い間ねてゐる弟の部屋をみた事はなかつたのであつた。足を踏み入れて一番はじめに眼についたのは、何度の試合にも黄色な埃りをあげて破れたであらう古いスパイクが整然と磨かれて本箱の上に置かれてゐるのであつた。本箱の上は埃りで白かつたので

はあつたがスパイクの尖つた鋼が、一瞬威壓する様にチカチカと彼の瞳を射るのであつた。それと同時に汚れた

ユニホームの姿で磊落に笑つてゐるその當時のであらう弟の寫眞が、元氣に立ち上つて來た彼を慘めにも突き落して了つた。いま、でに感じた事のない「駄目だ」といふ意識が強く雷の様に蔓延り、唯呆然と本をみる事も忘れて、この部屋の中から弟の健康の秘密を嗅ぎたいと鼻を鳴らし何らかの匂ひを見極める様に四邊を見廻して坐つて了つたのである。

その晩であつた。

夜半に不圖目覺めた彼は下の茶の間で母が弟を叱つてゐる聲を耳にしたのである。弟は何か頻りに抗辯してゐる様であつたがそれをおひかぶせる様に先の鋭い母の聲が、寒々と夜更けの天井を傳つて二階にのぼるのであつた。

「毎日々々何處を此の時間迄歩いてゐたん？この頃は兄さんの病氣とお前の事で、かうしてねむれずにいる苦勞が分らぬぢやらうか。父さんが死んでも子供だけは出來もいゝし、大學にも入つてくれて、私も鼻が高く人から後指もさゝれず、又おまへだつて——」

「ふゝん。どうせ俺なあ次男坊ぢやあけん、何處へ如何ならうと心配は掛けやせん。兄貴さへ母さんの氣に入つ

ていりやあいゝさ」

「馬鹿、未だお前には分らないのか、康雄がどれだけ頭がいゝと云つても、今の儘ちやあ何も期待する事は出来ないけん、おまへにしつかりして貰はうといふんぢやないか、もう母さんもあれには諦めとる。唯身體の丈夫なお前だけすがりなのだよ、少々の學校の出來、不出來は文句は云はない。こんな夜更しすりやあ第一折角の身體に悪いと心配しとるんぢやあ」

諦めとる——あれには——

天井の木目を凝視して仰向けた彼に此の言葉がすきん／＼と頭の中に浸み返つたのであつた。全くこれは思ひ掛けのない致命傷だわいとこの言葉を頭の中に繰り返してゐる中に、靜かに悟り、始めて周章てる心構へが胸の中で小波の様に騒めいて來たのであつた。

あの様に自分に期待をかけて呉れてゐた母、身體は少少虚弱ではあつたけれど、頭がいゝからと何時も親族近隣の者に自分を自慢したがつてゐた母。此の子獨りゐるが爲に誰からの世話も受け様とは思はないと大きな抱負で見得を切つてゐた母。

さうして、唯暴れる事にしか能のなかつた、誰からも

信が——

それは遠い昔の様に思へるのであつた。阿蘇の山を擔がれて下る時、銀色に光つた牧場の光景が、暗い此の八疊の闇の中に浮び、それ以來人の情けを忘れてゐたと感ずるのであつた。あの時から寢就いて了つてゐる彼にはこれが自分の最後に生々しく觸れ得た自然であるかの如く思はれ、今更に明瞭に記憶を再生させ様とするのであつた。すると彼には今朝見えた山の紫が阿蘇の記憶と交錯し、コト／＼と擔荷に揺られて通つた山に、秋ともなつた今では、紅葉が一面に、それこそ空に迄擴がつてゐるだらうと想像したのである。

何故か彼には、その山が眞ツ赤である事が本當である和不圖その時思へて來たのである。赤い。それは朱の様に赤い。否朱の様に重味もない、それは濃い凝つた紅葉の色であつてもいけなく、若い緑に染みかけた紅葉の色であつてもいけなかつた。赤といふ色に一筋の他の色の交りも許されない透る様な鮮血を思はせる、秋の淡青色の空に木の葉の靜脈を翳す、唯「赤」そのものゝ純粹さをもつ紅葉の山であるべきだと思ふのであつた。

下の話しが濟んで二階に上つて來た弟は、ねてゐる兄

此の上ない將來を危まれてゐた弟、併し彼はそれが今では逆轉してゐる事を知らねばならなかつた。頭がいゝだけで常に優越的な地位を保つてゐると信じてゐた彼は、彼自身が自己の肉體に失望してゐないまへに、もう母迄が彼の肉體と同時に全てを諦めてゐるのである。彼が憐み哀しむしか感じなかつた弟は、思ひ掛けずも彼を踏み飛び越えてその意慾の逞しさに期待がかけられてゐたのである。

おゝ。頭がいゝとか悪いとか、それが一個の價值もなく今眼のまへに横たはつてゐるではないか、誰もそんなものに眼をかけてくれるものはゐないのだ。永い苦しい後家の生活を通して來た母は、秀才の死を惜しむよりも今後の生活の保證をもつ弟の健康な身體を失ふ事に對する恐怖で懸命なのである。最後になつて、どさりと健康に背負ひ投げを喰はされた型である。と彼は何もかもが一切自滅するのを信ずるのであつた。もう彼は自分が再び朝に成つて床の上に起き上られ様とは思へなくなつた今朝迄必らず癒ると感じたあのすが／＼しさは一體何であつたらう。

永遠に來まい。あゝいふ生に對するほこり得る様な自

の状態を氣づかひ、自分の部屋に入りかけて、隣りの襖を開けてみたのである。

彼は空想の中に突然に没入して來た人間が弟である事を知り、思はず頭から蒲團を引きかぶつた。カチリとスキツチを捻る音がして弟が傍にすわるのを意識し、蒲團の上から、ヒンヒンと今迄に感じた事のない健康な肉體のもつ弟の壓迫に堪へられなかつた。彼は眼を上げて明るい電燈のもとで弟をみる勇氣がもてなく一刻も早くこの息苦しさから逃れるべく、弟が去つてくれ、ばいゝと願ふのであつた。

何も知らない弟は、ねてゐると見た兄の、案外に呼吸が烈しく、驚いて下の母を呼びかけるのであつた。

「何に、康雄が、どうしたんや？」

と寝巻に蹴つまづき乍ら上つた母は、白いシツを染めた喀血に呆然として兄の蒲團の襟に手をかけてゐる弟を引きのけて、彼の唇に手を當てたのである。

青い脈をうたせた彼の頬は意識なく白かつたけれど、彼が空想の山にみた紅葉の様な淺薄な赤さが、幅のない擴がりだけをみせて散つてゐたのであつた。

亂 菊

三 宅 豊 子

眞吉はよねより四つ年下の夫だつた。三十二のよねにはだから、眞吉のする事や考えやが、どうかするとひどく子供っぽく思はれてならぬ。だがそれをよねが云ふと眞吉は決つてうるさがつて機嫌が悪い。お前などに何が解るか、露骨にさういふ態度を見せる。お前のやうな無教育な奴に、よねにはそれがさう響く。するとよねは、つき飛ばされたやうに寂しくなり、然しそれは忽ち悲しい憤りとなつてよねの心を激しく荒だたせるのであつた。

「どうせ妾なんかには解らないでせうよ」

捨ぜりふのやうによねはつぶやき、それから夫婦は険悪な表情で、きまづい沈黙の時を過すのである。それがよねには骨に沁む程寂しいのだけれど、詫まることの出

来ぬよねは反對に、何だかだと、ちよくちよく厭がらせを云つてみる。苦がい顔をして、一切取合はず本を見てゐる眞吉だが、終ひに腹をたて、馬鹿つ、と、怒鳴つて本を投り出すと、そのままいとお出て行つてしまふ。それはもう何時もの事だつた。今夜もさうして眞吉が出て行つてしまつた後、くさくさとやり場のない心のよねは老酒をつけて獨りチビチビやり初めた。何も老酒が好きなのではないが、この方が日本酒よりもすつと經濟的だからだ。長年の習慣で今は半日たりとも酒の氣なしには過せないよねであつた。

小さい時に父親に死なれたよねは、一家の爲、小學校もまだ終えない中に博多の藝者屋に賣られ、十四の時からお酌に出た、十七で一本になるとすぐ旦那がついたが

よねは今でもあの時の悲しさを忘れる事が出来ぬ。泣いて嫌がるよねを皆して、欺すやうに座敷に押し込めて行つた。よねは観念したけれど、男といふものは唯嫌らしく怖ろしくそれでも知らぬ間に馴れて二年経つた時旦那が死に、よねは二度目の勤めに出ることになり、二十歳の春に大連へ仕替えた。熊本のあるよねの家で、よねの弟や妹達が、それぞれに中學校や女學校へ通はねばならぬからだつた。小米といふ名で美濃町から出たが、顔がきれいだつたし、藝も達者なところから、大検でも指折の賣れつ奴となつて、二十二の時、野口といふ旦那から五年目の秋だつた。野口は好い旦那だつたし、何一つ不足があるのではなかつたが、若いけれど眞吉はしつかりした人物に思はれたし、それに何よりも堅氣な細君になりたいよねの希ひであつた。野口は最初激しく憤つたが、一通り怒つてしまふと、後は氣前よくあつさり別れてくれた。よねはその時は、つくづく野口に濟まぬと思つた。だが、この方が母親を安心させる道でもあり、又自分の將來の爲でもある。と、よねは信じてゐた。眞吉は机と本箱の他は何一つ持つてゐず、箆筒も、長火鉢も

鍋、釜、瀬戸物の類まで皆よねが運んで行つた。初めて世帯らしい世帯を持つうれしさに、よねは若い花嫁のやうにいそいととした。野口は五十を過ぎてゐたので、よねが派手な服装をすることを嫌ひ、だからよねは赤い手柄をかけた事もなかつた。若い眞吉との新世帯に、よねは初めて赤い手柄をかけ、眞吉に寄り添うて課長の家に挨拶に行つた。眞吉が遊んだ借金が小千圓程ありはしたが、それも追々返して行く自信があつたし、よねは、自分の選んだ道に間違ひはないと信じてゐた。それだのによねは手酌でチビリチビリやり乍ら、怒つて出て行つた現在の眞吉の上に思ひ及ぶと齒ぎしりを噛みたいやうな口惜しさ悲しさやる潮なさに胸の中が湧き返り、誰れかにこの鬱憤を吐き出さずには居れなかつた。

丘の麓にぼつんと二軒建つてゐるこの代用社宅は、ロシヤ時代の古い建物をそのままに使つてゐた。丸味を持つた天井は兩端が低く傾斜し、部屋に合はせて敷かれた畳は、だから普通より大きかつたり小さかつたりした。二軒共同の風呂場を挟んで、隣り同志、内部から往來が出来るやうになつてゐた。よねは風呂場傳ひに隣りへ行くし、主人が出張で赤ちやんと二人きり、寂しく留守

居してゐる奥さんを無理やり引張つてきた。よねは奥さんが好きだつた。他の人のやうに決してよねを輕蔑したりしない奥さん、どんなこともうるさがらずに親身にきいてくれる奥さんだからだ。

「お茶代りよ、いいでしょ一つ」

よねは、老酒をなみなみとついだコップを奥さんの前に据え

「あ、奥さんは甘い方がいゝかしら？」

と角砂糖をつまんで一つ落とすと、ねえ聞いて下さいよと、胸の中にもやもやと鬱積してゐるものを、一時にとつと吐露しはじめるのであつた。

「そりや妾は教育もないし年も多いけれど、はじめからそれは承知のこと、何も妾が貰つてくれと頼んだんぢやあるまいし。」

「さうなんですよ奥さん、最初はあのの方が夢中でさうんさうさう、おれはたしか忘年会の時だつたかねえ、妾がすつかり酔つぱらつちやつて廊下で休んでたら、よねちゃん、て後から肩をたゝかれてさ、誰れかと思つて振り向いたらそれが浅井なのよ」

よねの言葉は何時の間にか追懐的になり、鬱積した感

ろだと云ひ張り、眞吉は眞吉で、馬鹿つお前は色盲なのだと癩癩を起した。色盲と云はれたことがカンカンよねを怒らせた。怒ると聲もかすれて出なくなるよねであつた。

きさまはヒステリーだ。誰れがヒステリーにしたんです？さうして日の暮れる頃には別れ話にまでなつて行つた。喧嘩の原因はいつも單純であつたけれど、その根はもつと深く内にはびこつてゐるものやうであつた。

翌朝、眞吉がもの云はず出勤してしまつた後、よねは朝つばらから憂さばらしの自棄酒をやり乍らまるで世の中の外側へほうり出されたやうに寂しいのであつた。考へれば考へる程口惜しい。あんなに騒いで一緒になつて置き乍ら、今になつて年の多いことが不服さうな、教育のないのが氣に入らぬやうな。

それは年は多いけれど、よねとしてはずいぶん一生懸命つとめてきた心算なのだ。苦しい世帯だつたがどうやら切り抜け、借金だつてもう半分以上も返してきた。それを何かにつけて自分の無教育をうとむやうな、いえいえそれは眞吉だけではなく、自分が働いて學校に通はせた弟妹達までが、何かと云へばよねの無智を輕蔑する風

情を吐き出したせいとか、次第に酔ひも廻つてき

「戀のローマンス多々有、少しきかせませうかあ」

と、よねはひどくうきうきとはづみ出し、眞吉とのそもその馴れそめからを、とめどもなく話し出すのであつた。

「妾も昔はこれできれいだつたのよ、丸越で美人投票があつた時一等になつてね、その頃はもつと頬つぺただつてふつくらしてたし、かうお扇子を半開きにして唇にあて、首をかしげてにつと笑つてる寫真なんだけど、あの頃の妾を浅井が何といふか、見せてやりたいねえ」

すつかり酔ひの廻つたよねは、皺んでゐた眉も冴え冴えと聞き、睫毛の茂つた眼をとろりと仇に据えて、遅くなるからと歸りかける奥さんを尙もしつこく引き止めるのであつた。

毎日のやうに二人は争ひをくり返した。或日も、それは丁度日曜日であつたが、庭先で草花の手入れをしてゐる中に、ダリヤの花のいろの事から喧嘩になつた。よねがその色をぼたんいろだといふのを、いや異ふ、それは海老茶だよと眞吉が訂正した。よねほど迄もぼたんいろ

なのが心外でならぬ。教育のないのが妾の罪だらうか、好き好んで藝者になつたわけではない。父親が死んだから、自分が一家の犠牲になつて身賣りされたのだ。藝者稼業はしてゐたけど、何一つ曲つた事をしてきたでなし且那こそ持つたけれど、男ざらひと云はれた程浮いた噂も立てずきたのを、義理のある且那に背いて眞吉と一しよになつたのは、何も眞吉に惚れてゐたばかりぢやあない、堅氣の奥さんになりたかつたからなのだ、それが間違つてゐたのだらうか、あのまま野口の世話になつてお金でも貯めた方が好かつたのだらうか、腹の大きい好い且那だつた、と、野口の好い處ばかり思ひ出され、その且那迄捨てさせて置き乍ら、と、よねは身體中がきりきりとする程口惜しく手まで震え、思はず酒をこぼすのであつた。

隣りの主人は出張勝であつたので、よねは大抵毎日のやうにお隣りへ遊びに行き、眞吉も留守の折などには夕飯までよばれて、遅くまで夜を更かすこともあつた。たまによねが行かずにゐる時には、奥さんの方から赤ちやんを抱いて遊びにきた。そんな時のよねは、大抵二日酔

ひの蒼い顔をしてまだ床の中にあるか、獨り憂鬱な顔付きで憂さばらしの盃をなめてゐるのだが、そんな時奥さんの顔を見るとよねは救はれたやうに起き出して、奥さんを相手に改めて酒をはじめるのであつた。

奥さんに歸られてしまふことがよねは何より寂しく、それゆゑ、夕方になれば早目に臺所に立つてコツコツと野菜などきざみ、ね、奥さん、いまかやく御飯しかけたのよ、いいでしょ、せつかくだから喰べてつて頂戴ね、と、絶るやうに引き止めるのであつた。麻雀も花札も、そんな勝負事の一切嫌ひな奥さんゆゑよねはどんな話をしたらいいのか解らなく、三味線を持ち出してみたり、占ひをして上げるとトランプなど並べ

「あら、可笑しいわ奥さん、近い中に奥さんとこへ若い男が訪ねてくる、といふ卦なんだけど——」

と、ひとり興がたりするのだつた。

奥さんはよねが何時行つても綺麗に身じまひし、大抵の時は針仕事をしてゐた。眞吉は何かと云へばさういふ奥さんを讃め、髪形の好いとか、女らしいとか云ひ、よねはその度に腹を立てるのであつたが、よねだつて何もさうでないと思つてゐるのではなかつた。せて浴衣

位は自分で縫ひたいとは思つても、三味はひけても針の

道は皆目解らないよねなのだ。或時よねが、それとなくその歎きを洩らすと、奥さんは、覚えればわけはないのだから御一しよにしてみませんか、とよねを誘うた。でも、奥さんに覚えられるか知ら？、え、覚えられますとも、勵まされてよねはその氣になつた。それから毎日よねは針仕事を持つてお隣りへ行つた。奥さんの説明がどうしてもよねにはのみこめなく、それゆゑ、篋づけは全部奥さんがして呉れ、よねは唯、針を打つて貰つた個處を縫ふだけであつた。たやすい事のやうに思はれるのに、それがなかなか思ふやうでない。引きつゝたり、たるんだり、自分乍ら羞づかしいやうに曲りくねつたり。

「あらあらこんなになつちやつて」

よねがてれ臭く云つて笑ふのを

「ちぎ上手になりますわ、誰だつてはじめの中はさうなんですのよ」

奥さんは、よねを失望させないやうに慰め乍ら、ほらね、かうするとよくなるでせう？

ときれいに直してくれるのであつた。然し三十を過ぎても頭も鈍り、手も固くなつてゐるよねには何もかも思ふ

やうに行かず、きちんと坐つてゐることさへ辛氣くさく奥さんごめんさい、どうも油をささないね、そんな

事を云ひ、針仕事と一しよに、コツプになみなみと酒を入れて持つてきたりするやうになつた。さうしてしばらくする中、よねの方からは來なくなり、奥さんの方からお仕事を持つてよねの處へ來るやうになつてしまつたがよねは一時間も針を持てば、もう根がつき、ああ駄目々々、奥さんお願ひしますわ、その方が奥さんだつて却つてめんど臭くないでせう、と仕事は奥さんに任せ切つてよねは酒の仕度を始めるのだつた。

「大體、妾をなごらしくもなく、酒を呑むのがあの人には氣に入らんのでせうけど、だつて奥さん酒でも呑まんことに、どうしてこの憂世が過せますか、察して下さよ」

よねは幾分氣がひけるやうに、形の佳い眉を擧めてそんな云ひ譚を云ひ乍らも、だんだんいい氣持に酔つてくると、三味線など持ち出し、終ひには、酒の肴の淺草海苔を、髭のやうにちぎつて鼻下に張りつけ、眞吉の帽子を頭にのせ、手には二尺指をステツキのやうに振り廻し、着物の袖を肩でたくし上げ乍ら、

「ねえ諸君、さうぢないか、酒なくて、なんの己れが櫻かなだ。ああ甘露々々」

そんな事を口走りフラフラと部屋の中を歩き廻るのだつた。さすが長年花柳界で仕上げてきたよねのものごしは、そんな醉態さへも醜くはなく、どこか仇つぽつさが匂ふやうであつた。だがさうしてふらついてゐるよねの醉眼に、よねの縫ひかけの着物を手にして、笑ふことも出來ず所在なげに眺めてゐる奥さんのつつましい姿が映ると、よねははじかれたやうに帽子も物指もかなぐり捨て、鼻の下に淺草海苔の髭をくつつけたまま、びつたり奥さんの前に両手をついてかしくまつてしまつた。

「奥さん、怒らないで下さいね、妾やこんなやくざな女であいそも盡きるでせうけれど、奥さんだけが頼りなんですよ、どうか怒らないで下さいね」

うつむいて云ふよねの兩眼から、おびただしい涙が、瘦せて骨ばつた手の甲に滴り落ちた。

裁縫を覚えやうと思つたよねの決心も、さうしていつの間にかずるするに崩れ、この頃では奥さんの言葉に甘え、仕立物はみんなお隣りへ持つて行き、お願ひします

わ奥さん、と、よねは、濃い睫毛にはにかむだ鬚りをただよはせ乍ら頼んでしまふのであつた。

「お隣りだつて赤ちやんがゐるんだし、忙しいんだけ、少しは遠慮しろよ」

その度眞吉は氣兼ねらしく、御禮の意味ではないんですけれど、そんなことを云ひ乍ら、時には新譜のレコードなど買つて奥さんに持つて行つたりした。

よねはこの頃、つくづく子供が欲しいと思ふ。子供でもあつたら自分達の間も、こんなに寂しく險悪にならないで済むのではないかと思ひ、又例へ眞吉の心は冷めたくなつても、頼る子供でもあればどんなにゆく末が心強いであらう、と思へばもう矢も楯もなく、白い胸もとをただけ、むつちりした乳房を赤ちやんにふくませたりしてゐる隣りの若い奥さんを見る時など、よねは妬ましましに胸がやけた。

或時よねは十日餘りも月のものが遅れ、さう思ふと胸のせい胸も悪く、よねはてつきりさうだと思ふのであつたが、眞吉は、お前に子供が出来たら首をやるよ、とてんで相手になつてもくれなかつた。それから四五日して來るものは來たが、それでもよねは疑はなかつた。よ

ねはそれを流産だと信じた。よねはくり返しくり返しその事を眞吉に説くのであつたが、眞吉はうるさがつて返事もしなかつた。それがよねには何とも口惜しい事だ。

よねは夕飯の後も尚しつこくその話をつづけるのであつた。丁度其處へ、お邪魔ちやございませぬ？、と、赤ちやんを抱いた奥さんが遊びにきた。いきり立つてゐたよねは、それをぶちまける相手を得たうれしさにいそいそとなり、事の次第を改めて初めから熱心に話し出すのであつた。

「ねえ奥さん、商賣をした女だからつて、子供が出来んと決つたわけぢやなし、たしかにさうに違ひないんですね」

よねは、そつぽを向いた眞吉の苦がい顔付きにも、まるで氣がつかないのだつた。

「さうですわ、それはきつと流産だつたのですね、惜しいことでしたのね」

慰めるやうに奥さんは云ひ、それから眞吉の苦がい、佝びしげな表情をいたはるやうに、それとなく話題を變えやうとするのだつたが、流産を認めて貰えたりしさによねはいそいそとして、まるで憑かれたやうに、

「いえね、唯遅れただけぢやないの、胸がむかむかしてそれにあれがいつもと違つてとつてもひどかつたの、汚ない話で済みませんけどね」

と、よねはその時の状態を細々とつぶさに、夢中になつて喋るのであつた。

「馬鹿つ、いいかげんにもうよせ」

たまりかねてさう怒鳴つた眞吉の額には、太い痲癩筋が二本、蚯蚓のやうにふくれ上つてゐた。

その中一通り喋つてしまつたよねはどうやら落ち付き眞吉も奥さんの手前何時ものやうな喧嘩にもならず、やがてよねのつけ直した酒にほんのり酔うてくると、

「ひとつ今日は奥さんに僕の喉をきかせませうか」

とよねの三味に合はせて、我が戀は——としんみりしたところをうたつたりした。

やがてすつかり酔つぱらつてしまつたよねは、奥さん失禮、と、もつれた舌でつぶやくと、部屋隅にゴロリと横になつて眠つてしまつた。

「あれですからねえ」

眞吉は訴えるやうに奥さんに云ひ、

「お宅なんか羨やましいですな、それは御主人も無論い

いのでせうが、やつぱり奥さんが好いからだと思ひますねえ」

「まあそんな」

答へる言葉の出ない奥さんは、遅くまでお邪魔してしまつてと立ち上り、卓の上の汚れ物を、臺所へと運ぶのであつた。部屋隅にごろ寝してゐるよねの、きちんと白足袋をはいた淺黒い瘦せた脛が、亂れた着物の裾から露はにのぞき、くされ縁ですよ、低い聲で、眞吉が吐き出すやうにつぶやいた。

眞吉が急に半箇年の豫定で吉林の現場に行くことになり、よねは一緒に従って行くことと云ひ張つたが、眞吉は半年すれば歸るのだから残れと云ひ、その事で夫婦は又争ひをくり返したが、結局よねは眞吉の云ふ通り一人残ることになつた。一人になつたよねのあけくれは、よねが思つたよりもつと寂しく、生活に中心の無くなつた日常は、前よりも一層酒量が増した。半年立てば歸つてくると信じてはゐても、何かこのまま捨てて行かれてしまひさうな、ゆく末のことも頼りないやうな、年下の夫を持つとこんな苦勞をせねばならぬものか、いつそのこと

別れてしまはるか、別れて二度の勤めに出やうかとも考
えてみるけれど、それは餘りに悲しいことだつた。

若い、そして男である眞吉の上には、よねと別れたら
もつと明るい幸福な生活が待つてゐるかも知れない。け
ど、眞吉と別れたよねの前途には、どんな幸福もどんな
明るさも期待することは出来なかつた。三十を過ぎての
藝者稼業の衰れさは、誰よりもよくよねが知つてゐたし
アルコールに蝕まれた身體がどれだけ働けるかも心もと
なく、よねは考えてゐると、氣も狂ふやうな思ひだつ
た。

そんなよねの耳に、どこからともなく眞吉には向ふに
好きな女があるのだといふ噂が傳つてきた。それはまる
で風がもたらすやうに、どこからともなくよねの耳に流
れてきたのだつたが、よねは一應の疑ひを持つてみる餘
裕すらなくそれを信じた。見捨てられるのだ。その思ひ
が、全身を吹き倒してしまひさうな激しい嵐となつて、
よねの心の中を吹きめくつた。お前は身體が弱いのだか
ら大連に残つた方がいいのだと、いつになく優しげに云
つた眞吉の言葉も、さういふことがあつたからなのかと
思へば口惜しく、遂この間までは、いつそ別れてやつて

もいい、とも時には思ふこともあつたよねのだが、さ
ういふ女があると知つた今は、もう絶對に別れることな
んか出来なかつた。未練ではない。女の意地だ、と、よ
ねは狂つたやうに思ふのだつた。この上はもう、眞吉の
眼の前で死んでやるより他はないと、よねは棄て鉢に決
心してしまつた。

顔色が悪い様だが、さう氣づかはしげに怪しむ奥さん
の前を笑つてごまかし、あじあに乗り込んだよねのふと
ころには、買つたばかりのカルモチンが三箱も入つてゐ
た。

満鐵御自慢の超特急、流線型あじあは、様々の乗客の
中にさういふ哀れな一人の女をも交へ、颯爽と朝の廣野
を疾驅して行つた。

一枚張りの大きなガラス窓の向ふには、秋空が美しく
晴れ、低い山脈が濃く濃く起伏し、茶色に熟れた高粱の
穂が澄んだ日光の中でふさふさと風に揺られてゐた。だが
思ひ詰めたよねの眼には、そんな風景は何一つ映らなかつた。

かうして突然自分が出かけて行つたら、眞吉はどんな
に驚くだらう。

よねは眞吉の狼狽した顔を思ひ描いてみた。するとふ
いに、眞吉と世帯を持つまでのあの愉しかつた想ひ出が
よねの胸に、疼くやうに甘く浮び上つてきた。

眞吉だけが無情なのでも無いのだ。眞吉だつてまだ若
いのだもの、もつと若い、もつと女らしいまともな女と
もつと楽しい家庭が持ちたいのだつて無理ではないの
だ。

眞吉だつて可哀想なのだ。

さういふ思ひがチラと胸をかすめ、よねは一瞬、なご
みかけた心の隅で思はず微かに涙ぐむだ。然しよねはす
ぐ逃れるやうにその感情を拂ひ除けた。よねは、よねの
心の中で湧き返つてゐるこの憤懣が、果して眞吉一人に
對してのものなのかどうか、それも今はよく解らないの
であつたけれど、だがよねとして、眞吉以外の誰にこの
切ない悲しみを、憤りを、投げつけることが出来るので
あらう。

畜生々々、死んでやるから、眼の前で死んでやるか
ら。

さう心に叫び乍ら、きつと唇を噛みしめたよねの雙眸
は、激しい怒りと、絶望の悲しみにきらきらと燃え上つ

て、もう一滴の涙も浮んでは來なかつた。

雜

錄

滿洲文藝人々名録

青木 實

大連市秀月臺九七ノ一ノ四。明治四十二年東京に生る。昭和五年來連大連圖書館勤務。昭和七年「作文」創刊、同人。

絲山 貞家

大連市初音町二六九。大連放送局勤務。大連藝術座同人

秋原 勝二 (渡邊淳)

大連市葛町對山寮渡邊方。「作文」同人。

井上 麟二

大連市久方町一〇。「鶯」同人。

今村 義夫

大連市山城町協和寮。新耕詩社同人 櫻桃詩社同人。

安達 義信

新江市清和胡同一一七。大連二中、彦根高商卒業。滿鐵新京支社勤務。舊「樵の木」「作文」同人。著書詩集「一月の河」

大谷 健夫 (大谷武男)

大連市下葵町五一ノ六ノ四。金州小學校卒業、南滿工業學校中途退學、二十歳前後、俗世間を極度に嫌惡し自給自足の生活を夢み、ソローの「森の生活」、カーペンターの「吾が日吾が夢」に共鳴す、その後養鶏に失敗し、俗世間の軍門に降る。その後現在までの生活はかつて嫌惡した俗社

池田 孝

大連市滿鐵本社資料室内。著書「現代支那の教育」

落合 郁郎 (落合利互)

新江市昌平胡同一〇二。「作文」同人 著書詩集「三人集」

石森 延男

大連市彌生町彌生高女内。著書「ま

近東 綺十郎 (懸橋淺夫)

哈爾濱市埠頭區一面街哈爾濱日日新聞社内。昭和四年長春(現新京)に來てから大連、奉天、東京、新京、哈爾濱と何時果てるか分らない放浪を續けてゐます。

齋藤 欣志郎

大連市若狹町二四。新耕詩社同人。

加藤 郁哉

奉天雪見町四一。奉天鐵道總局旅客課勤務。著書詩集「香」「逃水」「滿洲異聞」

坂井 艶司

大連恵比須町九九ノ三。大正七年一月一日佐賀縣に生る。八才渡滿、鞍山中學校卒業。民謡の詩作其他小説二三。

川上 旗男 (川上草子)

大連市山城町修養寮。

佐々木 勝造

大連市山縣通市營住宅。早大専門部出身。舊「マダム、プウランシエ」「作文」同人。

北村 謙次郎

新京崇智路五二蘭交寮。「日本浪漫派」同人。

志賀 清一

吉林敦島街一〇ノ一二ノ二。

小池 亮夫

吉林市四經路四八號。「鶯」同人。

紫藤 貞一郎

大連市滿鐵衛生研究所内。科學ペン俱樂部會員。著書隨筆集「實驗簿餘白」

小杉 茂樹

奉天浪速通四五。明治四十二年二月八日静岡に生る。大正十三年五月十一日渡滿大連に居住す。藝に「戎克」「翅粉」「新大連派」等を創刊し、第三次「樵の木」に加盟するも後考へる所あり脱退、「作文」同人。著書

島崎 曙海

大連市眞金町八二ノ一ノ一。「日本詩壇」「豚」同人。著書三人詩集「南方詩帖」

高尾 憲太郎

大連市葛蒲町九三ノ一。「運動と趣味」主幹。滿洲郷土色研究會同人。

白石 義夫 (冬木羊二)

連京線泉頭小野田洋灰會社。滿洲醫大出身。代表作「青き夜の醫師」「青島から來た女」

高木 恭造

本溪湖滿鐵醫院眼科。滿洲醫大出身

著書 詩集「まるめる」「我が鎮魂歌」

大連市山縣通一四八ノ一〇。著書 詩集「春廟」

八年渡滿、當年一九。現在詩誌「裸跣」同人。

瀧口 武士

大連市霞町八六「鶴」。「新領土」同人。著書 詩集「園」

中島 光夫 (野地耕作)

奉天中央電報局内。著書 詩集「春の基督」

羽室 長靖

奉天住吉町ジャパン・ツーリスト・ビュロー。旅行滿洲」編輯

竹内 正一 (丘莊一)

哈爾濱鐵路圖書館。大正十五年早大佛蘭西文學科卒業、同年大連圖書館勤務、昭和九年一月哈爾濱滿鐵圖書館長に轉勤、越えて昭和十一年四月哈爾濱鐵路圖書館主事となる。「作文」同人。

中村 秀男 (篠垣鐵夫)

間島省延吉康平街。滿洲弘報協會延吉支局。滿洲弘報協會延吉支局主任。著書 詩集「春の基督」

福富 菁生 (福富八郎)

大連市伏見町五八圓山莊。「協和」編輯長。滿洲郷土色研究會同人。著書 詩集「海の馬鹿」

田中 總一郎

大連市東公園町滿洲日日新聞社内。著書 戯曲集「午前八時」

西村 眞一郎

大連市千草町一二五。旅順中學校、法政大學英文科を経て「滿洲タイムス」「滿洲改造」「鞍山日日新聞」記者「滿蒙評論」編輯等。

福家 富士夫

奉天滿洲醫科大學皮膚科内。滿洲醫大出身。同皮膚科勤務。著書 小説集「眠劑」

富田 詩 (高橋敏夫)

奉天稻葉町六六番地一ノ二三。「首」「薔薇派」「文藝都市」「文學公論」等の同人雜誌を経て現在「作文」同人。代表作 僅かに愛着を持つ作品「沼」「落日」「人生の道連れ」

橋本 八五郎

大連市初音町七一。滿鐵學務課圖書館主任。著書「滿洲より母國へ」

吉川 賢一郎

哈爾濱市南崗南四道街二號。明治三十六年三月十七日生。「詩の家」「聲」「九洲藝術」「滿洲郷土色研究會」「作文」同人。著書 詩集「老子降誕」「水の道」「貧しき化粧」民謡集「蒙古十月」散文集「芽柳」其他

富田 充

大連市芙蓉町六一大川啓一方。昭和

宮添 正博 (古城毒)

古川 哲次郎 (武川葉之輔)

大連市青雲臺四四與野ビル。昭和五年發行「赫土」同人、同誌廢刊後昭和八年大連新聞文藝部擔當記者、並に文藝欄編輯。同新聞廢刊後(昭和十年)大連汽船會社調査係入社現在に至る。滿洲ペン俱樂部同人。

水城 雅夫

大連市青雲臺九七岡本方。昭和十一年初め頃より詩文學に興味を持ち詩作研究。裸跣詩社同人。

宮添 正博 (古城毒)

大連市撫津町八十七。盛方。大正三年十二月十九日生、昭和七年郷里唐津中學を卒業渡滿し、關東廳選信講習所入所。入所中、島田榮也氏の紹介により「高粱」に詩一篇を掲載、その頃より詩作するも投稿せず、昭和十一年渤海詩社の同人となる、解散後「裸跣詩社」を現住所に置き、同人詩を發行す、「蠟人形」に主として投稿す。尙、近江の「詩徒園」の同人たり。滿洲電信電話會社社員。

古屋 重芳

大連市桃源臺六二。大正二年三月二十五日生。同人誌「海港風景」「第二詩教徒」の同人を経て、塚本貞一、福野穉、沼田青二等と昭和九年詩誌「出發」(後改題長崎詩人)發刊。昭和十年十二月渡滿。昭和十一年十月より「作文」に加盟。

水野 喜吉 (水野靜芽)

大連市眞金町二六ノ四ノ三。山口縣にて出生當年二十七歳、昭和二年八幡市の「煤煙」同人、下關市吉田常夏氏主宰「燭臺」同人となる。昭和十一年渡滿、「影」を編輯。昭和十一年一月編輯をやめる。昭和十一年末渤海詩社に入り後裸跣詩社に改題となり現在にいたる。

宮原 欣 (中村芳法)

大連市楠町三。「新天地」社長。著書 長篇小説「未來」「國境を越れば」

町原 幸二 (島田幸二)

大連市近江町一五三番地一ノ五島田方。「作文」同人。

三宅 豐子

奉天白菊町三二ノ一ノ一三。出生地東京大正十二年十一月末渡滿結婚。昭和二年二十四歳の時より短歌を初む現在短歌雜誌「あしかび」同人。昭和八年より創作に手を染め昭和九年「作文」に加盟。著書 歌集「七草」

三好 弘光

大連市巴町一〇一。「鶴」同人、五果會會員。

松畑 優人

大連市外老虎灘汐見臺十一。「鶴」同人、五果會會員。

桃北 好澄

新京永樂町新京日日新聞社内。大連市須磨町五二。「鶴」「新領土」

松原 一枝

大連市伏見町十四番地三十二。大連

宮川 靖

八木 橋雄次郎

同人。

山口 慎 一 (大内隆雄)

新京曙町二丁目十六番地。一九二一年長春に移住、二十五年より上海へ、二十九年大連その後東京、奉天を経て三十五年より新京へ。著書 文藝ではないが「支那研究論稿・政治経済篇」

横 澤 宏

(修憲二、寺安鶴十等)

大連市若狭町三〇澄友ビル四階B三號。大正九年來滿、同十一年「曠野詩人」、「赤陽社」同人に参加、同十三年歸國、翌十四年再び來滿、「滿洲詩人」同人に加入、同時に新聞記者生活に入り今日に及ぶ。尙「畸面座」(昭和五年)「滿洲映畫人協會」(昭和七年)等に關係せることあり。現在滿日學藝部員。

吉 野 治 夫

大連市桃源臺一五八。早大佛文科出身、滿日學藝部勤務。「作文」同人。

「G氏文學賞」規約

今回G氏の篤志を以て左に依り「G氏文學賞」を制定す

記

- 一、本賞を「G氏文學賞」と稱し年一回銀時計を授與す。
- 一、本賞は毎年二月授賞し前年中の作品(小説、詩、戯曲評論)の中より選定す。但し同作品は滿洲在住者にして滿洲に於て發表されたるものに限る。
- 一、授賞作品は委員にて決定す。
- 一、授賞作品は「作文」誌上に再掲載す。(但し原稿枚數百枚以内とす。)
- 一、選定委員を左記十名とす。但し缺員を生じたる場合は委員合議に依り補充す。
- 青木 實、大内隆雄、落合郁郎、近東綺十郎、小杉茂樹、城小磯、平田 滋、福家富士夫、八木橋雄次郎、横澤 宏、
- 一、本委員會を漸時大連市秀月臺九七ノ一ノ四作文發行所内に置く。 「G氏文學賞」委員會

G氏文學賞詮衡内規

- 一、詮衡委員は發表月、二月一日迄に候補作品(作名、作品名、發表誌名)を推薦す。
- 但し數件推薦の場合は参考のため順位を附すへし。

一、推薦されし作者名、作品名、發表誌は一覽表を作成し委員に交附す。委員未讀の作品ありたる場合は通知に依り送附、回覽に附す。

- 一、委員は同月二十日迄に記名投票をなし得票數に依り入選を決定す。但し委員の作品推薦されたる際は、該委員は投票の權利を失ふものとす。
- 一、首位同數を生じたる場合は該作品を再投票し尙同數の場合は、委員合議に依り之を決定す。
- 一、首位得票數が委員數の三分の一に満たざる際は委員合議に依り保留することあるへし。
- 一、授賞作品投票委員は、記名、推薦理由を委員會に送致し「括」作文」に發表す。

滿洲文藝年鑑規約

- 一、本年鑑は、滿洲に於て前年中に發表されたる滿洲在住者の作品中評論、詩、小説、戯曲の内より選定、逐年刊行す。
- 一、編纂には、G氏文學賞委員これに當る。
- 一、經費は、G氏よりの金五十圓を基礎とし、不足金は賣上にて充當す。
- 一、發行所は、漸時作文發行所内に置き、刊行責任者には漸時青木委員が當る。

後記

昭和十一年中の業績よりこゝに年鑑第一輯を刊行し得た事は、幾多の不備ありとはいへ、責任者として先づ喜びに絶へない。掲載を快諾された諸家、G氏、及び委員諸氏に厚く御禮申上る。

印刷費暴騰の折柄、當初計畫の約二倍の経費を要した。爲めに廣く贈呈する事が出来なくなつた點深くお詫びしたい。次に當然載るべくして洩れた秀作もあつた。紙数の制限から評論、小説と雙方の業績があつた場合、その何れかを捨てねばならなかつたので特にこの感が深かつた。また大谷健夫氏、人形のやうな女には掲載豫定の處長篇に渉る爲め割愛の止むなきに至つた。申譯ないと思ふ。卷末文藝人名簿(詩、小説、評論關係に限る)も勿々の際として今後の完壁に俟つ、次回よりは作品等も一般より進んで推薦あれば幸ひです。尚、若し賣上純益が出た場合、掲載諸家全部が會員となつてゐる満洲文話會の基金に寄附したいと考へてゐる。

最後に編纂、校正に特に盡力を得た城小確氏に感謝の意を表する。

満洲文藝年鑑 (第一輯)

定價金壹圓貳拾錢

昭和十二年九月二十五日印刷
昭和十二年十月一日發本

大連市秀月臺九七ノ一ノ四

編輯人 青木實

發行所 大連市加賀町六

印刷人 足立孝

印刷所 昭和印刷所

發行所 大連市秀月臺九七ノ一ノ四

G氏文學賞委員會

満洲文芸年鑑

第一輯(第三輯)別冊

一九九三年九月十日發行

解題 西原和海
發行人 久本三多
發行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二番

電話 福岡〇九二(七六)二八九五

振替 福岡一三九四三〇

印刷 アロー印刷株式会社

製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-7512-0510-2